

【釋義】 白細布の 枕詞。袖反ししは 袖を翻すは、人に合圖をする意である。別れて居て、袖を翻した事を歌つてゐる。

吾が夫子が 袖反す夜の 夢ならし まことも君に 逢へりし如し

右二首

【原文】 吾背子之 袖反夜之 夢有之 眞毛君爾 如相有

右二首

【口譯】 吾が君の袖を翻した夜の夢でありませう。本當にあなたに逢つたやうでございました。

【釋義】 夢ならし 夢にあるらしに同じ。自分の見た夢は、あなたの袖を翻した夜の事であつたのでせうと、推量してゐる。句切。まことも君に マコトモは、本當にも、誠にも。逢へりし如し 逢つた様であるの意。夢に人に逢つて、その夜は、君が袖を翻したその夜であらうと云ふ意味の歌である。

三二八二

○

栲領巾の 白濱浪の 寄りも肯へぬ 荒ふる妹に 戀ひつつぞ居る

一に云ふ 戀ふる頃かも

【原文】 栲領巾乃 白濱浪乃 不肯緣 荒振妹爾 戀乍會居 已呂可母

一云 戀流

【口譯】 濱邊の白浪の寄ると云ふが、その寄つても來ぬ氣の荒い妹に、戀ひつゝ居る事があります。

【釋義】 栲領巾の タクは、白い植物性の織物。ヒレは、婦人の服飾。白の枕詞に用ゐてゐる。白濱浪の 濱邊

の白浪である。寄りも肯へぬ 寄る事を承諾しない意。自分の方に親みを見せないのである。ヌは、打消しの助動詞の連體形。荒ふる妹に 馴れない、従順でない女子の意に用ゐてゐる。荒つばい婦人の意である。

かへらまに 君こそ吾に 栲領巾の 白濱浪の 寄る時も無き

右二首

【原文】 加敏良末爾 君社吾爾 栲領巾之 白濱浪乃 緣時毛無

右二首

【口譯】 倒にあなたこそ私に、濱邊の白浪のやうに寄る時もございますぬ。

【釋義】 かへらまに 倒に、あべこべに、反對に、等の意の副詞。栲領巾の白濱浪の 以上の二句は、次の寄るの序となつてゐる。それで主文脈は、君こそ吾に寄る時もなきと、續くのである。寄る時も無き 自分に親み近寄る事も無い意である。上にコンがあるので、ナキと結んでゐる。古格である。

紫は 灰指すものぞ 海石榴市の 八十の衢に 逢へる兒や誰

【原文】 紫者 灰指物曾 海石榴市之 八十街爾 相兒哉誰

【口譯】 紫は灰を混ぜるものでありますよ。海石榴市の八十の衢で逢つたあなたはどなたですか。

【釋義】 紫は灰指すものぞ 紫は、紫草の根から取る染料の名。紫に染めるには、灰を加へて染めたので、灰さ

五問 答

八七五

三二八二

三三一〇

すものであると説明してゐる。此の二句の心は、紫は灰を混ぜるものである。同様に、女子は男子に逢ふべきものであるの意を喩へてゐる。その意味に依つて、此の下の問を起したのである。海石榴市の八十の衢に 既出。二九五一の歌参照。逢へる兒や誰 この海石榴市の賑かな衢で出逢つたあなたは、どなたですかの意である。兒は、相手の女子を親んで呼び掛けてゐる。海石榴市の歌垣の場で出逢つた女に對して、その身の上を尋ねる意味の問である。

たらちねの 母が召す名を 申さめど 路行く人を 誰と知りてか

右二首

【原文】 足千根乃 母之召名乎 雖白 路行人乎 孰跡知而可

右二首

【口譯】 名を言へとおつしやるならば、母の呼ぶ名を申しませうけれども、道を行く人を誰と知つて申しませうか。

【釋義】 たらちねの 母の枕詞。母が召す名を 母親が呼ぶ名前をで、つまり自分の名である。申さめど 申しませうなれど。人に名を告げるのは、其の人に身を許す意味に取れるのである。前の歌に答へて、名を言へと言ふならば言ひもしませうがの意である。誰と知りてか あなたを誰と知つて名を言ふべきでせうの意。人に名を問ふならば、まづ自分を明らかにせよの意味もあるし、又あなたの様に何處の誰とも名も知れぬ様な人には、自分の名は申せませんと、拒絶する意をも含んでゐる。

【餘論】 この二首は、歌垣の歌のやうである。道行く人と婦人との間にかやうな歌が生れ、やがてそれが相聞の歌の基となつて行つたのである。

一三二

すへもなき 片戀をすと 此の頃に 吾が死ぬべきは 夢に見えさや

【原文】 爲便毛無 片戀乎爲登 比日爾 吾可死者 夢所見哉

【口譯】 せむすべもない片戀をすと、此の頃に私の死にさうなのは、夢に見えましたか。

【釋義】 片戀をすと 自分の方だけで戀をするとしての意である。

夢に見て 衣を取り著 装ふ間に 妹が使ぞ 先だちにける

右二首

【原文】 夢見而 衣乎取服 裝束間爾 妹之使曾 先爾來

右二首

【口譯】 夢に見て、衣服を着て用意をする間に、あなたの使が先になりました。

【釋義】 夢に見て 前の歌の夢に見えきやを受けて、言はれる通り夢に見ての意に、答へてゐる。装ふ間に 衣服を着て形を整へる間に。妹が使ぞ 前の歌を持つて来た使を指してゐる。

六古長歌

卷十三には、比較的古い時代の長歌が集められてゐる。今その中から相聞の歌を録する。これは形式上の分類で、前數項の分類の標準とは違ふが、便宜上、この項を立てることとした。

八三三四

敷島の 日本やまとの國に 人多おほに 満ちてあれども 藤浪の 思おもひ纏まとはり 若草の 思おもひ著つきにし 君が目に 戀こひや明かさむ 長ながきこの夜を

【原文】 式島之 山跡之土丹 人多 滿而雖有 藤浪乃 思纏 若草乃 思就西 君目二 戀八將明 長此夜乎
【口譯】 此の日本の國に人は多く満ちてゐるけれども、藤のやうに思ひからまり、若草のやうに思ひよりついたあなたの姿に、戀ひて明しませうか、長いこの夜を。

【釋義】 敷島の 大和の國の一地名から、やがて日本の枕詞になつてゐる。藤浪の 藤の蔓が纏ふと云ふ所から、次の句の纏はりの枕詞になつてゐる。思ひ纏はり 思が離れ難く、纏はりつくを云ふ。若草の 古義に、句を隔て、君の枕詞となつてゐると云ふが、どうであらうか。若草の妻と云ひ馴れてゐるので、妻の語を省いて、若草の妻に思ひつきにしの意に、直に思ひつくの枕詞となつてゐるのではあるまいか。不完全な表現と見るべきであらう。思ひつきにし 思が寄りついてある。君が目に メは、逢ふ事を云ふ。面接の意である。

九三三四

○反歌

敷島の 日本やまとの國に 人二人 ありとし念おもはば 何か歎なげかむ

右二首

【原文】 反歌

式島乃 山跡乃土丹 人二 有年念者 難可將嗟

右二首

【口譯】 此の日本の國に、かの人二人あると思ふならば、何を歎きませうぞ。

【釋義】 人二人 吾が思ふ人が二人の意である。ありとし念はば シは、助辭で、ありと思ふならばの意。せめて二人もか人があらばよからうものを、吾が思ふ人は唯一人のみの意である。何か歎かむ 何を歎きませうぞ、歎く事は無いの意の反語の法である。かの人一人ならずあると思ふならば、歎く事は無いであらうの意。唯一人の君故にと、戀の心の集中する事を歌つてゐる。

○柿本朝臣麻呂の歌集の歌に曰はく

葦原の 水穂の國は 神ながら 言舉ことあひせぬ國 然れども 言舉ことあひぞ吾がする 言幸ことよきく
眞福まふくく坐せと 恙つらみなく 福さきく坐いさば 荒磯浪 ありても見むと 百重波 千重浪に
繁しさ 言舉ことあひす吾は 言舉ことあひす吾は

【原文】 柿本朝臣麻呂歌集歌曰

六古長歌

言上爲吾
言上爲吾
言上爲吾
言上爲吾
言上爲吾
言上爲吾

葦原 水穂國者 神在隨 事舉不爲國 雖然 辭舉叙吾爲 言幸 眞福座跡 恙無 福座者 荒磯浪 有毛見
登 百重波 千重浪爾敷 言上爲吾爲吾

【題意】此の前に少しく似た言葉を用了た歌があつて、その次に出てゐる。人麻呂集から出た歌で、船に乗つて旅立つ人を送つた歌である。

【口譯】この日本の國は神様の思召のまゝであつて、下から何かと言はぬ國であります。しかし私は特に申し上げません。すべて幸福において遊ばせと申し上げます。いまはしい事がなく無事でおいになつたならば、やがても御目にかゝりませうと、幾重にも幾重にも重ねて私は申し上げます。

【釋義】葦原の水穂の國は 日本の國の一名。此の國は海から望んだ時に、葦原の葦の穂が豊に立つてゐる國と云ふ意味である。神ながら 神様のまにまに。神の御心のまにまにの意。言舉せぬ國 コトアゲは、下から上に對して希望、反抗等を申し出るのを云ふ。此の日本國は、それをしない國であると云つてゐる。此の歌では、さう云ふ國體ではあるが、特に自分は神に對して、祝の言葉を申し出すと云ふ内容を歌つてゐる。言幸く 言靈の力に依つて、祝の言葉がその通りに幸福となつて現はれる意味で、言葉通りに幸福にと云つてゐる。眞福く坐せと マは、接頭語。此の歌を贈る相手に、幸福においてなさいと言舉する意である。恙なく ツツミは、禍を云ふ。災難に逢ふとこれを忌んで、つゝみ籠るから云ふ。それがなくて幸福にと云ふに同じ。荒磯浪 枕詞で、同音を重ねて次のアりに冠してゐる。此の歌はかく海に關する語を用ゐてゐるのは、自然、海のあるたに旅行する人を送る歌であることを表してゐる。ありても見むと アリは、生存の意。このまゝに居つて又君を見ようとである。百重波千重浪に繋き モモヘナミもチヘナミも、波の後から後からと立ち重なるを云ふ。

シキは、しげき意で、波が幾重にも重ねるやうに、重ね重ね言舉する意である。言舉す吾は 自分は言舉するの意である。此の句はもと一句だけであつたのであるが、古本には、最後に小字で重ねて同一の句が書いてある。思ふに此の最後の一句を、繰り返して歌つた形のまゝに傳はつたのであらう。それが中世以後、反つて誤として除かれたものであらうと思はれる。今古本に従つてこれを殘しておく。

〇反歌

敷島の 日本ヤマトの國は 言靈の 佐タサくる國ぞ ままさ福ふくとくくありこそ

右五首(三首略)

【原文】 反歌

志貴島 倭國者 事靈之 所佐國叙 眞福在乞其

右五首

【口譯】此の日本國は言靈の佐ける國であります。幸福においてなさいませ。

【釋義】言靈の佐くる國ぞ コトダマは、言語に精靈があつて活躍すると云ふ信仰である。その言語精靈の佐くる國であるその意で、言靈のさきはふ國(巻五、八九四)とも云つてゐる。ま福くありこそ アリコソは、希望の語法。無事にあれかしの意。

隱國の 泊瀬の河の 上つ瀬に 齋杭を打ち 下つ瀬に 眞杭を打ち 齋杭には 鏡を懸け 眞杭には 眞玉を懸け 眞玉なす 我が念ふ妹も 鏡なす 我が念ふ妹も ありと言はばこそ 國にも 家にも行かぬ 誰が故か行かむ

古事記を檢するに曰はく 件の歌は 木梨の輕の太子の みづから身まかりし 時 作りし所なり

【原文】 己母理久乃 泊瀬之河之 上瀬爾 伊杭乎打 下瀬爾 眞杭乎拵 伊杭爾波 鏡乎懸 眞杭爾波 眞玉乎懸 眞珠奈須 我念妹毛 鏡成 我念妹毛 有跡謂者社 國爾毛 家爾毛由可米 誰故可將行

檢古事記曰 件歌者 木梨之輕太子自死之時所作者也

【題意】 左註にもある通り、此の歌は、古事記には、木梨の輕の太子の自殺せられた時の歌として載せてある。此の集には作者は傳へずに、左註で古事記を引いてゐるだけであるが、歌の内容から云つて、餘程特殊の場合の歌である事が知られる。

【釋義】 隱國の 枕詞。泊瀬は山の中に隠れた土地であるから、隠つてゐる國の意味であると云ひ、又一説に泊瀬は昔の墓地だから、隱場所の意に云ふとも云つてゐる。この歌でも泊瀬川のほとりに祭場を設ける由であつて、墓地と云ふ事も又捨て難い説である。齋杭を打ち 齋杭は神聖なる柱。眞杭を打ち マは、接頭語。以上上の方の瀬に齋杭、下の方の瀬に眞杭と分けて歌つてゐるが、これは唯對句に分けて一つ事を云つたままで、あちらこちらの瀬に杭を打つと云ふだけの意である。クヒは、材木で相當の長さを持つものと思はれる。以下齋杭には眞杭にはと分けて居るのも同様で、唯杭に鏡や眞玉を懸けると云ふまでである。さて鏡や玉を杭に懸けるのは祭の爲で、これに依つて天から神を招き下さうとするのである。眞玉なす 眞玉のやうなの意で、次の鏡なすも同じ。眞玉や鏡のやうな吾が妻をと云ふ心である。誰が故か行かむ 我が愛する妹がありと云はゞ行きもしようが、それでなくては誰故に行きませうぞの意である。

【參考】 上にも云ふ様に、この歌は古事記下巻にも出てゐる。終の方が小異があるから、今これを出して置く。隱國の泊瀬の川の、上つ瀬に齋杭を打ち、下つ瀬に眞杭を打ち、齋杭には鏡をかけ、眞杭には眞玉をかけ、眞玉なす吾が思ふ妹、鏡なす吾が思ふ妻、在りといはゞこそよ、家にも行かぬ、國をも偲ばぬ。

○反歌

年わたる までも人もは 有りとふを 何時の間ぞも 吾戀ひにける

【原文】 反歌

年渡 麻豆爾毛人者 有云乎 何時之間曾母 吾戀爾來

【口譯】 年を経るまでも人は堪へてあると云ふに、どれ程の間であることぞ、自分の戀をしてゐる事は。

【釋義】 年わたるまでも 年を経過するまでに、長い時の間にも、人は有りとふを 人は戀に堪へても有りと云ふの意。何時の間ぞも どれだけの短い間にも堪へずして戀をする事だと、みづから責めてゐる心である。

【餘論】 前の長歌は、古事記には反歌を伴つてゐない。此の反歌も、前の歌の反歌として適切でない様である。何時か紛れて反歌となつたものであらう。猶、藤原麻呂の歌に、よく似たのがあから次に次に出しておく。よくわたる人は年にもありとふを何時の間にもぞも吾が戀ひにける(卷四、五二三)

五三六二

○或る書の反歌に曰はく
世間を 愛しと思ひて 家出せし 吾や何にか かへりて成らむ
右三首

【原文】 或書反歌曰

倦迹は元
曆校本等
による。

世間乎 倦迹思而 家出爲 吾哉難二加 還而將成
右三首

【題意】 或る書に前の長歌の反歌として載つてゐる由である。しかしこれも内容から云つてあまり適切でない。恐らくは後に結びついたものであらう。

【口譯】 世の中を憂く思つて出家した私が、何とてか更に歸つて戀を遂げませうや。

【釋義】 家出せし 家出は、出家して佛門に入るを云ふ。かへりて成らむ 家に歸つて何をか成し遂げようの意である。ナラムは、男女間の關係をなす事を云ふであらう。

八三二六

○
三諸の 神奈備山ゆ との曇り 雨は降り來ぬ 雨霧ひ 風さへ吹きぬ 大口の
眞神の原ゆ 思びつつ 還りにし人 家に到りさや

【原文】 三諸之 神奈備山從 登能陰 兩者落來奴 雨霧相 風左倍吹奴 大口乃 眞神之原從 思管 還爾之

人 家爾到伎也

【口譯】 三諸の神奈備山から空がかき曇つて雨は降つて來ました。雨がしぶいて風さへ吹いて來ます。大口の眞神の原を通つて、物を思ひながら歸つて行つた人は、家に到りましたでせうか。

【釋義】 三諸の神奈備山ゆ 飛鳥のほとりの山の名。ユは、そこから出發しての意を表してゐる。との曇り 一面に空が曇つて。たな曇りとも云ふ。天霧ひ 天が霧のやうに立ち籠めるのを云ふ。風に吹かれて雨が細くなるのである。大口の眞神の原ゆ 大口の眞神は、狼を恐れる心から尊んで云ふ。もと狼が居たので原の名に付いてゐる。飛鳥の眞神の原(卷二、一九九)とも云ふ。思びつつ 自分の事を思ひつゝの意。還りにし人 昔は男子がその妻の家を訪ふ風習であつたから、自分の家に歸る人を見送つて思ひ遣つてゐる心である。家に到りさや その作者の許から歸つた人が、雨に逢はないで無事にその家に行き著いたかと疑つてゐる。

○反歌

還りにし 人を念ふと ぬばたまの 其の夜は吾も 宿も寐かねてき
右二首

【原文】 反歌

還爾之 人乎念等 野干玉之 彼夜者吾毛 宿毛寐金手寸

右二首

【口譯】 歸つて行つた人を思ふとして、その夜は私も眠りかねました。

六古 長 歌

九三二六

釋は元曆
校本等に
よる。

【釋義】ぬばたまの 夜、黒等の枕詞。其の夜は吾も 人の歸つた後で俄に風雨のあつた其の夜である。宿も寐かねてき イは睡眠。ネは、その動詞。カネデキは、得なかつたの意。

三二七

さし焼かむ 小屋の醜屋に 搔き棄てむ 破蘆を敷きて うち折らむ 醜の醜手を
さし交へて 宿らむ君ゆゑ あかねさす 晝はしみらに ぬばたまの 夜はすがら
に この床の ひしと鳴るまで 嘆きつるかも

【原文】 刺將燒 小屋之四忌屋爾 搔將棄 破蘆乎敷而 所捨將折 鬼之四忌手手 指易而 將宿君故 赤根刺
晝者終爾 野干玉之 夜者須柄爾 此床乃 比師跡鳴左右 嘆鶴鴨

小屋は元
曆校本等
に格は元
所校本に
よる。

【口譯】 焼いてしまふやうな汚い小屋に、棄ててしまふやうな破れ蘆を敷いて、たたき折つてしまふやうな醜い手をさし交して寐てゐるでありませう君故に、晝間は終日、夜はよもすがら、この床がひしと音がするまでに歎息した事でありませう。

【釋義】 さし焼かむ サシは、焼くの意を強めるだけに添へた語。焼いてしまひたいの意。小屋の醜屋に シキは、すべて罵倒する爲につけてゐる。シコとも云ふ。時鳥をシコホトトギスとも悪く云つてゐる。こゝは小さなみつともない家の意で、罵倒してゐる。シキ又はシコは、美麗でなくあるものを云ふ。搔き棄てむ カキはステの意を強める爲につけてゐる。棄ててしまひたいの意である。醜の醜手を 吾が思ふ人の手を、シキを二つ重ねて罵倒してゐる。玉手の反對の心である。さし交へて 交へての意で、互に手をさし交へての意。宿ら

む君故 上に述べたやうな事情で寐てゐるでせう君故。あかねさす 赤味を帯びる意で、晝の枕詞に使つてゐる。晝はしみらに 終日の意である。シミラニは、まだよく解らない語である。シメラニとも用ゐてゐる。夜はすがらに 終夜の意である。ひしと鳴るまで ヒシは、擬音で、自分の居場所がきしむまでに歎息をした事であると云ふ意味である。

【餘論】 此の歌は、作者の思ふ人を出来る限りの悪口を以つて罵倒してゐる。如何にも、思ふ兒が他人の許に走つた腹立しさがよく表はれてゐる。しかし世を呪ひ人を恨む所にゆかずに、結局終夜自分が歎息すると云ふに止まつてゐるのは、根が人を愛する心が深く、そのあまりに悪く云ふに過ぎないからで、本心からの罵倒でないのであらう。

○反歌

わが情 焼くも吾なり 愛しきやし 君に戀ふるも わが心から

右二首

【原文】 反歌

我情 焼毛吾有 愛八師 君爾戀毛 我之心柄

右二首

【口譯】 私の心を焼くのも私であります。愛すべき君に戀をするのもやはり自分の心からであります。

【釋義】 焼くも吾なり 心が強く燃えるのも自分の心からであるの意。愛しきやし 愛すべきの意で、ヤシは、

三二七

拍子の語。

五三二九

うち日さつ 三宅の原ゆ 直土に 足踏み貫き 夏草を 腰になづみ 如何なるや
 人の子ゆゑぞ 通はすも吾子 諾な諾な 母は知らじ 諾な諾な 父は知らじ 蜷
 の腸 か黒き髪に 眞木綿持ち あざさ結び垂り 大和の 黄楊の小櫛を 抑へ挿
 す 刺細の子は それぞ吾が妻

常土は四本願寺本等による

【原文】 打久津 三宅乃原従 常土 足迹貫 夏草手 腰爾莫積 如何有哉 人子故曾 通笠文吾子 諾諾名 母者不知 諾諾名 父者不知 蜷勝 香黒髪丹 眞木綿持 阿邪左結垂 日本之 黄楊乃小櫛乎 抑刺 刺細子 彼曾吾孀

【口譯】 三宅の原から踏足で土を踏んで、夏草を腰で分けて、どう云ふ子故にお通ひになるのですか、わが子よ。本當に母上は知りますまい。父上も知りますまい。眞黒な髪に木綿を以つてあざさを結び垂れて、立派な黄楊の櫛をさしてゐる美しい子は、それが私の妻でございます。

【釋義】 うち日さつ 打日さすとも云ふ。宮の枕詞で、日がさし渡つてゐる意であらう。三宅の原ゆ 何處とも知れない地名である。直土に ぢかの土に。足踏み貫き 土の上をぢかに歩いて行く由である。フミノキは、歩行に骨を折る心である。腰になづみ ナヅミは、難澁する意味。如何なるや ヤは、添へて云ふ助辭。無いのと同じ。如何なる人の子と續く語法である。通はすも吾子 カヨハスは、御通ひになるの意。上に如何なると

六三二九

云ふ語があるので、どう云ふ人の子の爲に通はるかかと問ふ意味になる。アゴは、若き人に對して親んで云ふ語。此の歌は、始から此の句までが一段をなし、父母が、通つてゐる吾が子に對して問うた意味になつてゐる。しかしして此の次の句から下が、その間に對する答の部になつてゐる。但し實際は、親が問うたのではなくして、作者自身が自問自答の形に依つてこの歌をなしたのであらう。諾な諾な ウべは、本當に、誠に、等の意。ナは、言葉を丁寧にする爲に添へてゐる。母は知らじ 上の問の部を、若者の父母が問ふ意味に取りなして、本當にあなた方は御存知ありますまいの意味に云つてゐる句。蜷の腸 黒の枕詞。蜷と云ふ貝の腸が黒いから云ふさうである。か黒き髪に カは、接頭語。か青等の例がある。眞木綿持ち マは、接頭語。木綿を持つての意。あざさ結び垂り アザサは、諸説があつて未詳である。誤字説もあるが信ぜられない。恐らくは、女子の黒髪に木綿を以つて飾を結んだのであらう。大和の 黄楊の小櫛の美事なのを譽める爲に冠してゐる。抑へ挿す 櫛をしかと挿す意である。刺細の子は サスタへは、未詳。しきたへの誤とも云ふ。何れにしても子を譽める語である。それぞ吾が妻 自分の通つて行く女子を指して、あれが吾が妻であると父母に告げた句である。

○反歌

父母に 知らせぬ子ゆゑ 三宅道の 夏野の草を なづみ來るかも
 右二首

【原文】 反歌

六古 長 歌

父母爾 不令知子故 三宅道乃 夏野草乎 茶積來鴨

右二首

【口譯】 父母に知らせない人故に、三宅へ行く道の夏野の草を押し分けて来る事です。

【釋義】 知らせぬ子ゆゑ 内緒にしておく妻故の意。三宅道の 三宅に行く道の。なづみ来るかも 骨を折つて押し分けて来るよの意。

【餘論】 前の長歌に、親が問ひ、それに答へた形の歌にしたのを忘れて、父母に知らせぬ兒と云つてゐるのは、却つておもしろい。

三三三〇

里人の 吾に告ぐらく 汝が戀ふる 愛し夫は 黄葉の 散り亂りたる 神名火の
この山邊から 或本に云ふ ぬばたまの 黒馬に乗りて 河の瀬を 七瀬渡りて う
らぶれて 夫は逢ひきと 人ぞ告げつる

【原文】 里人之 吾丹告樂 汝戀 愛妻者 黄葉之 散亂有 神名火之 此山邊柄 或本云 彼山邊 烏玉之 黒馬爾乘而 河瀬乎 七瀬渡而 妻觸而 妻者會登 人曾告鶴

【口譯】 里の人の私に言ふ事には、そなたの戀うてゐる愛すべき夫は、黄葉の散り亂れてゐる神名火のこの山のほとりから、黒い馬に乗つて河の瀬を七瀬も渡つて、物寂しさうにして夫は行つたと、人が告げました。

【釋義】 吾に告ぐらく 自分に告げる事はの意。愛し夫は 愛してゐる夫は。七瀬渡りて 河の瀬をあちらこちら

三三〇

らと渡つて行く意で、河に沿うて山を登り下りする時の叙述。うらぶれて 寂しく落ちぶれての意。人ぞ告げつる 上の吾に告ぐらくを受けてこれを結んでゐる。中の「汝が戀ふる」から「夫は逢ひき」までが里人の話した言葉である。

○反歌

聞かずして 默然あらましを 何しかも 公が正香を 人の告げつる

右二首

【原文】 反歌

不聞而 默然有益乎 何如文 公之正香乎 人之告鶴

右二首

【口譯】 聞かないでそのままにも居りませうものを、何とてか君の本當の有様を人が告げたのでせう。

【釋義】 默然あらましを そのままに黙つても居りませうものを、さうでなかつたの意である。公が正香を タダカは、人の正しき有様である。

【餘論】 右の長歌と反歌とは、相聞の部に入つてはゐるが、むしろ挽歌として適切な内容を持つてゐる。自分の愛する夫が、黄葉の散る山邊を通つて、黒い馬に乗つて、河の瀬を渡つて山深く入つて行つたと云ふ事は、印象的な句であるが、死んだ人を山に送つた事を喩へてゐる様である。挽歌に入れるべきを、編者が誤つて相聞に收めたのであらう。

默然は元
曆校本に
よる。

三三一

○
隱口の 泊瀬の國に さ結婚に 吾が來れば たなぐもり 雪はふり來 さ曇り
雨は降り來 野つ鳥 雉とよみ 家つ鳥 鶏も鳴く さ夜は明け この夜は明けぬ
入りて且眠む この戸開かせ

雲來は元
曆校本等
による。

【原文】 隱口乃 泊瀬乃國爾 左結婚丹 吾來者 棚雲利 雪者零來 左雲理 雨者落來 野鳥 雉動 家鳥
可鶏毛鳴 左夜者明 此夜者旭奴 入而且將眠 此戸開爲

【口譯】 泊瀬の國に結婚を私がしに來れば、空かき曇つて雪は降つて來、又雨は降つて來ます。雉は鳴き立て、
鶏も鳴きます。夜は正に明けました。入つて寐ようと思ひます。此の戸をお開け下さい。

【釋義】 泊瀬の國に 大和の内の泊瀬の部分古い稱呼に従つて泊瀬の國と云つてゐる。此の歌の傳來が相當に
古いのであらう。さ結婚 サは、接頭語。ヨベヒは、人を外から呼ぶ意が元で、婚姻を云ふ。たなぐもり 前
に出たとのぐもりと同語で、一帯に曇る事である。野つ鳥 雉は野に棲む鳥だから枕詞としてゐる。雉とよ
み トヨミは、音をたてる事。家つ鳥 鶏は家に飼ふ鳥で枕詞としてゐる。鶏も鳴く カケは、鶏の別名。雉
や鶏の鳴く事で、夜の明ける事を表してゐる。この戸開かせ 女子の家の前で歌つてゐる意で、此の戸をお開
けなさいと云つてゐる。ヒラカセは、開くの敬語の命令法である。

【餘論】 この歌は餘程古くから歌ひ傳へられたもののやうである。古事記の上卷にある八千矛の神の歌に、同じ
句が用ゐられてゐる。古史説話の中の歌と見るべきものである。この古事記の歌は先に出したからこゝには

省く。

三三一

小國丹は
元曆校本
による。

○反歌
隱口の 泊瀬小國に 妻しあれば 石は履めども 猶ぞ來にける

【原文】 反歌

隱來乃 泊瀬小國丹 妻有者 石者履友 猶來來

【口譯】 泊瀬の國に妻があるから、石は履んでも猶やつて參りました。

【釋義】 泊瀬小國に 泊瀬の土地の小さく纏まつてゐるのを表してゐる。

【餘論】 この長歌及び反歌は、問答の歌の中の問の部分であつて、猶答の長歌と反歌とがあるのであるが、それ
は參考までに次に記して置くに止める。

隱國の長合小國に、結婚爲す吾がすめるぎよ、奥床に母は睡たり、外床に父は寐たり、起き立たば、母知りぬ
べし、出でゆかば父知りぬべし、ぬばたまの夜は明けゆきぬ、幾許も念ふ如ならぬ隠り夫かも(卷十三、三三一
二)

反歌
川の瀬の石ふみ渡りぬばたまの黒馬の來る夜は常にあらぬかも(卷十三、三三一三)

つぎねふ 山城道^セを 他夫^{ひとづま}の 馬より行くに 己夫^{おのづま}し 歩^{かち}より行けば 見るごとに
哭^なのみし泣^なかゆ 其思^{おも}ふに 心し痛し たらちねの 母^{はは}が形見^{かたみ}と 吾^{わが}が持たる ま
そみ鏡^{かみ}に 蜻蛉^{あまつひれ}領巾^{りょうきん} 負^おひ竝^{なら}め持ちて 馬^{うま}かへ吾^{わが}が夫^せ

【原文】 次嶺經 山背道乎 人都末乃 馬從行爾 己夫之 步從行者 每見 哭耳之所泣 曾許思爾 心之痛之
垂乳根乃 母之形見跡 吾持有 眞十見鏡爾 蜻蛉巾 負竝持而 馬替吾背

【口譯】 山城の國に行く道を、他の人が馬に乗って行くのに、私の夫が歩いて行くのを見る毎に涙が溢れます。
それを思ふと心が痛みます。母の形見として私の持つてゐる澄んだ鏡に薄物の領巾を併せて、持つて行つて馬
に御換へなさいませ、あなた。

【釋義】 つぎねふ 枕詞。語義未詳。馬より行くに 馬から行くにで、馬によつて行く意である。哭のみし泣か
ゆ シは、助辭。泣きにのみ泣かれる意。まそみ鏡に 明に澄んだ鏡である。蜻蛉領巾 蜻蛉の羽のやうな透
き通つた織物の領巾。「蜻蛉羽の袖ふる妹を」(卷三、三七六)とも用ゐてゐる。負ひ竝め持ちて 身につけて、
並べて持つて。馬かへ吾が夫 カへは取り換へる義。馬と取り換へよで、馬の借り賃にせよの意である。

○反歌

泉河 渡瀬^{わたりせ}ふかみ わが夫子^{せこ}が 旅ゆき衣^{くるも} ひづちなむかも

【原文】 反歌

泉河 渡瀬深見 吾世古我 旅行衣 蒙沾鴨

五三三一
泉川は元
曆校本等
による。

【口譯】 泉河の河渡りをする場所が深いので、吾が君の旅行の衣服がぬれるでありませうよ。

【釋義】 泉河 木津川の古名。大和から山城へ出た所を流れる。渡瀬ふかみ ワタリセは、河渡りをする淺瀬の
場所。フカミは、深さに。ひづちなむかも ヒヅチは、濡れる事、河の水で濡れるであらうかと疑ひ且歎いて
ゐる。

○或る本の反歌に曰はく

まそ鏡 持たれど吾は しるしなし 君が歩^{かち}行より 艱難^{むづ}み行く見れば

【原文】 或本反歌曰

清鏡 雖持吾者 記無 君之步行 名積去見者

【口譯】 清らかな鏡を持つてゐても、私は其のかひがございませぬ。あなたが歩行をして難儀をして行くのを見
ますると。

【釋義】 持たれど吾は 持つて居れど自分のはの意。君が歩行より あなたが歩行をして。

馬替^{まか}はば 妹歩^{いもあ}行ならむ よしゑやし 石は履^かむとも 吾^{わが}は二人行^{ふたり}かむ

右四首

【原文】 馬替者 妹步行將有 縦惠八子 石者雖履 吾二行

右四首

六古 長歌

【題意】 此の歌は、前の婦人の歌に對する夫の答歌である。反歌ではない。

【口譯】 馬を替へましたらばあなたが徒歩でありませう。よしや石を履むにしても私は二人で行きませう。

【釋義】 馬替はば 鏡と領巾とをもつて馬に取り換へたならばの意で、カハバは、換へたならばの意。買ひ取る意ではなくして借りるのであらう。よしゑやし ヨシと云ふ意味を強く調子づけて言ふ語。よしや、たとひ等の意味になる。

七旋頭歌

旋頭歌は、長歌と同じく歌の體の一つである。集中往々にして旋頭歌を以つて綱目をたててゐるから、今もその形のものを集めておく。

五七二二七

住吉の 小田を刈らす子 奴かも無き 奴あれど 妹が御爲と 私田刈る (人麻呂集)

【原文】 住吉 小田刈爲子 賤鴨無 奴雖在 妹御爲 私田刈

【口譯】 住吉の田を刈つておいでになる子は、奴が無いのですか。奴は有りますが、妹の御爲にと私田を刈つて居ります。

【釋義】 小田を刈らす子 ヲダは、田に同じ。カラスは、刈るの敬語法。奴かも無き 奴が無いのですかの意。

ヤツコは、奴婢階級の者で、勞働に従事するもの。みづから田を刈つてゐるのを怪んで問ふのである。以上の三句は、田を刈る人に對して問の形になり、下の三句は、これに對して答の形を取つてゐる。みづから問ひ、みづから答へたものであらう。私田刈る ワタクシダは、官から公然と與へられた田の反對で、私有物として持つてゐる田を云ふ。みづから開墾し、又は買ひ入れなどして得てゐる田である。吾が思ふ婦人に好意を示す爲に、その君の私有の田を、男が自分で田を刈つてやつてゐる事を歌つてゐる。

春日なる 三笠の山に 月の船出づ 遊士の 飲む酒杯に 影に見えつつ

【原文】 春日在 三笠乃山二 月船出 遊士之 飲酒杯爾 陰爾所見管

【口譯】 春日にある三笠の山に月の船が出た。風流人の飲む酒杯に影に見えながら。

【釋義】 月の船出づ 月を船に喩へてゐる。前山に月の昇つたのを船が出たと云つてゐる。遊士の ミヤビヲは、風雅な人、大陸風に文筆を解する人の意で、今一座に集つて酒を飲んでゐる人達を稱してゐる。影に見えつつ 月の光が酒杯に映るのをかく言つてゐる。

新室の 壁草刈りに 坐し給はね 草の如 依り合ふ未通女は 君がまにまに (人麻呂集)

【原文】 新室 壁草刈通 御座給根 草如 依逢未通女者 公隨

七旋頭歌

八九七

五七二二九
酒杯は元
曆校本等
による。

一三三五

【口譯】新室の壁の草を刈りにお出でなさいませ。草のやうに依り合ふ未通女は、あなたの御意のまゝでございます。

【釋義】新室の壁草刈りに ニヒムロは、新築の家。カベクサは、壁土を付ける料に草を結び付けてあるのが、土を塗つた上に現はれてゐるのを刈り取るのを言ふ。つまり新築の家の壁の仕上げを言ふのであるが、新築の落成を意味する事になるので、落成祝にお出でなさいの意である。坐し給はね 御出でなさいと乞ふ語法。卷頭の雄略天皇の御製の歌に、「名告らさね」とあると同じ語法。ネは、助辭で、他に對して希望を表してゐる。以上の三句は一段である。總じて旋頭歌は、始の三句で一段をなし、更に省みて次の三句を言ふ形式になつてゐる。旋頭歌の名も、此の形式から出たものである。草の如 上の壁草を受けて草の如と言ひ、多く寄り集る未通女達の形容に用ゐてゐる。依り合ふ未通女は 諸方から寄り集つて來る未通女はである。君がまにまにあなたの御隨意ですの意で、上代の新室壽の夜の風習が思はれる。

二二三五

新室を 踏み鎮む子し 手玉鳴らすも 玉の如 照らせる君を 内にと白せ (人麻呂集)

【原文】新室 踏靜子之 手玉鳴裳 玉如 所照公乎 内等白世

【口譯】新室を踏み鎮める子が手玉を鳴らしてゐる。玉のやうに照り輝く君を内へと御案内なさい。

【釋義】踏み鎮む子し 歌を唱つて舞ひ、新室を祝ひ鎮める子で未通女達を云ふ。シは、助辭で、その子を強く指してゐる。手玉鳴らすも タダマは、手の飾の玉で、婦人の身に著けるもの。足玉も手珠もゆらに織る機を君が

二二三五

御衣に縫ひ堪へむかも(卷十、二〇七五)玉の如 上の手玉の縁でこの句を起してゐる。照らせる君を 玉のやうに照り輝いてゐる意で、祝に來た男子を指してゐる。内にと白せ 内に御入りなさいと言へとの意で、中で指圖をしてゐる語法。

めぐしと 吾が念ふ妹は 早も死ねやも 生けりとも 吾に依るべしと 人の言は なくに (人麻呂集)

【原文】恵得 吾念妹者 早裳死耶 雖生 吾適應依 人云名國

【口譯】かはゆいと私の思ふ女は早く死んでしまへ。生きて居ても私に寄るであらうと人が言はない事である。

【釋義】めぐしと 略解にウツクシと讀んでゐた。今新考の説に依つて讀み改める。かはゆしと云ふ意味である。早も死ねやも シネは、命令法で、ヤは、咏歎の助辭である。早くも死んでしまへと云ふ意である。人の言は なくに 人が言はぬ事であるの意。人と云ふのは世人で、誰もさう言つて呉れないと、絶望の意を表してゐる。

【餘論】集中、死と云ふ語を用ゐてゐる歌はかなり多いが、多くは自分が死んだ方がよいと云ふ意味の歌であつて、異性に對して死ねと云ふ様な亂暴な言を吐いた歌は外には無い。その意味でこの歌は極めて珍しく強い事を言つたものと云ふ事が出来る。

二二三六

人の親の 未通女兒居ゑて 守山邊から 朝朝 通ひし君が 來ねば哀しも (人麻呂集)

七旋 頭 歌

呂集

【原文】 人祖 未通女兒居 守山邊柄 朝朝 通公 不來哀

【口譯】 人の親が未通女を居させて番をしてゐるその守山のほとりから、毎朝毎朝通つて來た君が來ないから悲しい事であります。

【釋義】 人の親の未通女兒居ゑて 以上は親が娘を置いて堅く番をしてゐる意味で、次の守山の序となしてゐる。守山邊から モルヤマは、地名。飛鳥のほとりの山の名であらうと云はれてゐる。その山の邊から毎朝通つて來た君の來なくなつた事を歎いてゐる歌である。

青み蔓 依網の原に 人も逢はぬかも 石走る 淡海縣の 物がたりせむ（人麻呂集）

集

【原文】 青角髮 依網原 人相鴨 石走 淡海縣 物語爲

【口譯】 此の依網の原で人に逢ひたいものである。淡海の國の御話を致しませう。

【釋義】 青み蔓 青い蔓草の意である。アヲミは、形容詞の古い連體形。青い蔓草の生えてゐる原の意。次の句に懸つてゐる。依網の原に 三河の國の地名であると言ふ。人も逢はぬかも 人も逢はぬか、逢へかしの意。石走る 淡海の枕詞。淡海縣の アフミは、遠江を云ふと云はれてゐる。しかしそれも確説とは云ひ難い。依網の原を三河とするので、その隣國の遠江と云ふに縁が近いだけである。アガタは、任國を云ふ。

第三章 人事雜題

人事に關する諸種の歌のうち、相聞の歌は前に出した。その以外のものをこゝに集めて、傳説、世談、臨時、長歌雜題、無常附虛無、挽歌の項目を立てる。これらの分類は、便宜上の分類に過ぎないが、ほぼその含む所を知り得るであらう。

一傳 說

傳説中の歌として傳へられるもの、および後人が、傳説を歌つたものを收める。この以外、上編にも大和三山傳説、浦島子、菫原の處女、眞間の手古奈を歌つたもの等は、傳説を取り扱つたものとして注意すべきである。

○仙 柘 枝 の 歌 三 首

霞岑り 吉志美が嶽を 險しみると 草取りかなわ 妹が手を取る

右の一首は 或は云ふ 吉野人味稻の 柘枝の仙媛に與へし歌なりと 但柘枝傳を見るに この歌あることなし

【原文】 仙柘枝歌三首

霞岑 吉志美我高嶺手 險跡 草取可奈和 妹手手取

一傳 說

右一首 或云 吉野人味稻與三柘枝仙媛二歌也 但見三柘枝傳 無有_レ此歌

【題意】 吉野の仙女、柘の枝の歌と傳へる。左註によれば、或る人がいふに、吉野の人味稻といふものが、柘の枝の仙媛に與へた歌だといふことである。然し柘枝傳といふ文を見るに、この歌は見當らない。以上が左註の記事である。

柘の枝の傳説は、その詳細が傳はらない。ただ萬葉集のこの歌等三首と、懷風藻の詩と、續日本後紀の長歌とに、断片的な記事があるだけである。今これらによつて大體の筋を述べると、吉野に味稻（美稻、熊志禰と書くも同人である）といふ漁夫が居て、吉野川に築を渡して魚を捕つてゐた。然るに柘の木（桑の類）の枝が流れて来て、築に掛かつたので、これを取り揚げると、美女に化し、遂に味稻と通するに至つた。後、その仙女は味稻と別れて歸り去つたといふ筋である。柘枝傳といふは、この傳説を文章（多分漢文）に綴つたもので、その中に歌も入つてゐるが、この歌は見當らないといふのである。

【口譯】 吉志美が嶽の嶮しさに、草を取りかねて、妹の手を取ることである。

【釋義】 霰零り 枕詞。霰が零つて、きしきしと音がするといふ意に、吉志美に冠するのであらう。吉志美が嶽を 山の名であらうが、所在未詳である。吉野山中の傳説の歌とすれば、吉野山中の一嶺であらうが、後に記す如く、肥前の國の杵島山の訛とも云ひ得られよう。草取りかなわ この句はよくわからない。草取りかねての意としても、説明はつき難い。誤字説は別として、この儘では、外にクサトルカナワとも讀める。然らばカナは感動詞。ワは拍子の詞である。しかしこの集には、カナは他に一つも無い。かつ五句との連絡がむづかしい。

【餘論】 この歌は、肥前國風土記の佚文（萬葉集註釋に引く）にも見えてゐる。それには、肥前の國の杵島山の

歌垣の歌としてである。その歌、

霰降る杵島が嶽を嶮しと草取りかねて妹が手を取る

これならばよくわかる。又、常陸國風土記に、杵島曲を唱ふとあるも、この歌であらうと云はれてゐる。諸國に行はれたものでもあらう。柘の枝の傳説中にこの歌が歌はれたといふも、流行歌としての意味であらう。その詞句が多少の轉訛を受けてゐるのも自然のことである。

この夕 柘のさ枝の 流れ來ば 築は打たずて 取らずかもあらむ

右一首

【原文】 此暮 柘之左枝乃 流來者 築者不打而 不取香聞將有

右一首

【題意】 柘の枝の傳説を取り扱つたもので、後人の作であらう。左註に右一首とあるだけで説明が無い。もつとも舊本には、この右一首の下に、此下無詞諸本同とあるが、それは、萬葉集校訂者の言で、もとの詞で無く、古本には無い詞である。

【口譯】 この夕に、柘の枝が流れて來たならば、築は打たないで、取らないでもありませんか。

【釋義】 柘のさ枝の ツミは桑の類。サは接頭語。築は打たずて ヤナは、川の水を塞いで、簀の上を流れしめ、流れ下る魚だけを、その簀で通さずに捕へる構造の漁法。それを川に仕掛けておくので、ウツといふ。今は、それをしないでの意。取らずかもあらむ 吉野の味稻は、柘の枝を取つて悲別にも會つたのであるが、自

分は、今柘の枝が流れて來ても、取らずにおかうかと躊躇する語法である。

三三七

古に 築打つ人の 無かりせば 此間もあらまし 柘の枝はも

右の一首は 若宮年魚麻呂の作なり

【原文】 古爾 梁打人乃 無有世代 此間毛有益 柘之枝羽裳

右一首 若宮年魚麻呂作

【題意】 前の歌と同じく、柘の枝の傳説を取り扱つたものであるが、これは、左註に明に若宮年魚麻呂の作とある。この下篇には、作者未詳のものに限つて收むべきであるが、今佚名氏の柘の枝の傳説の歌を收めるに併せて、例外ではあるか、便宜上これをも收めておく。若宮年魚麻呂は、傳は未詳であるが、他にすぐれた歌を誦したことが傳つて居り、その作品としてこの歌を留めてゐるのは珍しい。宴席に侍して興を助けた、聲のよい歌うたひであらうと思ふ。或は柘の枝の傳説の一段を語つて、さてこの追和の作に及んだであらうか。これは臆測に過ぎて、筆者としては庶幾しない態度の説ではあるが、とにかく附記しておく。

【口譯】 昔の代に築を打つ人が無かつたならば、今も残つてゐるであらうものを、その柘の枝は。

【釋義】 此間もあらまし ココは、今のこの時。今もあるであらうものをと、假設推量の語法である。柘の枝はも 柘の枝はまあと詠嘆する語氣で、その柘の枝はどうしたことぞと問ふ語氣を含んでゐる。古人が、いづらと搜し索める意であると説いたのは、この語氣である。

〇七夕

天の漢 水陰草の 秋風に 靡かふ見れば 時は來にけり (人麻呂集)

【原文】 七夕

天漢 水陰草 金風 靡見者 時來々

【題意】 支那の傳説に、牽牛星と織女星と、天河を隔てて住み、ただ年に一度、七月七日の夕に、牽牛が河を渡りて、織女に會するを許さるる説話。支那で多く詩文に詠まれ、この國に渡つて、また歌や詩の材料となつた。

【口譯】 天の川、水に影さす草の、秋風に靡いてゐるのを見ると、時は正に來たことである。

【釋義】 天の漢 銀河のことであるが、歌では、地上の川と同様に、水が流れ舟をやり橋を渡す等の性質あるものとして歌つてゐる。水陰草の 水に影のうつる草である。岸邊の草。夕陰草といふ語も見える。時は來にけり 牽牛と相會ふべき時は來たの意。この歌は、天の川邊の景を歌つてゐるから、織女の身として詠んだものであらう。

吾が夫子に うら戀ひ居れば 天の河 夜船榜ぎ動む 楫の音聞ゆ (人麻呂集)

【原文】 吾世子爾 裏戀居者 天漢 夜船榜動 楫音所聞

【口譯】 わが君を心に戀うて居れば、天の河を夜船を榜いで行く楫の音が聞える。

【釋義】 吾が夫子に この歌も、織女の身になつて詠んでゐるので、牽牛星を、我が夫子と云つてゐる。うら戀ひ居れば 心中に戀をしてゐれば。夜船榜ぎ動む 夜の船を榜ぎ音を立てるの意で、連體形である。牽牛が船

三二〇一

宋々は元
層校本等
による。

五二〇一
天漢は元
層校本等
による。

に乗つて、天の河を榜いで渡つて来るよしである。

一〇四

秋風の 吹きただよはす 白雲は たなばたつめの 天つ領巾かも

【原文】 秋風 吹漂蕩 白雲者 織女之 天津領巾

【口譯】 秋風の吹いて、漂はせてゐる白い雲は、織女の領巾であらうか。

【釋義】 たなばたつめ 織女星をいふ。タナバタツメは、機織る女といふ義で、古くからある語である。天つ領巾かも 織女星の領巾なので、天つの冠をつけてゐる。

【餘論】 この歌は、七夕の夜の白い雲を、織女星の領巾かと疑つてゐるが、類歌としては、天の河霧たちのぼる、たなばたの雲の衣の禰る袖かも(卷十、二〇六三)といふがある。

二〇五

このゆふべ 零り来る雨は 彦星の 早榜ぐ船の 櫂の散沫かも

【原文】 此夕 零來雨者 男星之 早榜船之 賀伊乃散鳴

【口譯】 この夕、降つてくる雨は、牽牛星の、急いで榜ぐ船の櫂の飛沫であらうか。

【釋義】 この夕 七月七日の夕である。彦星の ヒコボシは男性の星の義。牽牛星をいふ。櫂の散沫かも チリは、飛び散る水滴である。下界で天を仰いで詠んだ歌。

三〇五

天の漢 八十瀬霧らへり 彦星の 時待つ船は 今し榜ぐらし

【原文】 天漢 八十瀬霧合 男星之 時待船 今榜良之

【口譯】 天の川の多くの瀬は、霧こめてゐる。牽牛星の、時を待つ船は、今榜ぐと思はれる。

【釋義】 八十瀬霧らへり ヤツセは、数多くの瀬、瀬ごとに。キラヘリは、霧が立ちこめてゐる。時待つ船は 七月七日の夕を待つ船、時機を待つ船は。

機はたものの 踏木ふみき持ち行きて 天の漢 打橋うちはしわたす 君が來む爲

【原文】 機 踏木持往而 天漢 打橋度 公之來爲

【口譯】 機織り道具の踏木を持つて行つて、天の河に、打橋をかけます。君のおいでのなる爲に。

【釋義】 踏木待ち行きて フミキは、機おる時に尻をかける板だといふことである。打橋わたす ウチハシは、假にかける橋。君が來む爲 君は、牽牛星をさす。この歌は、織女星の身になつて詠んでゐる。

五二〇六

足玉も 手玉も玲瓏ゆらに 織る機を 君が御衣みけしに 縫ひ堪へむかも

【原文】 足玉母 手珠毛山良爾 織旗乎 公之御衣爾 縫將堪可聞

【口譯】 足玉も手玉も、ゆら／＼と鳴らして織る機を、君の御著物に縫ひ得るでありませうか。

【釋義】 足玉も手玉もゆらに 足玉、手玉は、女子の手足に纏きて飾とする玉をいふ。日本書紀に「手玉もゆらに機織る處女は誰が子ぞや」。また「すなはち由りて雄御等に勅して、皇女が賚たる足玉手玉を莫取りそと宣り

給ひき」。ユラは、足玉手玉の鳴る擬音。君が御衣に 君は牽牛星をいふ。この歌、織女星の身になつて詠んである。ミケシは、お召しもので、衣服である。縫ひ堪へむかも 牽牛星の来るまでに、縫ふことが出来るだらうか、間に合ふだらうかと疑つてゐる。「兒らが家道やや間遠し、ぬばたまの夜渡る月に競ひあへむかも」(卷三、三〇二)。

五三三四

○
天階も 長くもがも 高山も 高くもがも 月よみの 持たる變若水 い取り来て
君に奉りて をち得てしかも

早母は元
曆校本に
よる。

【原文】 天橋文 長雲鴨 高山文 高雲鴨 月夜見乃 持有越水 伊取來而 公奉而 越得之早母
【口譯】 天に上る階段も長くあつてほしい。高山も高くあつてほしい。月の神の持つてゐる若がへりの水を、取つて来て、君にさしあげて、若がへらせたいものでございます。

【釋義】 天階も ハシは階段で、天へ上る階段、天への通路である。天の橋立も同語であつて、天と地との交通を語るものである。長くもがも 長くあつて欲しいことよ。月よみの持たる變若水 ツクヨミは、月の神。ヲチミツは、これを飲めば若がへるといふ水。支那で上下を擧げて仙を希ひ、不老不死の薬を求め、月中に仙薬ありとした傳説から、この句を生じたのである。ヲチはもとに歸る意で、前にも出た。い取り来て イは接頭語。をち得てしかも 若がへり得たきことと希望する語法。なかくに人とあらずは酒壺になりてしかも酒に染みなむ(卷三、三四三)のナリテシカモと同様の語法である。

【参考】 變若水の歌

六三三四

○反歌
天なるや 月日の如く 吾が思へる 公が日にけに 老ゆらく惜しも
右二首

【原文】 反歌

天有哉 月日如 吾思有 公之日異 老落惜文

惜文は元
曆校本等
による。

右二首

【口譯】 天にある月日のやうに、わたくしの思つてゐる君が、一日ごとに年を取ることが残念でございます。
【釋義】 天なるや ヤは拍子の詞。天なる月日の如くと續く語法。公が日にけに 君が日に時に、一日一時ごとに。老ゆらく惜しも 老ゆることが惜しくあるよの意。

七三三四

○
淳名河の 底なる玉 求めて 得まし玉かも 拾ひて 得まし玉かも 惜しき 君
が 老ゆらく惜しも

一傳 説

右一首

【原文】 沼名河之 底奈流玉 求而 得之玉可毛 拾而 得之玉可毛 安多良思吉 君之 老落惜毛
右一首

【口譯】 沼名河の底にある玉は、求めて得らるべき玉でありませうか。拾つて得らるべき玉でありませうか。惜むべき君の老い行くことが残念でございます。

【釋義】 淳名河の 日本書紀に、天の淳名井、淳浪田、神沼名河耳の尊、天の淳中原瀛の真人の天皇等が見える。天上の川の名であらう。底なる玉 天にある川の底の玉といふので、若がへりの靈效があると傳へられるものであらう。得まし玉かも 代匠記の訓法による。得むと思ふ玉であるが得られないの意を含んである。「馬雙めて行かまし里を」(卷六、九四八)のマンの用法に同じである。あたらしき 惜しくある、惜むべき。

【餘論】 以上の三首は、奈良朝の初期に於ける、日本でも不老不死の薬にあこがれ索めた風潮を反映するものとして興味がある。若がへりの靈薬に、人々が氣を惹かれてゐた時代の作品であらう。

昔老翁あり 號を竹取の翁と曰ひき 此の翁 季春の月に 丘に登り遠く望むに 忽 羹を煮る九箇の女子に値へりき 百の嬌儔無く 花の容止無し 時に娘子等 老翁を呼び嗤ひて曰ひけらく 叔父來て此の燭火を吹けと 於是翁唯唯と曰ひて 漸く趨き徐に行きて 座の上に著接す 良久しくして

娘子等皆共に咲を含み 相ひ推し譲りて曰ひけらく 阿誰そ此の翁を呼びしはと云ひき 爾乃竹取の翁謝して曰ひけらく 非慮の外に偶神仙に逢ひ 迷惑る心は禁め敢へなくに 近く狎れし罪は 希くは贖ふに歌を以ちてせむと 即作れる歌一首并に短歌

緑子の 若子が身には 垂乳爲 母に懐かえ 榎櫛の 這ふ兒が身には 木綿肩衣 純裏に縫ひ著 頸著の 童子が身には 夾纈の 袖著け衣 著し我を にほひよる 子等が同年輩には 蜷の腸 か黒し髪を 眞櫛もち こゝに搔き垂り 取り束ね 擧げても纏きみ 解き亂り 童兒に成しみ さ丹つかふ 色に懐かしき 紫の大 綾の衣 住吉の 遠里小野の 眞榛もち にほはしし衣に 高麗錦 紐に縫ひ著け 指さへ重なへ 膚重ね著 うち麻やし 麻績の兒等 あり衣の 寶の子等が うつ たへは へて織る布 日曝の 麻 紵を 重裳なす はしきに取れば 醜屋經る 稻置丁女が つまどふと 我にぞ來し 彼方の 二綾襪 飛ぶ鳥の 飛鳥壯が 霖 禁み 縫ひし黒沓 指し穿きて 庭に立たずめば 退り勿立ちと 障ふる處女が 髣髴聞きて 我にぞ來し 水縹の 絹の帯を 引帯なす 韓帯に取らし 海神の 殿の菟に 飛び翔る 螺贏の如き 腰細に 取り飾らひ まそ鏡 取り雙め懸けて 己が貌 還らひ見つつ 春さりて 野邊を廻れば おもしろみ 我を思へか さ野 つ鳥 來鳴き翔らふ 秋さりて 山邊を往けば 懐かしと 我を思へか 天雲も

行き柵引く 還り立ち 路を來れば うち日さす 宮女 さす竹の 舍人壯も 忍
 ぶらひ かへらひ見つつ 誰が子ども 思はえてある 斯くぞ爲來し 古 さら
 さし我や 愛しきやし 今日やも子等に 不知にとや 思はえてある 斯くぞ爲來
 し 古の 賢しき人も 後の世の 鑑にせむと 老人を 送りし車 持ち還り來し

【原文】昔有老翁 號曰竹取翁也 此翁季春之月 登丘遠望 忽值煮藥之九箇女子也 百嬌無儔 花
 容無止 于時娘子等 呼老翁曰 叔父來乎吹此燭火也 於是翁曰唯々 漸趨徐行 著接座上 良
 久娘子等皆共含咲 相推讓之曰 阿誰呼此翁哉 爾乃竹取翁謝之曰 非慮之外 偶逢神仙 迷惑之心
 無敢所禁 近狎之罪 希贖以歌 即作歌一首并短歌

以歌は類聚古集等類
 雜類は類聚古集等類
 皮累は類聚古集等類
 曝之は西本願寺本
 果は代匠記による
 廻者、僻

緑子之 若子蚊見庭 垂乳爲 母所懷 襦襦 平生蚊見庭 結經方衣 氷津裡丹縫服 頸著之 童子蚊見庭
 結幡之 袂著衣 服我矣 丹因 子等何四千庭 三名之綿 蚊黑爲髮尾 信栴持 於是蚊寸垂 取束 舉而裳
 纏見 解亂 童兒丹成見 羅丹津蚊經 色丹名著來 紫之 大綾之衣 墨江之 遠里小野之 眞榛持 丹穗之
 爲衣丹 狛錦 紐丹縫著 刺部重部 皮累服 打十八爲 麻續兒等 蟻衣之 寶之子等蚊 打栲者 經而織布
 日曝之 朝手作尾 信巾裳成 者之寸丹取 爲支屋所經 稻寸丁女蚊 妻問迹 吾丹所來爲 彼方之 二綾裏
 脊 飛鳥 飛鳥壯蚊 霖禁 縫爲黑脊 刺佩而 庭立住 退莫立 禁尾迹女蚊 髣髴聞而 我丹所來爲 水縹
 絹帶尾 引帶成 鞆帶丹取爲 海神之 殿蓋丹 飛翔 爲輕如來 腰細丹 取飭氷 眞十鏡 取雙懸而 已蚊
 果 還氷見乍 春避而 野邊尾廻者 而白見 我矣思經蚊 狹野津鳥 來鳴翔經 秋僻而 山邊尾往者 名津
 蚊爲迹 我矣思經蚊 天雲裳 行田菜引 還立 路尾所來者 打水刺 宮尾見名 刺竹之 舍人壯裳 忍經等

氷は類聚古集等類

氷 還等氷見乍 誰子其迹哉 所思而在 如是所爲故爲 古部 狹々寸爲我哉 端寸八爲 今日八方子等丹
 五十狹邇迹哉 所思而在 如是所爲故爲 古部之 賢人藻 後之世之 堅監將爲迹 老人矣 送爲車 持還來
 【題意】竹取の翁が、春日、野に出でて仙女に遭った話を、竹取の翁自身の歌、および仙女の答歌として傳へてゐる。仙女に遭うた子細は、序に詳しい。竹取の翁は、竹を取る老人と解するのが、普通であるが、萬葉漫筆に出てる山崎泰輔氏の説に、竹は借字で、仙人の食ふ芝草、すなはち菌芝の類を求むる翁であると云うてゐる。この説はおもしろい説で、これによれば、仙薬を求むる翁と解すべきで、當時輸入し來つた、仙を談り薬を求める道教思想の作品と見るべきである。

【序意】昔老翁があつた。號を竹取の翁と云つた。この翁春の末に、丘に登つて遠く望むに、忽藥を煮る九人の女子を見た。嬌態は比ぶべきがなく、美しい姿は並ぶものがない。時に娘子等、翁を呼び、笑つて、叔父よ、來てこの燭火を吹いて下さいと云つた。そこで翁がハイと云つて、だん／＼近づいて行つて、その席上に著いた。しばらくして娘子等、皆共に笑を含み、譲り合つて、誰がこの翁を呼んだのでせうと云つた。そこで竹取の翁が、あやまつて云ふには、思の外に偶然神仙に逢ひ、惑へる心を押へることが出来ませんでした。狎れすぎた罪は、歌にて贖ひませうと云つて、作つた歌がこれである。

【口譯】赤ん坊の時代には、母親に抱かれ、這ふ兒の時代には、木綿の肩衣を總裏にして著、少年の時代には、夾纏の袖のついた衣服を著たわたくしでございますものを。集つてゐるあなたがたの同年の頃には、眞黒な髪を、櫛を以つてこゝに掻き垂れ、取り束ね纏き擧げても見たり、解き亂して童兒になしても見たり、赤みがかった色に近い紫の大綾の衣、佳吉の遠里小野の萩を以つて色づけた衣に、高麗錦を紐に縫ひ著け、幾重にも重

ねて膚に重ね著をし、麻績の兒等や寶の子等が、特別に絲にして織る布、さらしの麻紵を、重裳のやうに、はしきを取つて著れば、穢い小舎に居る稻置丁女が、結婚を申し入れるとわたくしの處に來ました。遠方で出來る二綾の靴下を穿き、飛鳥の男が霖雨を避けて縫つた黒沓を穿いて庭に佇みますと、行つてはいけませんと押へる處女が、ほのかに聞いて、わたくしの處に來ました。水縹色の帯を、引帯のやうに韓帶に取つて、海の神の御殿の屋根に飛び翔る蝶蠶のやうな腰細に飴りつけて、鏡を雙べ懸けて、自分の顔を顧みながら、春になつて野邊を廻れば、わたくしを興深く思つてか、野の鳥も來て鳴き飛びます。秋になつて山邊を行けば、わたくしを懐しく思つてか、天の雲も棚引いてゐます。還り立つて路を來れば、宮仕へする女も、舍人の男も、思ひ入つて顧みつゝ誰の子であらうと思はれてゐます。かやうに爲て來ました。昔は騒がれたわたくしが、今日は又、愛するあなた方に、さあと思はれてゐます。かやうに爲て來ました。昔の賢人も、後の世の手本にしようとして、老人を送つた車を持ち還つたこととございます。

【釋義】縁子の 初生兒をいふ。本集卷十八に、彌騰里兒とある。語義未詳。若子が身には ワクゴは、若き子。ミニハは、身にしては、時にはといふほどの意。たらちし 母の枕詞。母に懐かえ ウダカエは、抱かれて。襦袢の 原文もと襦袢とあつた。襦はヨル(絲を)で、意を成さない。古義に襦は挂の誤として二字でスキカクルと讀んでゐる。古本には悉く襦袢に作つてゐる。襦は裾の長い衣服、襦は子を負ふ帯であつて、二字で小兒の衣服の意になる。ムツキは小兒を被ふ衣類であるから、今借にムツキノと讀んでおく。這ふ兒が身には 原文、平生蚊見庭とある。平生をハフコと讀むは、古義に、論語憲問篇に、久要不忘平生之言とあつて、孔安國の註に、平生猶少時とあるに依つたとしてゐる。確説とも定め難いが、しばらくこれに従つておく。古

本には、生の下に之の字があるが、それにもなほ訓を下し難い。木綿肩衣 木綿で織つた袖なし衣である。類聚古集には、原文結幡方衣とあるが、方が讀み難い。純裏に縫ひ著 ヒツラは、ヒタウラで、全體に裏をつけたもの。頸著の 髪の毛が、頸を衝くほどをいふと説かれてゐる。夾纏の ユヒハタは、絲で結んで染める方法で、今の絞り染である。袖著け衣 袖のついてゐる衣で、前の肩衣に對してゐる。宮人の袖つけ衣秋萩にほひよろしき高圓の宮(卷二十、四三二五)。著し我を 著た我であるものをの意で、以上は、竹取の翁の幼少時代を(すべて第一人稱で)叙してゐる。にほひよる 原文丹因とある。諸説があるが、下の子等が、九人の仙女等をさしてゐるに違ないので、その形容句と見るべきである。さて仙女の答歌のうちに丹穂氷因(三八〇二)とある語であらうと思はれる。原文のまゝでニホヒヨルと讀ませたか、又はホヒに當る字が落ちたのであらう。丹一字でニホヒと讀ませるのは無理のやうだが、著丹穂哉(卷七、一二九七)、平山乎令丹黄葉(卷八、一五八八)の例がある。ニホヒは、色に出て美しいのをいふから、ニホヒヨルは、目もあやに寄り集つてゐると解すべきである。子等が同年輩には ヨチは、同じ年頃をいふ。こゝにゐる娘子等と同じ年頃にはの義。この河に朝茶洗ふ子、汝も吾もよちをぞ持てる、いで子たばりに(卷十四、三四四〇)。蜷の腸 黒の枕詞。か黒し髪を カは接頭語。黒き髪を。うまし國、荒し雄などの語例で、黒し髪といふ。擧げても纏きみ 引きみ弛べみの類のミで、髪を擧げて纏いても見の意。童兒に成しみ 童子風の髪にも成して見。さ丹つかふ色に 赤みがかつた色に。大綾の衣 織り模様の大い衣。遠里小野の 地名。眞榛もち マハリは萩のこと。にほはしし衣に 原文、丹穂之爲衣丹とある。前にも擧げたやうに、丹穂哉をニホハバカと讀むに倣つて、ニホハシシキヌニと讀む。衣に染めた衣にである。もとニホシシキヌニと讀んでゐたが、ニホスの語は外に證が無い。卷八の令丹黄

葉を、もとニホスモミヂバと讀んでゐたが、これもニホハスモミヂと讀む方が妥當であらう。高麗錦 高麗産、もしくは高麗風の錦。指さへ重なへ サシカサネを、意味を丁寧にする爲にササヘカサナへと云つたのであらう。膚重ね著 原文もと波累服とあるが、波では意を成さない。類聚古集に皮に作るに従ふ。皮をハダと讀むは、皮爲酢寸(卷二、三〇七)の例がある。うち麻やし 枕詞。打つた麻を績むと績く。ヤシは拍子の詞。「うち麻を麻績の王、海人なれや伊良度が島の玉藻刈り食す」(卷一、二三)。麻績の子ら 麻を績むを職とせる麻績氏の娘子等。あり衣の 美しい衣ので、枕詞。寶の子等が 美き織物を織るを職とせる寶氏の娘子等。うつたへは 原文打柶者とある。者は煮の誤で、ウツタヘニかともいふが、もとの儘でよい。特別にの意。ウツタヘニといふべきを、ウツタヘハといふは、ナカナカニといふべきを「中々者黙毛有益呼」(卷四、六一二)と書いてゐる例があつて、元暦校本、金澤本等に異が無く、ただ六條本に者を余に作るがあるだけである。ハに、ニの如き意の用法のあることは、「かくばかり戀ひつゝあらずは高山の巖根し枕きて死なましものを」(卷二、八六)の語法となるによつても認められるから、必しも、ナカナカハ、ウツタヘハを誤とするに及ばぬであらう。へて織る布 へは綜の活用。下二段活。經絲を引き張つて機に懸けること。麻紵を 麻を材料とした手作りの布。テヅクリは白布である。重裳なすはしきに取れば 原文、信中裳成者之寸丹取とある。諸説あるが、いまだ取るべき説を知らぬ。重裳の文字も假に宛てたまでである。以上は、竹取の翁が仙女と同年の頃の装をいふとおぼえるから、假に取ればとして、下に懸かることにする。醜屋經る 穢い小舎に世を渡る。稻置丁女が 上代、村邑の長を稻置といふ、村の相當の身分の娘子、村長の娘といふ程の意であらう。つまどふと 結婚を申し入れると。我にぞ來し わがもとに來たの意。彼方の あちらの。遠方の。二綾襪 二色の綾の靴下で、

上等品である。飛ぶ鳥の 枕詞。飛鳥壯の 飛鳥の里の男で、靴作りに名のあつたものをいふであらう。雲禁み 皮細工に雨を嫌ふから、霖雨を避けてと云つてゐる。退り莫立ちと 立ち退出する勿れと。障ふる處女がさし留める處女が。水縹の 水縹色ので藍である。引帶なす 引帶は小帯で、衣服に縫ひ著けた帯をいふといふことである。その引帶のやうに。韓帶に取らし 朝鮮風の帯に取つて。トランは、お取りになつての意で、自分のことにいふはをかしいが、もとく竹取の翁自身の口吻に擬して或る文人が詠んでゐるのであるから、このやうな處で馬脚を出したものと見える。殿の薨に トノは宮殿。イラカは屋根。螺贏の如き スガルは蜂。我を思へか 自分を興あるものに思へばにか。さ野つ鳥 サは接頭語。野つ鳥は雉のこと。うち日さす 枕詞。さす竹の 枕詞。普通に、宮を修飾する。今は、宮のを略してゐるであらう。忍ぶらひ 心中に賞美して。思はえてある 竹取の翁が少年時代に、宮の女や、舍人の男に、何處の子ぞと思はれてあるかのよしである。斯くぞ爲來し かくの如く人々にもてはやされて來た。いにしへ 古のとノを添へるのはよくない。ささきし我や ササクは、ささめき騒ぐ。昔時めいた我やで、ヤは疑問の辭。愛しきやし 愛しき子等にと績く。不知にとや さあどこの老人ぞといふ風に冷遇されてやの意。ヤは疑問の辭。老人を送りし車持ち還り來し 孝子傳に「原穀は、何の許の人といふことを知らず。祖、年老いたり。父母厭ひ患へて、意に棄てむと欲ふ。穀年十五、涕泣して苦に諫むれども、父母従はず。乃輿を作りて昇きて棄てつ。穀、乃隨ひて輿を收めて歸る。父謂ひて曰ひけらく、爾いづくんぞ此の凶具を用む。穀曰はく、乃後に父老いば更に作り得ること能はじ。是を以ちて收めしのみと云ひき。父感悟して愧ぢ懼る。乃祖を載せ歸りて侍養して更に純孝と成りき」(原漢文)とある。若い者が、老人を邪魔にしない故事である。

【餘論】この長歌は、興味ある題材を取り扱つて居り、分量から云つても雄篇であるが、難解の句が少くないのは遺憾である。文字使用法などにも大分異つたところがあり、いろ／＼の點から注意せられる作品である。今後も開拓すべき餘地が多いと思ふ。

○反歌二首

死なばこそ 相ひ見ずあらめ 生きてあらば 白髮子等に 生ひざらめやも

【原文】 反歌二首

死者木苑 相不見在目 生而在者 白髮子等丹 不生在目八方

【口譯】 死んだならば見ないでも居られませう。生きて居るならば白髮があなた方にも生えないではゐますま

【釋義】 相ひ見ずあらめ 見ないでも居られようの意。死んだならば白髮が生えるのを見ずに済むだらう。白髮子等に コラは、ここに集つてゐる仙女等を云ふ。生ひざらめやも 生ひずにあらうや、必生えるの意。

白髮し 子等も生ひなば 斯くの如 若けむ子等に 罵らえかねめや

【原文】 白髮爲 子等母生名者 如是 將若異子等丹 所習金目八

【口譯】 白髮があなた達にも生えたならば、このやうに若いでせう人人に罵られる事もありませう。

【釋義】 白髮し シは、助辭。若けむ子等に 若くあるであらう人人。罵らえかねめや 罵られずにゐる事が、

二 三七九
木苑は類聚古集等による。

三 三七九

出來ようか、出來まいの意。カネは、得ざる意で、ヤは、反語。

○娘子等の和ふる歌九首

愛しきやし 老夫の歌に おほほしき 九の兒等や 感けて居らむ一

【原文】 娘子等歌九首

端寸八爲 老夫之歌丹 大欲寸 九兒等哉 蚊間毛而將居 一

【題意】 かの竹取の老夫の歌に對して九人の女子等の答ふる歌。一人が一首づつ詠んだ體になつてゐる。

【口譯】 感すべき老人の歌に、ほんやりして居た九人の人達は感心して居りませうや。

【釋義】 愛しきやし ヤシは、助辭で、調子を調へる爲に添へる。ハシキは、愛すべき、感すべき等の意。愛しき老夫と續く語脈。おほほしき 集中に、鬱悒と書いてオホホシキと讀んでゐる。景色のはつきりしない状。又心の晴やかでないのを表はす語。この歌では、女子等が謙遜して心のはつきりしない意に用ゐてゐる。大欲寸は、上のホが清音であることを語つてゐるが、於煩保之(卷十七、三八九九)と書いた例もある。感けて居らむ カマケは、感ずる意。上のカを受けて、唯感心してばかりゐようや、進んで老夫の言に従はうの意であらう。

辱を忍び 辱を黙して 事も無く もの言はぬ先に 我は依りなむ 二

【原文】 辱尾忍 辱尾黙 無事 物不言先丹 我者將依 二

【口譯】 辱を忍び辱を黙つて何事もなく、ものを言はぬ先に私は従ひませう。

一 三七九
願寺本等による。

四 三七九

五 三七九
二は類聚古集等による。

【釋義】辱を忍び 老人から言ひ籠められた事を辱と言つてゐる。それを堪へてである。辱を黙して モダは、黙つてゐる事。辱に對して何も言はないで。我は依りなむ 自分は老人の言に従ふの意で、老人を尊敬しようといふことになる。

【原文】 否も諾も 欲するまにま 赦すべき 貌は見ゆや 我も依りなむ 三

六三三九
三は類聚
よる。

【原文】 否藻諾藻 隨欲 可赦 貌所見哉 我藻將依 三

【口譯】 厭も應も思ふ通りに赦すべき貌が見えます。私も従ひませう。

【釋義】 否も諾も 承知も不承知も。欲するまにま 思ふ通りに、願のままに。貌は見ゆや 他の女子等の有様が、厭も應も無くどちらとも先方の欲するままに赦すべき貌が見えるの意である。ヤは、感動の辭と思はれる。

【原文】 死も生も 同じ心と 結びてし 友や違はむ 我も依りなむ 四

七三七九
心述、四
集等によ

【原文】 死藻生藻 同心述 結而爲 友八違 我藻將依 四

【口譯】 死ぬるも生きるも同じ一つ心と約束をした友達に違ひませうや。私も従ひませう。

【釋義】 友や違はむ 友達にやは違ひませうか、違ひませんの意。

【原文】 何爲むと 違ひは居らむ 否も諾も 友の並並 我も依りなむ 五

八三七九

【原文】 何爲述 違將居 否蒙諾藻 友之波波 我藻將依 五

【口譯】 どうしようとして違つて居りませうや。厭も應も友達のままに私も従ひませう。

【釋義】 友の並並 友と同じやうに、友の並に。

【原文】 豈もあらぬ 自が身の故 他の子の 言も盡さじ 我も依りなむ 六

九三七九
六は類聚
よる。

【原文】 豈藻不在 自身之柄 人子之 事藻不盡 我藻將依 六

【口譯】 何とも無き私の身であるのを、他の方の言葉は盡させますまい。私も従ひませう。

【釋義】 豈もあらぬ 何でもなき、何の能もない。つまらないと云ふ程の意。自が身の故 私の身の故に。カラは、故に同じ。他の子の 他の女子を指してゐる。言も盡さじ 言葉を盡させないで、世話を焼かせますまゝの意。

【原文】 はた薄 穂にはな出でと 思ひたる 情は知らゆ 我も依りなむ 七

〇三八〇
七は類聚
よる。

【原文】 者田爲爲寸 穂庭莫出 思而有 情者所知 我藻將依 七

【口譯】 薄のやうに表に現すなと思つてゐる御心は解ります。私も従ひませう。

【釋義】 はた薄 旗のやうに穂の擴がつた薄。その薄のやうにと譬喩に用ゐてゐる。穂にはな出でと 心に思つてゐる事が表に表れるのを穂に出づと言ふ。それでナは勿れの意であるから、穂に出るな、顔付きに出すな、意である。思ひたる 一同の者が思つてゐるのである。情は知らゆ シラユは、知られる意。

三八〇
八は類聚
古集等に
よる。

住吉の 岸野の榛に 染ふれど 染はぬ我や にほひて居らむ 八

【原文】 墨之江之 岸野之榛丹 丹穗所經迹 丹穗葉寐我八 丹穗氷而將居 八

【口譯】 住吉の岸の野の萩に染めつけても色よく出ない私は、色に出て居りませうか。

【釋義】 岸野の榛に ハリは、萩の事。岸の野の萩にである。萩の花に摺りつけて色に染めるけれども。染はぬ

我や そのやうに染めようとしても格別色よくも無い自分やの意で、やは、疑問の辭。萩に染めつけても色よく出ないと云ふので、自分の容色の美しく無い事を云つてゐる。にほひて居らむ 此の句のニホフは、思ふ事を顔に表す意と思はれる。この歌はニホフを三つ用ゐてゐるが、それぞれに違つた意味に用ゐられてゐる。同語を用ゐてわざと讀者を渦中に引き入れるやうな手段を取つてゐる。

三八〇

春の野の 下草靡き 我も依り にほひ依りなむ 友のまにまに 九

【原文】 春之野乃 下草靡 我藻依 丹穗氷因將 友之隨意 九

【口譯】 春の野の下草が靡くやうに私も従ひます。機嫌よく従ひませう、友の御心通りに。

【釋義】 にほひ依りなむ 色よく思に表して従ひませうの意。ニホヒヨリは、翁の長歌の中にもあつた語で華やかに依り従ふの心と思はれる。

九は類聚
古集等に
よる。

二世 談

傳説には、多少の古びが認められる。その古びなしに、その時の世の人情ばなし、さういふ世間ばなしを取り扱つた歌をこゝに集めて見た。それも時がたてば傳説と稱すべきものにもならう。傳説に比べて、一層人情味のゆたかなことが注意される。

昔者娘子あり 字を櫻兒と曰ひき 時に二の壯子あり 共に此の娘を誂む
而して生を捐てて拵競ひ 死を貪りて相ひ敵みたりき ここに娘子獻歎きて
曰ひけらく 古より今に至るまで いまだ聞かず いまだ見ず 一の女の身
二つの門に往き適ふといふことを 方今壯士の意和平び難きものあり 妾死
りて 相害ふこと永く息めむには如かじと すなはち林の中に尋ね入りて
樹に懸りて經き死にき 其の兩の壯士 哀慟するに敢へず 血の泣襟に漣れ
各心緒を陳べて作れる歌二首

春さらば 挿頭にせむと 我が思ひし 櫻の花は 散りにけむかも 其の一

【原文】 昔者有娘子 字曰櫻兒也 于時有二壯士 共誂此娘 而捐生拵競 食死相敵 於是娘子
獻歎曰從古來今 未聞未見 一女之身 往適二門矣 方今壯士之意 有難和平 不如妾死 相害永

三七八
六は類聚
來今は類
聚古今等
による。

散去、其古集等による。

息 爾乃尋入林中 懸樹經死 其兩壯士 不敢哀慟 血泣漣襟 各陳心緒 作歌二首
春去者 挿頭爾將爲跡 我念之 櫻花者 散去香聞 其一

【序意】 昔女子があつた。名を櫻兒と云つた。時に二人の壯子があつて、共に此の娘に云ひ寄つて命を棄てて競争し、死を賭けて敵對した。こゝにその女子が泣いて言ふには、昔から今に到るまで、いまだ一人の女の身で二つの家に嫁に行くことを見も聞きも致しません。今男の心は宥め難いものがあります。むしろ私が死んで、互に害する事を長く止める方がようございませうと云つて、そこで林の中に尋ねて行つて、樹にかかつて縊死した。その二人の壯子が悲の心を止められないで、血の涙が衿に流れ、各思を述べて作つた歌。

【口譯】 春になつたら挿頭にしようと思つた櫻の花は散つてしまつた。

【釋義】 櫻の花は 女子の名が櫻兒と云ふのでこれを櫻の花に喩へてゐる。

妹が名に 懸かせる櫻 花咲かば 常にや戀ひむ いや毎年としのほに 其の二

【原文】 妹之名爾 繫有櫻 花開者 常哉將戀 彌年之羽爾 其二

【口譯】 あの兒の名前に懸けてゐる櫻花が咲いたならば、何時も戀をするでありませうか。毎年毎年。

【釋義】 懸かせる櫻 名に懸けてゐる櫻で、櫻兒が名に持つてゐるその櫻の意である。常にや戀ひむ 春が來て花の咲く毎に常に戀をする事であらう。いや毎年としのほに イヤは、いよいよで、どの年もどの年もの意。

七 三七八 其二は類聚古集等による。

八 三七八

一は古葉略類聚鈔等による

或の曰はく 昔二の男ありて 同じく一ひとの女を娉つとひき 娘子嘆息なごのなげきて曰ひけ
らく 一の女の身 滅易めつきこと露の如く 三みの雄の志 平ひらび難たがきこと石いしの如
しと 遂に池の上に彷徨たぐはり 水底みづそこに沈しづみき 時に其の壯士等 哀頹あゐの至に
勝たへず 各所心を陳べて作れる歌三首 娘子字をなご 兒と曰ふこ 一

【原文】 或曰 昔有三男 同娉一女也 娘子嘆息曰 一女之身 易滅如露 三雄之志 難平如石 遂乃彷徨池上 沈沒水底 於時其壯士等 不勝哀頹之至 各陳所心 作歌三首 娘子字曰 無耳之 池羊蹄恨之 吾妹兒之 來乍潛者 水波將涸 一

【序意】 或る人が言ふのに、昔三人の男があつて、皆一人の女子に言ひ寄つた。その女子が嘆いて言ふには、一個の女子の身は消え易い事は露のやうであるが、三人の男の志の宥め難い事は石のやうであると言つて、遂に池のほとりを彷徨つて、水底に沈んでしまつた。時にその男子等が哀傷のいたりに堪へられないで、各悲を述べて作つた歌。その女子の名は鬘兒と云つた。

【口譯】 無耳の池が恨めしい。吾が思ふ子が來て入つたならば、水は涸れたがよい。

【釋義】 無耳の池し恨めし 無耳の池は、無耳山の麓に在る池の名。池しのシは、助辭。來つつ潜かば カツクは、水に潜り入る事。來て身投げをしたらばの意。水は涸れなむ 水が乾いて欲しいと希望する語法。

九 三七八

あしひきの 山纒かづらの兒 今日ゆくと 吾に告げせば 還り來こましを 二

二は古葉略類聚鈔等による

【原文】 足曳之 山縵之兒 今日往跡 吾爾告世婆 還來麻之乎 二

【口譯】 鬘兒が今日行くと私に告げたならば、歸つて來たであらうものを。

【釋義】 あしひきの山縵の兒 女子の名が鬘兒と云ふので、あしひきの山は、その飾をしてゐる。ヤマカヅラは、山の蔓草の事である。たゞ鬘兒と云ふべきを飾つて言つたまでである。還り來ましを 行く事を知つてゐたならば、自分は歸つて來たであらうものを、さうでなくして残念であるの意。

あしひきの 玉縵の兒 今日の如 いづれの隈を 見つつ來にけむ 三

三は古葉略類聚鈔等による

【原文】 足曳之 玉縵之兒 如今日 何隈乎 見管來爾監 三

【口譯】 鬘兒は今日のやうにどの片隅を見ながら來てゐた事でせう。

【釋義】 あしひきの玉縵の兒 鬘兒の名を飾つて云つた事は前に同じ。唯アシヒキノは、山の枕詞であるのに、此の歌では玉縵と云つてゐるのは變つてゐる。それで古くから玉は誤であらうと云はれてゐる。タマカヅラは、玉のやうな實を持つた蔓草の事。いづれの隈を 此の道を通つてどの片隅をの意である。見つつ來にけむ 見ながら來たであらうと、過去を推量する語法を取つてゐる。鬘兒の通つた道を行きながら、今自分の通るやうにどの處を見ながら行つたであらうかと推量してゐる。

【餘論】 以上の鬘兒と櫻兒とに關する歌は、何時の世にもありがちな、一人の女子を多くの男子が争つた事を歌つてゐる。さう云ふ意味から言へば、特に傳説と見るべき程の事もない。市井の出來事である。恐らくは、作者と同じ時代に在つた出來事を聞いて、その男の身として詠んだものであらう。無耳の池に關係してゐるから、

鬘兒の話は藤原の宮時代の事で、櫻兒のもほぼ同じ時代の事であらう。

三三八〇

斯歌は類聚古集等による

事しあらば 小泊瀬山の 石城にも 隠らば共に な思ひ吾が夫

右傳へ云ふ 時に女子あり 父母に知らせずして 竊に壯士に接ひたりき 壯

士 其の親の呵嘖を悚惕して 稍猶豫の意あり 此に因りて娘子 此の歌を裁

作して 其の夫に贈り與へたりき

【原文】 事之有者 小泊瀬山乃 石城爾母 隠者共爾 莫思吾背

右傳云 時有女子 不知父母 竊接壯士也 壯士悚惕其親呵嘖 稍有猶豫之意 因此娘子

裁作斯歌 贈與其夫也

【題意】 この歌の作られた事情は、左註に記されてある。或る時一人の女子があつて、父母に知らせずして竊に或る壯士に通じてゐた。その壯士が女子の親の怒るのを恐れて、ややためらふ心があつた。これに依つて女子がこの歌を作つて、その夫に贈り與へた。

【口譯】 若し何か起つたならば、小泊瀬山の石城にも一緒に隠りませう。御心配なさいませぬ、吾が君よ。

【釋義】 事しあらば シは、助辭で、事があらば、事件が起つたならばの意。小泊瀬山の 泊瀬の山で、マは接頭語。石城にも イハキは、石の築造物。上代の墓又は祭場等、大石を用ゐて造る事を總稱してゐる。殊に泊瀬は、昔の墓地であるとも云はれ、又屢祭場として用ゐられてゐる。隠らば共に 隠るならば一緒にの意で、

共に隠りませうと云つてゐる。

【参考】類歌
言痛けば小泊瀬山の石城にも率て籠らなむ勿戀ひそ吾妹(常陸國風土記)

九三八〇

反賜米は
類聚古集
等による

商變り 領らすとの御法 あらばこそ 吾が下衣 返し賜らめ

右傳へ云ふ 時に 幸せらし娘あり 寵薄れたる後 寄物
姓名いまだ 詳ならず 寵薄れたる後 寄物
云ふ を返し賜りき ここに娘子怨恨みて いささか斯の歌を作りて献上りき

【原文】商變 領爲跡之御法 有者許曾 吾下衣 反賜米

右傳云 時有所幸娘子也 姓名未詳 寵薄之後 還賜寄物 俗云可多美 於是娘子怨恨 聊作斯歌献上

【題意】左註に云ふ。或る時寵せられた女子があつた。その寵が薄くなつた後に、形身の物を御返し下された。そこで女子が恨んでこの歌を作つて、献上したと云ふ。

【口譯】賣買を變更せよと云ふ法律があるならば、私の下衣を返してもいただきませう。

【釋義】商變り 賣買の定つたのを變更をする事。領らすとの御法 承認すると云ふ法令。一度賣買の約束を結んだものでも、これを改めてよいと云ふ法令の意。あらばこそ その法令があるならば、自分の奉つた記念の下衣を御返しにもなりません。さういふ法令もないのに下衣をお返しになり、御約束を御破りになる。とはと云ふ事を云はうとして、あらばこそ御返しいただきませうと云つてゐる。

【餘論】 相手方が約束を破つたのに對して、契約を破つてよいと云ふ規定があるならば受けませうと、理窟よく恨みかけてゐる。初二句が變つた材料を用ゐてゐる點で注意される。

三 臨 時

人々の生活の中、猶折にふれて色々の場合がある。その特に一項をなすまでもないものをここに集める。

○故郷を思ふ

清き瀬に 千鳥妻喚び 山の際に 霞立つらむ 甘南備の里

【原文】 思故郷

清湍爾 千鳥妻喚 山際爾 霞立良武 甘南備乃里

【題意】 故郷を念つて詠んだ歌。故郷はもと自分の住んでゐた郷里を云ひ、又もと都であつた地をも云ふ。此の歌では、古き都、すなはち作者のもと住んでゐた土地で、飛鳥のほとりを思ひやつた歌である。

【口譯】 清き川瀬に千鳥が妻を喚ぶ山の間には、霞が立つてゐるであらう。あの甘南備の里は。

【釋義】 霞立つらむ ラムは、現在推量の助動詞。上の千鳥妻喚びと霞立つと兩方を受けて推量してゐる。

甘南備の里 飛鳥の都の近くに甘南備山がある。その傍の里。

五二二

七〇二五

○時に臨める
道の邊の 草深百合の 花咲みに 咲まししからに 妻といふべしや (古歌集)

【原文】 臨_レ時

道邊之 草深由利乃 花咲爾 咲之柄一 妻常可云也

【口譯】 道の片ほとりの草の深い所に咲く百合の花のやうに、御笑ひなさつたから妻と云ふべきでございませう。

【釋義】 草深百合の 草の深みの百合で、以上は花咲と云はむが爲の序である。花咲みに 華やかに、例へば花が咲くが如くにと、笑む事を譬へてゐる。咲まししからに エマシシは、お笑ひなされたの意。カラは、故に同じ。妻といふべしや 此のヤは、疑問の辭とも見えるが、それでは歌の意が弱くもあるしするから、今原文に、也と云ふ決定の字を用ゐてゐるに依つて、調子を強くする爲に添へた感動のヤとしておく。妻と云ふべきであるの意。先方に對して決定的に言つてゐる。

三〇二六

曉と 夜鳥鳴けど この山上の 木末の上は いまだ静けし (古歌集)

【原文】 曉跡 夜鳥雖鳴 此山上之 木末之於者 未靜之

【口譯】 曉であると鳥は鳴くけれども、この山の上の樹木の枝先きはまだ静である。

【釋義】 木末の上は コヌレは、木の成長してゐる枝先き。

四〇二六

西の市に ただ獨出でて 眼並べず 買ひにし絹の 商じこりかも

【原文】 西市爾 但獨出而 眼不並 買師絹之 商自許里鴨

【口譯】 西の市に唯獨で出て、見並べないで買つて来た衣の買損ひである事よ。

【釋義】 西の市に 京の東西に市を設けてある、その西の方の市である。眼並べず あれこれと並べて見ずに、他のものと見並べて見ずに。商じこりかも アキジコリは、他に用例がないので確には解らぬが、多分買損ひのことで商賣の失敗を云ふのであらう。さて衣を買ひ損つたと云ふのは譬喩で、人を見損つて身を許したと云ふ意である。

○舊りにしを歎く

冬過ぎて 春し來たれば 年月は 新なれども 人は舊りゆく

【原文】 歎_レ舊

寒過 暖來者 年月者 雖新有 人者舊去

【題意】 舊くなつたのを歎く歌。

【口譯】 冬が過ぎて春が來れば、年月は新しくなるけれども、人は舊くなつてゆく。

【餘論】 この歌、寒の字を書いてフユと讀ませ、暖の字をハルと讀ませてゐる。これは古人の冬と春との感想をそのままに表してゐる。昔の人は季候に對して十分設備を持つてゐなかつたので、冬の寒さ、夏の暑さは殊に凌ぎ難かつた。それ故冬と云へば、まづ寒いと云ふ觀念が先に來り、春と云へばそれから逃れる暖さを聯想す

四〇一八八

る。かう云ふ文字使ひは、古人の氣持を寫すものとして特に興味が高い。

五〇一八八

物皆は 新しき良し ただ人は 舊りぬるのみし 宜しかるべし

【原文】 物皆者 新吉 唯人者 舊之 應宜

【口譯】 物は皆新しいのがよろしい。ただ人ばかりは舊くなつたのがよいであらうと思ふ。

【餘論】 此の歌は、前の歌と二首合せて纏つた内容をなすものである。前の歌では、春が來れば物は新になるけれども、人は舊くなる事を叙し、此の歌では、物は皆新しいのがよいが、人は舊いのがよいであらうと歌つてゐる。これは恐らくは老人の自己慰安であつて、時の推移に遅れるのを辯護したものであると思はれる。老境に入つた作者の歌として興味を覚える。

八〇三八五

この頃の 吾が戀力 記し集め 功に申さば 五位の冠

【原文】 比來之 吾戀力 記集 功爾申者 五位乃冠

【口譯】 此の頃の私の戀の力を記し集めて功績として申し上げたならば、五位の冠を下さるでせう。

【釋義】 吾が戀力 自分の戀の力で、強く人を思ふそれを言つてゐる。記し集め 文に書き集めて。功に申さば 功績として官に申し出したならば。五位の冠 昔は位に依つて冠が違つてゐたので、五位の冠を給ふ事は五位を下される事である。自分の戀に於ける功は、五位に相當する程大きなものである、といふ意に歌つてゐる。

九〇三八五

この頃の 吾が戀力 給らずは 京兆に 出でて訴へむ

右の歌二首

【原文】 頃者之 吾戀力 不給者 京兆爾 出而將訴

右歌二首

【口譯】 この頃の私の戀の力を賞し給はずば、都の役所に行つて訴へませう。

【釋義】 給らずは 戀の力の賞を給はずば。京兆に 京都を左右に分ち、各これを統治する官を置く。その長官を京兆と云ふ。京都の人民であるから、京を支配する役人の許に行かうと云ふのである。

【餘論】 以上の二首は、戀の餘りに切なるを戯れて、これ程の苦勞は、五位を給はる功績に相當すると云つてゐる。恐らくは相聞の歌で、奇抜な構想の歌を贈つて、相手の注意を引かうとしたのであらう。戀の歌としては餘裕が有り過ぎるが、相聞の歌として相手に注意せしめると云ふ意味から云へば、許せるものであらう。

○怕しき物の歌三首

天なるや 神樂良の小野に 茅草苳り 草苳りばかに 鶉を立つも

【原文】 怕物歌

天爾有哉 神樂良能小野爾 茅草苳 草苳婆可爾 鶉乎立毛

【題意】 以下三首は、恐しいものを詠んだ歌である。

【口譯】 天にある神樂良の小野に茅草を苳つて、その草の苳り場所に鶉が立ち上つた。

七〇三八八
怕物は類
古集等
による。

【釋義】天なるや ヤは、拍子の辭で、天なる神樂良の小野と云ふ語脈。神樂良の小野に 天に在ると傳へられてゐる野。草苺りばかに カリバカは、稻等を刈り取る區劃を云ふ。草を刈るその區劃の意。鶉を立つも 鶉を立たせたのを。茅草を刈つてゐたに急に鶉が立つて驚かされたと云ふので、恐しいものに詠んだのである。

八三三八

奥つ國 領く君が 染屋形 黄染の屋形 神の門渡る

【原文】奥國 領君之 染屋形 黄染乃屋形 神之門渡

【口譯】遠方の國を領してゐる國王の色に染めた屋形、あの黄色く染めた屋形が海峡を渡つて行く。

【釋義】奥つ國 遠方に在る海上の國。又人の死んでゆく國。領く君が ウシハクは、占領する、領する。キミは、君主。染屋形 シメは、色に染めてある意。ヤカタは、家の形で、その國王の館を云ふ。黄染の屋形 上の染屋形をまう一度繰り返して云つたので、黄色く染めた屋形。奥つ國を海中の國とするならば、黄色い船の義であらう。又奥つ國を人の死んで行く國とすれば、その國王の船で、黄泉に關係があるであらう。神の門渡る トは、兩岸が突き出た門戸のやうな形の地形を云ふ。神の門と云ふは、その恐しく人の近よるべからざる氣持を表す爲に添へて云ふ。黄色の船が恐しい海峡を渡ると云ふのは、恐しいものとしての空想の産物であらう。

九三八八

人魂の さ青なる君が ただ獨 逢へりし雨夜は 久しく念ほゆ

【原文】人魂乃 佐青有公之 但獨 相有之雨夜葉 非左思所念

【口譯】人魂の眞青な君が唯獨出逢つた雨の夜は、久しく念はれる。

【釋義】人魂の 靈魂は、人が生きてゐる間はその體に宿つてゐるが、人が死ぬと離れて別々になるものと思はれてゐた。その人が死んで、魂が遊行するのを詠んだ歌である。さ青なる君が 遊離した人の魂が、青い色をしてゐるのを云ふ。人魂すなはち君であつて、青い人魂と云ふだけの事である。逢へりし雨夜は その青い人魂に行き逢つた雨の夜である。久しく念ほゆ 長い間忘れ難くある意。

【餘論】以上の恐しいものの歌三首は、恐らくは人々が寄り集つて互に争つて恐しいものを詠んだのであらうと思はれる。第二首、第三首等は、恐しいと云ふ以外に、當時の人の信仰の方面にも多少觸れてゐる。人魂が眞面目に語られてゐるのも面白く思はれる。

四 長歌 雜題

長歌の中で、人事に關係の深く、名目を立てた他の部門に入らぬ物をここに集める。

三諸は 人の守る山 本邊は 馬酔木花開き 末邊は 椿花開く くら麗し山ぞ
泣く兒守る山

右一首

二二三二

【原文】 三諸者 人之守山 本邊者 馬酔木花開 末邊方 椿花開 浦妙山會 泣兒守山

右一首

【口譯】 三諸は人の守つてゐる山である。麓の方は馬酔木の花が咲き、上の方は椿の花が咲く美しい山であるよ。泣く子を守つてゐる山である。

【釋義】 三諸は 飛鳥に近い神奈備山の事であらう。しかし他にも同名の山が多いから確には言ひ難い。人の守る山 人が守つてゐる山で、みだりに人を近づけない意である。本邊は モトは、山本で、山の麓邊はである。末邊は 山の頂の方は。うら麗し山ぞ 美麗なる山であるぞ。クハシは、連體形。泣く子守る山 泣く子を番をする山で、子守をしてゐる様なやさしい山の意。

【餘論】 此の歌は集中雜歌の中に入つて居り、山を譽めた歌として取り扱はれてゐる。しかし作者の本心はそれだけでなしに、山を歌つてこれに或る女子を喩へてゐる。人の守る山とは、その女が母親などの守つてゐる子である事を云ひ、泣く子守る山とは、その女が弟妹等をあやしてゐる姿を念ひ浮べてゐるであらう。都ほとりの美しい山を譽め、これに託して或る女子を譽めた歌と思はれる。表の意と裏の意と、不即不離の状態に巧に歌はれてゐる。單に山の美を歌つたものとしても、本邊は馬酔木花開き末邊は椿花開くの句は、非常に巧な句と云ふべきである。

百岐年 美濃の國の 高北の 八十一隣の宮に ひむかしに 行きなむ宮を あり

とききて 吾が通道の 於吉蘇山 美濃の山 靡けと 人は踏めども 斯く依れと

人は衝けども 意無き山の 於吉蘇山 美濃の山

右一首

【原文】 百岐年 三野之國之 高北之 八十一隣之宮爾 日向爾 行靡闕矣 有登開而 吾通道之 奥十山 三野之山 靡得 人雖跡 如此依等 人雖衝 無意山之 奥礪山 三野之山

右一首

【口譯】 美濃の國の高北の八十一隣の宮に、東の方に行きませう宮を、ありと聞いて、私の通ふ道の於吉蘇山や美濃の山、靡けと、人は踏むけれども、片寄れと人は衝くけれども、心無き山の於吉蘇山や美濃の山よ。

【釋義】 百岐年 美濃の枕詞であらうが、語義は未詳である。誤字説もあり、色々に云はれてゐるが、まだ確な説を見ない。高北の八十一隣の宮に 日本書紀景行天皇の卷に、四年二月天皇美濃に幸して泳の宮に居給ふと有り、その古註に、「泳宮此云區玖利能彌椰」とある。その宮である。タカキタは、その地の總名であらう。ひむかしに 原文日向爾とある。東の方、すなはち日に向ふ方の意で、これもヒムカシニと讀んで、東方にとすべきであらう。行きなむ宮を 行くであらう宮をで、猶東方に行幸すべき豫定のあつた事を云ふであらう。しかし此の句は、猶讀み方に疑問があり、従つて解釋もまだ決定は出来ない。於吉蘇山 木曾の山で、後に信濃に屬するが、もとは美濃の國であつた。美濃の山 美濃の國の山で、どの山とも知られぬが、通り路に越えて行く山である。靡けと 山が靡き伏せよとで、越えて行くに邪魔にならぬやうに低くなれとの意である。人は踏めども 跡の字をフムと讀むは、此の十三の卷には他にも例のある事である。斯く依れと 斯様に片寄

れとで、これも道を除けて通せとの意である。意無き山の 靡き寄れと云つても云ふ事を聞かないのを意無きと云つてゐる。

【餘論】 此の歌は、急いで八十一隣宮に行かうとする人が、山を越えながらその山が邪魔になるから低くなれと云ふ意味に歌つてゐる。この歌はかなり古い歌のやうであるから、柿本人麻呂の「靡けこの山」等も或は此の歌などから來てゐるものであらうも知れぬ。

○乞食者の詠二首

愛子 汝夫の君 居り居りて 物にい行くとは 韓國の 虎とふ神を 生取に 八頭取り持ち來 その皮を 疊に刺し 八重疊 平群の山に 四月と 五月の間に 藥獵 仕ふる時に あしひきの この片山に 二つ立つ 櫟が本に 梓弓 八つ手 挟み ひめ鏡 八つ手挟み 鹿待つと 吾が居る時に さを鹿の 立ち來嘆かく 頼に 吾は死ぬべし 大君に 吾は仕へむ 吾が角は 御笠の飾 吾が耳は 御墨埴 吾が目らは 眞澄の鏡 吾が爪は 御弓の弓弭 吾が毛らは 御筆飾 吾が皮は 御箱の皮に 吾が肉は 御繪飾 吾が肝も 御繪料 吾がみげは 御鹽の飾 着いたる奴 吾が身一つに 七重花咲く 八重花咲くと 白し賞さね 白し賞さね

右の歌一首は 鹿の爲に痛を述べて作れり

【原文】 乞食者詠二首

尖、立來
は類、聚古
集による
尖者、類
聚古集に
よる。

伊刀古 名兄乃君 居居而 物爾伊行跡波 韓國乃 虎云神乎 生取爾 八頭取持來 其皮乎 多多彌爾刺 八重疊 平羣乃山爾 四月與 五月間爾 藥獵 仕流時爾 足引乃 此片山爾 二立 伊智比何本爾 梓弓 八多婆佐彌 比米加夫良 八多婆左彌 矣待跡 吾居時爾 佐男鹿乃 立來嘆久 頼爾 吾可死 王爾 吾仕 牟 吾角者 御笠乃波夜詩 吾耳者 御墨埴 吾目良波 眞墨乃鏡 吾爪者 御弓之弓波受 吾毛等者 御筆 波夜斯 吾皮者 御箱皮爾 吾穴者 御奈麻須波夜志 吾伎毛母 御奈麻須波夜之 吾美義波 御鹽乃波夜之 耆矣奴 吾身一爾 七重花佐久 八重花生跡 白賞尼 白賞尼

右歌一首 爲鹿述痛作之也

【題意】 乞食者の歌二首である。こゝで云ふ乞食は、歌を唱つて物を乞うて歩く者で、その歌でことほぎ云ふからほがひびとも云ふ。此の歌は、鹿に寄せてほぎことをしてゐる。

【口譯】 親しいあなた方、此の世に住んでゐて何處かに御出でになるとしては、朝鮮の虎と云ふ神を、生取りに八匹取つて來て、その皮を疊に刺し、平群の山に四月と五月の頃に藥獵をなされる時、この片山に二本立つてゐる櫟の木の下に、梓弓を八つ持つて鏡矢を八つ持ち獸を待つとしてゐる時に、鹿が來て歎く事には、たちまちに私は死ぬでせう。大君に私は仕へませう。私の角は御笠の飾に、私の耳は御墨埴に、私の目は澄み透つた鏡に、私の爪は御弓の弓弭に、私の毛は御筆のにぎはひに、私の皮は御箱の皮に、私の肉は御繪のにぎはひに、私の肝は御繪のにぎはひに、私の血は御鹽のにぎはひになりませう。老い果てた奴私の身一つに七重にも八重にも花が咲くと御譽め下さいませ。

【釋義】 愛子 極めて親しい人をイトコと云ふ。汝夫の君 ナセは、男子に對する二人稱で、あなたの意。キミ

は、先方に對する敬語。居り居りて 居る事の引き續いてゐるを云ふ。すみすみと云ふに同じ。物にい行くとは モノは、何處ともはつきりと指さない云ひ方。物語の物の意に同じ。イは接頭語。虎とふ神を 虎は恐るべき獸類であるから、これを神として扱つてゐる。虎と云ふ神をの意である。疊に刺し 虎の皮を疊まれるもの即敷物に作りの意である。八重疊 枕詞。語義は確でないが、疊を八重重ねる意味に、へを導くのであらう。平群の山に 大和の國の山の名。藥獵 鹿の若い角を藥にする爲に取る獵。仕ふる時に つかまつる時に。この片山に カタヤマは、片への山で、近くにある山。ひめ鏡 本居宣長の説に、樋目鏡で鏡矢の穴の長くして目の形をなしてゐるのを云ふと云つてゐる。立ち來嘆かく 傍に來て歎いて云ふ事には、この次の「たちまちに」から歌の終まですべて鹿の云ふ事である。御笠の飾 ハヤシは、にぎはせる爲の科で、その材料と云ふ程の意。吾がみげは ミゲは、未詳。和名抄の今按に、俗謂「藥鹿」爲「味氣」是である。これに依れば鹿の糞をミケと云つたと見える。御鹽の飾 ミシホは、肉醬で、鹽を交せてつけたもの。これに依れば鹿の臟腑であらうか。著いたる奴 年老いたる奴婢の意で、役に立たぬ下人の意である。年六十以上の奴を耆奴と云ふ。白し賞さね云ひ立てて譽めはやして下さいと希望する語法である。

六三八八

押し照るや 難波の小江に 鷹作り 隠りて居る 葦蟹を 王召すと 何せむに
 吾を召すらめや 明けく 吾が知ることを 歌人と 吾を召すらめや 笛吹と 吾
 を召すらめや 琴彈と 吾を召すらめや 彼も此も 命受けむと 今日今日と 飛
 鳥に到り 立てども 置勿に到り 策かねども 桃花鳥野に到り 東の 中の門ゆ

參納り來て 命受くれれば 馬にこそ 絆掛くもの 牛にこそ 鼻繩はくれ あしひ
 さの この片山の もむ楡を 五百枝剝ぎ垂り 天光るや 日の氣に干し 轉る
 や 柄確に春き 庭に立つ 碓子に春き 押し照るや 難波の小江の 初垂鹽を
 辛く垂り來て 陶人の 作れる瓶を 今日往き 明日取り持ち來 吾が目らに 鹽
 漆り給ひ もち賞すも もち賞すも

右の歌一首は 蟹の爲に痛を述べて作れり

- 【原文】 忍照八 難波乃小江爾 鷹作 難麻理豆居 葦河爾乎 王召跡 何爲奉爾 吾乎召良米夜 明久 吾知
 事乎 歌人跡 和乎召良米夜 笛吹跡 和乎召良米夜 琴引跡 和乎召良米夜 彼毛 命受奉等 今日今日跡
 飛鳥爾到 雖立 置勿爾到 雖不策 都久怒爾到 東 中門由 參納來豆 命受例婆 馬爾已曾 布毛太志可
 久物 牛爾已曾 鼻繩波久例 足引乃 此片山乃 毛武爾禮乎 五百枝波伎垂 天光夜 日乃異爾干 佐比豆
 留夜 辛碓爾春 庭立 碓子爾春 忍光八 難波乃小江乃 始垂乎 辛久垂來豆 陶人乃 所作瓶乎 今日往
 明日取持來 吾目良爾 鹽漆給 時賞毛 時賞毛

右歌一首 爲蟹述痛作之也

【題意】 前の歌と同じく乞食の歌で、これは蟹に寄せていはひことを述べてゐる。

【口譯】 難波の江に小屋を造つて隠れてゐる蟹をお召しになるといふ事でございますが、何の爲に私をお召しに
 なるのでせうか。笛を吹くものとしてお召しになるのでせうか。琴を弾くものとしてお召しになるのでせう
 か。何れにしても御命令を受けようと、飛鳥に到り置勿に到り又桃花鳥野に到り、東の中の御門から入つて行

命飛鳥は
 類聚古集
 による。
 春兩字、
 和井本等
 による。

つて御命令を受けますると、馬には手綱をつけるもの牛には鼻繩をつけるものと言ひますが、此の傍の山の楡の木を澤山下して来て、日の光に乾し、柄碓に搗いて又碓子に搗いて、難波江の鹽を辛く垂らして、陶物造りの造つた瓶を今日行つて明日取つて来て、私の目に鹽を御塗りになつてもはやされる事でございます。

【釋義】押し照るや 難波の枕詞。ヤは、調子を調へる詞。難波の小江に ヲは、接頭語。難波江の事である。廬作り イホは、假小屋を言ふ。蟹の穴を造るのを家を造ると言つてゐる。隠りて居る ナマルは、隠れるの古語。葦蟹を 葦邊にゐるものであるからいふ。鶴を葦田鶴といふ類である。大君召すと 天皇が御召しになると聞くの意。何せむに 何の爲にかと疑ふ意の言葉。吾を召すらめや 自分を御召しになる事であらうかと疑つて言ふ語調。明けく吾が知ることを 明に自分の知つてゐる事を歌ふ人の意に續く句である。歌人はすべて物識として尊ばれてゐた時代の名残を表してゐる。歌人と この歌人は、歌を以つていはひことをし、又歴史の物語などを語る者を指していふので、知る事を歌ふものの意に言ひ續けてゐる。彼も此も 原文、彼毛の二字だけであるが、意を以つてカモカクモと讀む。なほ脱字となす説もある。何れにしてもかにもかくにも意である。今日今日と 次の飛鳥の枕詞で、今日は明日に續くといふ程の意に、今日今日と飛鳥に到ると言つてゐる。立てども 置勿の枕詞。オキナは、地名。策かねども 次の桃花鳥野の枕詞。ツクヌは、地名。馬にこそ絆掛くもの フモダシは、馬につける手綱を言ふ。馬には綱をつけて、是を御するに便にするから馬には綱をつけるものと言つてゐる。牛にこそ鼻繩はくれ ハナナハは、牛の鼻につける繩を言ふ。ハクレは、取りつける意で、弓の絃をはくなどと言ふ。以上は、馬や牛は斯様に綱などをつけられて苦しい目に逢ふが、自分は蟹であるのに又この様な目に逢ふといふ意味に言つてゐる。もむ楡を 百楡で、楡の木が多いの言ふのであ

らう。五百枝剥ぎ垂り イホエは、枝の数の多いの言ふ。ハギタリは、皮を剥いで垂れるといふ意で、楡の木は、皮を剥いで日に乾して臼に搗き粉にして食用に供するものである。天光るや アマテルは、日の氣に續く語法で、ヤは、調子の語。日の氣に干し ケは、けはひで太陽の光をいふ。轉るや 枕詞。さひづるからと續く。外國の人は言語が不明で、鳥などの轉るやうに聞えるから、カラの枕詞とする。柄碓に舂き 柄がついてゐてこれを廻して搗き粉とする。臼で搗いてである。碓子に舂き 石で作つた臼である。以上は、楡の皮をまづ日に乾し柄碓で大體細くし、更に碓子で粉にするのである。初垂鹽を 始めて垂れた鹽の事で、上等の鹽である。辛く垂り来て よく利く鹽を作つて来ての意である。陶人の作れる瓶を 陶器を作る工人の作つた瓶をで、その瓶に蟹と楡粉とを合せて、これに鹽をかけてつけるのである。

五 無 常 附虚無

佛教の日本に入り來つたのは、かなり早くからの事であらうが、漸次人人の中に染み透つて行き、これが思想として歌の上に表れるに至つたのは、主として藤原の宮時代以後の事と思はれる。かくてこの集に載つてゐる歌の中、無常に及んでゐるものの數首をここに載せる。

次に佛教に後に入り來つたのは支那の道教思想で、これは殊に奈良朝の初期に於いてその思想が歌の上にも表れて來てゐる。今便宜上、無常思想に附するにこの虚無に遊ぶ意味の歌を載せておく。いづれも作者の知れぬもののみである。

九二二六

○所に就きて思を發す

卷向の 山邊とよみて 行く水の 水泡のごとし 世の人吾は (人麻呂集)

【原文】 就所發思

卷向之 山邊響而 往水之 三名沫如 世人吾等者

【題意】 山河の景に臨んで作者の思想を發表した作品である。

【口譯】 卷向の山のほとりを響かせて流れ行く水の泡のやうなものである、この世の人なる吾等は。

【釋義】 卷向の 地名。大和の國。水泡のごとし ミナワは、水の泡の義。「水沫なす脆き命も」(卷五、九〇二)。世の人吾は 世の人なる吾等の意である。原文に吾等と書いてゐるのは、訓の上では、ワレであるが、意味は自分一人ではなく大勢を合せて言つてゐる事を表す。原文の文字が意味を知るに重要なものを示す一例である。

○世間の無常を厭ふ歌三首

生死の 二つの海を 厭はしみ 潮干の山を しぬびつるかも

【原文】 厭世間無常歌一首

生死之 二海乎 厭見 潮干乃山乎 之努比鶴鴨

【題意】 以下二首は、世間の常無き事を厭うた歌で、河原寺の佛堂の倭琴の面に記し付けてあつた歌である。

【口譯】 生と死との二つの海の厭はしさに、潮の干てゐる山を念ひやつたことである。

【釋義】 生死の二つの海を 華嚴經に云ふ、「何能度生死海」入佛智海。生死の苦しさを海に喩へてゐる。生き

九三八四

三三五

る事も厭はしく死も厭はしい意である。厭はしみ 厭はしくあるが故に。潮干の山を 海が厭はしいのでこれを免れた彼岸の意味に言つてゐる。海を厭うて山に行かうとする譬喩である。しぬびつるかも この世に生ける人はすべて生死の海に漂うてゐる。それでそこから脱して寂滅の所を願ふのを、しぬびつると言つてゐる。念ひやる意である。

世間の 繁き借廬に 住み住みて 至らむ國の たづき知らずも

右の歌二首は 河原寺の佛堂の裡に 倭琴の面にあり

【原文】 世間之 繁借廬爾 住住而 將至國之 多附不知聞

右歌二首 河原寺之佛堂裡 在倭琴面之

【口譯】 この世の中の事繁き假の家に住居してゐて、行かうとする國の道も知らぬ事である。

【釋義】 繁き借廬に この世はあたかも假の家であつて、長く住みつくべき所でない意味を表してゐる。事の繁くあるこの假の家の意で、この世に生きてゐる事を言つてゐる。至らむ國の 厭ふべき世から逃れて行くべき國で、佛教の深奥の所を指してゐる。たづき知らずも タヅキは、手のつけ所、絲口等の意。如何にせばよいか、絲口も知れぬの心である。

倭琴は古葉略類聚に由る

三三五

○

鯨魚取り 海や死する 山や死する 死ぬれこそ 海は潮干て 山は枯すれ

五無 常

九四五

右の歌一首

【原文】 鯨魚取 海哉死爲流 山哉死爲流 死許曾 海者潮干而 山者枯爲禮

右歌一首

【口譯】 海は死ぬものでありませうか、山は死ぬものでありませうか。死ねばこそ海は潮が干て山は枯れるのであります。

【釋義】 鯨魚取り 海の枕詞。海や死する 海は永久にして變るものではないの意味に、海が死ぬものですかと
言つてゐる。次の句も同じである。まづ海や山の常久不變である事を叙してゐる。死ぬれこそ 死ぬればこそ
で、條件法。海は死ぬものではないと言つた上の句を受けて、さうではない死ねばこそ斯くの如き事があるの
意に、條件を起してゐる。海は潮干て山は枯すれ 海山の不變な事を言つたが、實は海山も死を免れぬもので
あつて、死ねばこそ潮も干る事もあり山は草木が枯れる事があると歌つてゐる。この世のあらゆるもの、一と
して無常の理にはづれるものはない事を言つてゐる。

【餘論】 無常を歌つた歌は多く譬喩を用ゐてゐるが、是も亦その一つである。海や山の如く不變の物を持ち來つ
て、それもやはり無常の理に背かぬといふ事を歌ひ、以つて佛教の理を説いてゐる。海や死する山や死すると、
兩頭に記し、下には是を受けて、海は潮干て山は枯すれと結んだ句が整つてゐて興味がある。

心をし 無何有の郷に 置きてあらば 藐姑射の山を 見まく近けむ

藐姑射は
類聚古集
等による

右の歌一首

【原文】 心乎之 無何有乃郷爾 置而有者 藐姑射能山乎 見末久知香谿務

右歌一首

【口譯】 心を無何有の郷に置いたならば、藐姑射の山を見る事も近いであらう。

【釋義】 心をし シは、強めるだけの助辭で、心をといふに同じ。無何有の郷に 莊子に「彼至人者歸精神乎無
始而甘瞑乎無何有之郷。」とあるに因る。無爲の意を譬喩に表したもので、何事もない郷といふ程の意である。
心をさういふ境に置く事をよしとしてゐる。藐姑射の山を 同じく莊子に、「藐姑射山、有三人居焉。肌膚
若氷雪。綽約若處士。不食五穀、吸風飲露、乘風氣、御飛龍、而遊四海之外、其神凝使物不疵癘、而年穀
熟。」藐姑射の山は理想郷で、やはり人の無爲にして到る境地を山に喩へて言つてゐる。見まく近けむ ミマク
は、見むことで、やがてその地を見る事も近いであらうの意である。

【餘論】 この歌一首は、すべて莊子の語を取つて歌つてゐる。人の心を無爲の地に置いたならば、やがて本眞の
地に到るであらう事を歌つてゐる。老莊思想の骨をそのままに直譯的に歌つたまでのものである。

六挽 歌

挽歌の字は、支那から持ち來つたもので、元來柩車を挽く時の歌、すなはち葬式の歌である。それを萬葉集では
廣い意味に解して、人を悼む歌をすべて是に收めてゐる。中にはみづから悼むいはゆる辭世の歌も入つて居る。

九〇一一二
倭琴は元
曆校本等
による。

○倭琴を詠める
琴取れば なげき先立つ けだしくも 琴の下樋に 嬌や匿れる

【原文】 詠三倭琴一
琴取者 嘆先立 蓋毛 琴之下樋爾 嬌哉匿有

【題意】 倭琴を詠んだ歌であるが、その内容から推して亡妻を悼んだ歌である事が知られる。

【口譯】 琴を手にすると歎が先立つ事である。恐らくは琴の下樋に妻が隠れてゐるのであらうか。

【釋義】 なげき先立つ まづ歎息せられる意である。けだしくも ケダシクは、ケダシといふ形容詞の副詞形。推量するに、推し量るに等の意。琴の下樋に シタヒは、琴の裏の空洞になつてゐる所を言ふ。嬌や匿れる 亡くなつた妻が琴の中の洞に隠れてゐる事かと疑つてゐる。妻を失つた人がその妻の手馴れの琴を手にして、妻が隠れてゐるかと思つた心を表してゐる。

【餘論】 古代の挽歌は、物は残つてゐてその人は亡くなつたといふ心を歌つたものが多い。この歌もその類であるが、亡くなつた妻がそのあたりに隠れてでもゐるかのやうに思ふ心が哀である。もとより作者の名が記されてゐないから、確とした事は言はれぬが、或は大伴旅人あたりの作品ではないかと思はれる。

福の かななる人か 黒髪の 白くなるまで 妹が音を聞く

七〇一四一

【原文】 福 何有人香 黒髪之 白成左右 妹之音乎聞

【口譯】 如何なる幸福の人が黒髪の白くなるまで妻の聲を聞くのであるか。

【釋義】 福のいかなる人か どれ程の幸福の人であるか斯くの如きはの意である。

○
百小竹の 三野の王 西の厩 立てて飼ふ駒 東の厩 立てて飼ふ駒 草こそは
取りて飼ふがに 水こそは 抱みて飼ふがに 何しかも 草毛の馬の 嘶え立ちつ
る

【原文】 百小竹之 三野王 金廐 立而飼駒 角廐 立而飼駒 草社者 取而飼早 水社者 抱而飼早 何然
大分青馬之 鳴立鶴

【題意】 この歌、題も何も記してないが、歌の意味から推すと、三野の王が亡くなられた時の挽歌であらうと思はれる。

【口譯】 三野の王は、西の厩を立てて駒を飼ひ、又東の厩を立てて駒を飼ふ。その駒を草を取つて飼ふであらうのに、水を汲んで飼ふであらうのに、何としてか草毛の馬が嘶き立てるのであるか。

【釋義】 百小竹の 枕詞。小竹の多い意味に三野に懸るのであらう。三野の王 三野の王は、一人ならず見えるが、多分橋諸兄の父であらう。若しさうとすれば、元明天皇の和銅元年五月に卒して居られるから、この歌もその頃の作品であらう。西の厩 金をニシと讀むは、五行説に、西方を金にあてるからである。東の厩 角

七〇三三二

をヒムガシと讀むは、宮商角微羽の五聲を五行に配當する時、角は東方に相當するから東の字に當てて用ゐてゐる。取りて飼ふがに 取つて飼ふであらうのにの意で、ガニは、助辭で、豫想の語意を表してゐる。

【餘論】 三野の玉の飼ふ駒は元に變らずに飼ふであらうのに、どうして心もない馬が嘶き立ててゐるのであらうと歌つてゐる。馬も主人の死を知つて悲んでゐるかのやうに思はれるとの意である。やはり遺物獨存し、しかもその人無き心を歌つた古形式に屬するものである。

○反歌

衣袖を 葦毛の馬の 嘶ゆ聲 情あれかも 常ゆ異に鳴く

右二首

【原文】 反歌

衣袖 大分青馬之 嘶音 情有異 常從異鳴

右二首

【口譯】 葦毛の馬の嘶聲が、心がある故にか、常と變つてないてゐる。

【釋義】 衣袖を 枕詞であらうが、如何に葦毛に懸るかは解らない。諸説はあるがいまだ定る所を知らぬ。情あれかも 情あればかの意の疑問條件法である。

續作、爾志は元曆校本等に

隱口の 長谷の川の 上つ瀬に 鶺鴒を八頭潜け 下つ瀬に 鶺鴒を八頭潜け 上つ瀬の 年魚を咋はしめ 下つ瀬の 鮎を咋はしめ 麗し妹に あゆを惜しみ 投ぐる 箭の 遠離り居て 思ふそら 安からなくに 嘆くそら 安からなくに 衣こそは それ破れぬれば つぎつつも 又も逢ふと言へ 玉こそは 緒の絶えぬれば 括りつつ またも逢ふと曰へ またも逢はぬものは 嬌にしありけり

【原文】 隱來之 長谷之川之 上瀬爾 鶺鴒八頭潜 下瀬爾 鶺鴒八頭潜 上瀬之 年魚矣令咋 下瀬之 鮎矣令咋 麗妹爾 鮎遠惜 投左乃 遠離居而 思空 不安國 嘆空 不安國 衣社薄 其破者 繼乍物 又母相登言 玉社者 緒之絶薄 八十一里喚雞 又物逢登曰 又毛不相物者 嬌爾志有來

【題意】 以下三首は、妻を悼んだ挽歌である。

【口譯】 長谷の川の上の方の瀬に鶺鴒を八羽潜らせ、下の方の瀬にも鶺鴒を八羽潜らせ、上の方の瀬や下の方の瀬の年魚を食はしめる。その麗しき妻に遠ざかつてゐて、思ふ心が安くなく、嘆く心も安くなく、衣は破れると繼いで又合ふといふし、玉は緒が絶えるとくりながら又逢ふといふ事である。しかし又と逢はぬものは妻であつた。

【釋義】 隱口の 枕詞。以下下つ瀬の鮎を咋はしめまでの十句は序で、その次の麗し妹にを起すだけの料である。麗し妹に 麗しい妻にである。鮎を惜しみ この句原文、鮎遠惜とあつて他に讀み方もないが、アユヲラシミでは意味が取りにくいので、必何かの誤であらうと言はれてゐる。賀茂眞淵は辭遠借の誤としてコトトホザカリと讀み、鹿持雅澄は副猿緒の誤としてタグヒテマシヲと讀んでゐる。しかしまだ定説とすべきを知らない。投

ぐる箭の 手にて投ぐる矢の事である。しかし普通の矢をも轉じては投ぐる箭と言つたと思はれる。次の遠離りの枕詞として用ゐてゐる。思ふそら 思ふ心の上を言ふ。

一三三三

隠口の 長谷の山 青幡の 忍坂の上は 走出の 宜しき山の 出立の 妙しき山
ぞ 惜しき山の 荒れまく惜しも

原校本等による。

【原文】 隠來之 長谷之山 青幡之 忍坂上者 走出之 宜山之 出立之 妙山叙 惜山之 荒卷惜毛
【口譯】 長谷の山の忍坂は走り出た形の宜しい山で、立ち出た姿の美しい山である、その惜むべき山の荒れゆく事が惜しい事である。

【釋義】 青幡の 枕詞。續きがらは未詳である。忍坂の上は 長谷の山中の一地名。長谷は廣きに渡つて稱してゐる。この句もと忍坂山者と書いてあつて、オシサカノヤマハ若しくはオサカノヤマハと讀んでゐた。今元曆校本、天治本等の古本を見るに、忍坂上者に作つてゐる。今これに因つてオシサカノヘハと讀んでおく。忍坂はオシサカと讀むがよい。走出の 山の形が走り出たやうなのを言ふ。出立の これも山の姿である。惜しき山の荒れまく惜しも 惜しむべき山が荒れる事が惜しいと言ふので、亡くなつた人を山に喩へてゐる。

【餘論】 この歌は山をほめてゐる。さうしてその山に亡くなつた人を喩へてゐるが、集中にも人を山に喩へた歌は數出してゐる。昔の人が山に親みを感じ、是を愛して來た生活が思はれる。都會發達以前の歌である。なほこの歌は日本書紀の雄略天皇の卷に類歌が出てゐる。それは天皇の泊瀬の小野に遊び給ひ、山野の體勢を御覽になつて感起してお詠みになつた歌としてゐる。その歌は

隠り口の泊瀬の山は、出で立ちの宜しき山、走り出の宜しき山の、隠り口の泊瀬の山は、あやにうら麗し、あやにうら麗し。

二三三三

高山と 海こそは 山ながら 斯くも現しく 海ながら 然直ならめ 人は花物ぞ
うつせみの世人 右三首

【原文】 高山與 海社者 山隨 如此毛現 海隨 然直有目 人者花物會 空蟬與人 右三首

花物は元原校本等による。

【口譯】 高山と海は、山であるまにかやうに明に存し、海であるまに正しくあるであらう。しかし人ははか無きものであるよ、この世の人は。

【釋義】 山ながら 山であるまに、山なるが故に、山の本質としての意。海ながらも同様。かくも現しく ウツシは、現にこの世にある意の語。體を具へてゐるものに用ゐる。この通りちゃんと存在してゐる意味である。然直ならめ タダは、正しくある事。本當に存在してゐる事。その通りちゃんと在るであらうの意。タダナラメは、タダニアラメで、アラメは、上のウツシクとタダニと兩方を受けてゐる。メと結んだのは上にコソがあるからである。人は花物ぞ ハナモノは、一時は美しく榮えるが、やがて衰へるものではか無きものに用ゐてゐる。「しらが付く木綿は花物言こそは何時の眞枝も常忘らえぬ」(卷十二、二九九六)。うつせみの世の枕詞。

【餘論】この歌は、前に出した鯨魚取り海や死する云々の歌に、海も山も無常のものであるとなしてゐるのに變つて、海や山は常久の形を有してゐるが人だけにはかなきものであるといふ意を歌つてゐる。歌がらから言つて或る一人の人を悼む作といふよりは、むしろ一般に無常の思想を教へた歌となすべきであらう。

第四章 東歌と北國の歌

萬葉集の歌の大部分は大和の國又はその近隣の國を舞臺として作られてゐる。その他筑紫、又東國北國にての作もあるが、それ等は多くは詩人なる作者が旅行をしての歌であつた。然るに別に東國人の作又北國人の作と認むべきものがあつて、是等は大和人の作に比して民謡性の豊かな作品である。今是等を集めてこの章を作る。

一 東 歌

東國人の歌は、前に擧げた防人の作の他に卷十四に東歌として作者の傳はらぬ作品を集めて一卷となしてゐる。嚴密に言へばこの卷十四の歌は悉く東國人の作品とは言ひ難いものであるが、その中に又東國人の歌を含んでゐる事も否めない。今この卷からの歌をここに集めて録しておく。

八三三四

夏麻引く 海上濁の 沖つ渚に 船はとどめむ さ夜ふけにけり

右一首は上總の國の歌

【原文】 奈都素妣久 宇奈加美我多能 於伎都渚爾 布禰波等杼米牟 佐欲布氣爾家里

右一首 上總國歌

一 東 歌

【題意】この一首は上總の國の歌である。

【口譯】海上瀉の沖の方の洲に船は停めよう、夜が更けてしまった。

【釋義】夏麻引く ナツソは、夏刈りの麻で、麻を取り入れる事をヒクと言ふ。麻から苧を作ると言ふ意で續くのであらう。海上瀉 上總の地名。沖つ渚に 沖の方の浅き砂地である。

【餘論】この歌は、船に乗つて旅する者が海上瀉の沖の浅瀬で夜が更けたから船をとめよといふ内容を持つてゐる。さうして恐らくは、上總の人の作でなしに旅行をして來た人、多分京人の歌であらうと言はれてゐる。

五三三六

鎌倉の 見越の埜の 石崩の 君が悔ゆべき 心は持たじ

右十二首(十一首略)は相摸の國の歌

【原文】可麻久良乃 美胡之能佐吉能 伊波久鞆乃 伎美我久由倍伎 已許呂波母多自

右十二首 相摸國歌

【題意】この一首は相摸の國の歌である。

【口譯】鎌倉郡の見越の埜の石崩のやうに、あなたの後悔なさるやうな心は持ちますまい。

【釋義】鎌倉の見越の埜の 地名。鎌倉郡の地の見越の埜の。石崩 岩の崩れ落ちてゐる所。以上三句は次の悔ゆべきと言はむが爲の序で、イハクエのクユと同じ音を重ねてゐる。君が悔ゆべき 自分はあなたが後悔なさるやうな不實な心は決して持ちますまいの意である。

三三三七

多麻河に 曝す手作 さらさら 何ぞこの兒の 許多愛しき

【原文】多麻河伯爾 佐良須氏豆久利 佐良佐良爾 奈仁曾許能兒乃 已許太可奈之伎

【題意】以下二首は武藏の國の歌である。

【口譯】多麻河に、さら／＼その手作の布を曝す、そのやうに、さら／＼特に、どうしてこの兒が非常にかはゆいのであらう。

【釋義】多麻河に 武藏の國の多麻河である。曝す手作 水に洗つて色を白くする手作りの布。手作は、民間で作る布で、調資にも用ゐられる。以上は曝すと云つて、次句のさら／＼にを喚び起してゐる。さら／＼に改めて、特に。

戀しけば 袖も振らむを 武藏野
の 朮が花の 色に出なゆめ

右九首(八首略)は武藏の國の歌

【原文】古非思家波 素氏毛布良武乎 牟射志野乃

宇家良我波奈乃 伊呂爾豆奈由米

右九首 武藏國歌

【口譯】戀しくあらば袖も振りませうものを、武藏野の朮の花のやうに決して色に表さないやうに。



ら け ろ

河伯は元
曆校本等
による。

六三三七

【釋義】 武藏野の朮が花の 以上二句は、色に出と言はむが爲の序である。ウケラは、一名オケラともいふ菊科の植物の名。菊に似てゐる。(口繪参照) 色に出なゆめ 表に表れるなけれ。ユメは、注意して決して等の意。

四三三八

葛飾の 眞間の手古名を まことかも 吾に依すとふ 眞間の手兒名を

【原文】 可都思加能 麻末能手兒奈乎 麻許登可聞 和禮爾余須等布 麻末乃氏胡奈乎

【題意】 以下三首は下總の國の相聞の歌である。

【口譯】 葛飾の眞間の手古名を、ほんとでせうか、私に添はせるといふ事である、あの眞間の手古名を。

【釋義】 葛飾の眞間の手古名を 葛飾郡の眞間の地の手古名である。テコナは、民間の女子の義で、テは、働く意味を表す語。ナは、親みを表す爲に添へてゐる。吾に依すとふ 自分に依せるといふ事である。第三者が彼の女を自分に添はせるといふ話だの意である。眞間の手古名を 感激の意を強くする爲に重ねてこの句を用ゐてゐる。最後のヲは、感激の意味の助辭である。

六三三八

鳩鳥の 葛飾早稻を 饗すとも 其の愛しきを 外に立てめやも

【原文】 爾保杼里能 可豆思加和世乎 爾倍須登毛 曾能可奈之伎乎 刀爾多氏米也母

【口譯】 葛飾の地の早稻を以つて神を祀つてもあの愛すべき人を外に立たせておきませうや。

【釋義】 鳩鳥の 枕詞。水鳥の名で、水に潜ぐから葛飾の枕詞となつてゐる。葛飾早稻 葛飾の地で取れる早稻である。饗すとも その年の新穀を以つて神を祀るのをニヘスと言ふ。その神祭をしてゐても意である。この饗の夜は極めて神聖な夜で、外來者等の居る事を絶対に嫌ふのである。神を祭るは婦人の務であるから、この饗をしてゐるのは婦人で、即この歌は女子の歌と見るべきである。その愛しきを あの愛すべき人すなはち女子の許に訪れて來る異性を指してゐる。外に立てめやも トは、外で、神聖な祭をしてゐても外に立たせておかうや、さういふ事は出來ぬ。

七三三八

足の音せず 行かむ駒もが 葛飾の 眞間の繼橋 やまず通はむ

右の四首(一首略)は下總の國の歌

【原文】 安能於登世受 由可牟古馬母我 可都思加乃 麻末乃都藝波思 夜麻受可欲波牟

右四首 下總國歌

【口譯】 足の音がしないで行く馬も欲しい事である。あの葛飾の眞間の繼橋をやまずに通つて行かう。

【釋義】 行かむ駒もが コマモガは、駒もあれかしと願ふ意である。眞間の繼橋 ツギハンは、河中で板を繼いで懸けてある橋。やまず通はむ 女子の許に中絶する事なしに通はうといふ意で、この歌も眞間の手古名の許に通つて行かうといふ意の歌と思はれる。

八三三九

人皆の言は絶ゆとも 埴科の石井の手兒が言な絶えそね

【原文】 比等未奈乃 許等波多由登毛 波爾思奈能 伊思井乃手兒我 許登奈多延曾禰

【題意】 以下二首は信濃の國の相聞の歌である。

【口譯】 すべての人のおとづれは絶えても、埴科の石井の手兒の便は絶えない事を望みます。

【釋義】 言は絶ゆとも 言葉が絶えるとも、便のきこえなくなるとも意である。埴科の 信濃の國の郡名。石井の手兒が インキは、地名と思はれるが、今の何處とも知られない。テコは、手古名と同じ語で、その地の民間の女子を言ふ。

信濃道は 今の墾道 刈株に 足踏ましなむ 履著け我が夫

右の四首(二首略)は信濃の國の歌

【原文】 信濃道者 伊麻能波里美知 可里婆禰爾 安思布麻之奈牟 久都波氣和我世

九三三九
奈牟は元
曆校本に
よる。

右四首 信濃國歌

【口譯】 信濃道は新しく切り開いた道であります。木の切株に足を御踏みになるでせう、履をおはきなさいませ我が君よ。

【釋義】 信濃道は 信濃の國に行く道、又は信濃の國の中でもその中心地方に行く道をいふ。この歌では、和銅年間に時の美濃の守であつた笠麻呂が切り開いた木曾道をいふと思はれる。次の今の墾道の句が、この道が出

一三四二

伊香保嶺に 雷な鳴りそね 吾が上には 故は無けども 兒らに因りてぞ

右二十二首(二十一首略)は上野の國の歌

【原文】 伊香保禰爾 可未奈那里曾禰 和我倍爾波 由惠波奈家杼母 兒良爾與里氏曾

右二十二首 上野國歌

【題意】 この一首は上野の國の相聞の歌である。

【口譯】 伊香保の山に雷が鳴つてはいけません。私の上には何事ありませんが愛する人の爲にです。

【釋義】 雷な鳴りそね カミは、雷を言ふ。上のナがなかれの意味になる。兒らに因りてぞ コラは、作者の愛する人を指してゐる。作者の妻が雷を恐れるので、その故に雷に鳴るなかれと希望するのである。兒らの故に因りてぞ雷なるなかれの意である。

下毛野 安蘇の河原よ 石踏ます 空ゆと來ぬよ 汝が心告れ

右の二首(一首略)は下野の國の歌

【原文】 志母都家努 安素乃河泊良欲 伊之布麻受 蘇良由登伎努與 奈我已許呂能禮

右二首 下野國歌

【題意】 この一首は下野の國の相聞の歌である。

【口譯】 下野の安蘇の河原を通つて石を踏ますに空から來ました。あなたの心を言つて下さい。

【釋義】 安蘇の河原よ 下野の國にもと安蘇の郡といふのがあつた。その地を流れる河。渡良瀬川の一部の名であらう。ヨはユと同語で、その中を通つてといふ意味を表す助辭。安蘇の河原を通つて。空ゆと來ぬよ 空中から來たの意で、心も空に物おもひに耽つて何も覺えずにの意を表してゐる。下のヨは、詠嘆の辭。自分の來た事を表してゐる。汝が心告れ 斯くの如く私は訪れて來たのだからそなたの心を述べて下さいと命令法を用ゐてゐる。

○雜歌

都武賀野に 鈴が音きこゆ 上志太の 殿の仲子し 鳥狩すらしも

或本の歌に曰はく みつが野に 又曰は

【原文】 雜歌

都武賀野爾 須受我於等伎許由 可牟思太能 等能乃奈可知師 登我里須良思母爾

或本歌曰 又曰 美都我野 和久期思

【題意】 以下は何處の國の歌とも知れぬのを集めてゐる。

【口譯】 都武賀野に鈴の音が聞える。上志太の殿の若様が鷹狩をしてゐると見える。

【釋義】 都武賀野に 所在不明。鈴が音きこゆ 鷹の尾につけた鈴の音が聞えるのである。上志太の 所在未詳である。駿河の國に志太の郡があり、又攝津の國にも上志太の地がある。その他にも同名の地があるであらう。殿の仲子し トノは、建築物の義からその家の主人を指す。この歌では上志太の地の支配者を指してゐるのであらう。ナカチは、中の兒の意味で、若い人である事を語つてゐる。シは、助辭。鳥狩すらしも トガリは、鷹を以つて狩をする事。みつが野に 是も所在未詳である。ワクゴは、若主人を言ふ。シは、助辭。

鈴が音の 早馬驛の つつみ井の 水を賜へな 妹が直手よ

【原文】 須受我禰乃 波由馬宇馬夜能 都追美井乃 美都乎多麻倍奈 伊毛我多手欲

【口譯】 鈴の音のする驛家の清らかな井戸の水を下さい。あなたの手から、ぢかに。

【釋義】 鈴が音の 驛馬の鈴の音で、次の句を修飾してゐる。早馬驛の ハユマは、早馬で、その馬の置いてある驛のである。ウマヤは、宿驛を言ふ。つつみ井の 不淨にならないやうに周圍を圍つてある井。キは、飲用水等を汲み取る所で、水を溜めてある所を廣くいふ。水を賜へな 水を賜はれで、ナは調子を整へるために添へた助辭。妹が直手よ タダテは、直の手で、妹の手から直接に水を賜への意である。妹と指してゐるのは何者とも知れないが、多分その驛亭にゐる女子を指してゐるであらう。ヨはヨリの意味で、その人の手からである。

九三四四

しろたへの 衣ころもの袖を 麻久良我まくらがよ 海人あまこ榜こぎ來見ゆ 浪立つなゆめ

【原文】 思路多倍乃 許呂母能素低乎 麻久良我欲 安麻許伎久美由 奈美多都奈由米

【口譯】 白い衣の袖を巻くといふが、その麻久良我から海人が船を漕いで來るのが見える。波よ立たないで下さ。

【釋義】 しろたへの 衣又は袖の枕詞。衣の袖を 以上の二句は序で、袖を枕くといふ意に次のマクを呼び起してゐる。麻久良我よ マクラガは地名であるが、下總の國の地名であらう。同じ卷に「麻久良我の許我の渡」(卷十四、三五五五)とも見えてゐる。ヨは、そこを通つての意。海人榜こぎ來見ゆ 海人が漕いで來る、それが見える。

乎久佐壯子をくさと 乎具佐助丁をぐさすけと 潮舟しほぶねの 竝ならべて見れば 乎具佐勝をぐさかちめり

【原文】 乎久佐乎等 乎具佐受家乎等 斯抱布禰乃 那良敵氏美禮婆 乎具佐可知馬利

【口譯】 乎久佐壯子と乎具佐助丁と竝べて見れば、乎具佐が勝つやうに見える。

【釋義】 乎久佐壯子と ヲクサは、地名であらうが、所在未詳。下のヲグサも同様。乎具佐助丁と スケヲは、助丁で、正丁に對して次丁を言ふ。潮舟の 枕詞。潮海を渡る船の意であらう。海には船を多く漕ぎ出るより竝ぶの枕詞とするのであらう。手具佐勝ちめり 乎具佐助丁が勝つて見える。カチメリは、原文、可利馬利と書いてあつたが、今諸家の説により古本に上の利を知にして作つてゐるに従ふ。メリは、この集ではこの歌だけ

けに用ゐられてゐる。

二三四五

あもしろき 野をばな燒さそ 古草ふるくさに 新草にいぐさまじり 生おひは生おふるがに

【原文】 於毛思路伎 野乎婆奈夜吉曾 布流久左爾 仁比久佐麻自利 於非波於布流我爾

【口譯】 おもしろい野をば燒かないで下さい。古い草に新しい草がまじつて生えれば生えるでせうに。

【釋義】 生おひは生おふるがに 生えれば生えるそのままの意。野を自然のままにまかせて置き度い意を表してゐる。

三三四五

風の音かぜのねの 遠とほき我妹わがもが 著きせし衣 袂たもとの行ゆき 紙かみひ來きにけり

【原文】 可是乃等能 登抱吉和伎母賀 吉西斯伎奴 多母登乃久太利 麻欲比伎爾家利

【口譯】 遠方にゐる吾が妻の着せた衣の袂の縦糸がよつて來ました。

【釋義】 風の音の 遠いとほの枕詞。遠とほき我妹が 作者は家を離れて遠くに旅してゐる。家なる妻を遠とほき我妹と稱してゐる。著きせし衣 妻の着せた衣で、作者の今著てゐる衣服である。袂たもとの行ゆき クダリは、上から下へ通るものを言ふ。織物の縦糸を言ふ。袂の縦糸の縦の方である。紙かみひ來きにけり マヨヒは、織物の糸が一方に寄つて穴が出来るをいふ。着古した意である。「今年行く新島人が麻衣肩の紙かみは誰か取り見む」(卷七、一二六五)

○相聞

戀しけば 來ませ我が夫子 垣内柳 末摘み枯らし 我立ち待たむ

【原文】 相聞

古非思家婆 伎麻世和我勢古 可伎都楊疑 宇禮都美可良思 和禮多知麻多牟

【題意】 以下は國の未詳の東歌の中の相聞の歌である。

【口譯】 戀しいならば御出でなさい吾が君よ。垣の中の柳の枝先を摘み枯らして私は立つて待つて居りませう。

【釋義】 戀しけば 戀しからばの意。垣内柳 垣の中の柳である。末摘み枯らし ウレは、木の若い枝先。手す

さびにその柳の芽を摘んで立つて居ようといふのである。カラシは、枯れさせるである。これを刈らしめるの意に取るのは如何であらう。

稻春けば 輝る我が手を 今宵もか 殿の稚子が 取りて嘆かむ

【原文】 伊禰都氣波 可加流安我手乎 許余比毛可 等能乃和久胡我 等里氏奈氣可武

【口譯】 稻を春きますから鞆の切れる私の手を、今夜も殿の若様が取つて嘆くでせうか。

【釋義】 輝る我が手を カカルは、輝の切れる事。手の皮膚の裂ける事である。殿の稚子が この家の若殿の意。取りて嘆かむ 輝の切れた手を取つて嘆くであらうかと、上の今宵もかを受けて結んでゐる。

誰ぞこの 屋の戸押そぶる 新嘗に 我が夫を遣りて 齋ふこの戸を

【原文】 多禮會許能 屋能戸於曾夫流 爾布奈未爾 和我世乎夜里氏 伊波布許能戸乎

【口譯】 誰ですかこの家の戸をゆすぶるのは、新嘗の祭に吾が夫を外に出して潔齋してゐるこの戸を。

【釋義】 屋の戸押そぶる オツブルは、押し動かす事。新嘗に その年の新穀を神に奉る祭。我が夫を遣りて

新嘗の祭は婦人の爲事であつて、最神聖な祭であるから、家中の男子を外に出してしまふのである。ヤルは、男を出して遣る意である。齋ふこの戸を イハフは、堅く物忌みして出入を禁じてゐる意である。さういふ嚴肅な戸を來て押し試みるは誰であるかといふ意味の歌である。

他妻と 何か其を云はむ 然らばか 隣の衣を 借りて著なはも

【原文】 比登豆麻等 安是可曾乎伊波牟 志可良婆加 刀奈里乃伎奴乎 可里氏伎奈波毛

【口譯】 人妻と何故それを言ふのでせうか。若しさういふならば、隣の著物を借りて着ないものでせうか。

【釋義】 何か其を云はむ 何としてそれを言ふかの意である。どうして人妻と稱して嚴重に手を觸れぬやうに區別するかかといふ意である。然らばか 上を受けて、人妻に對して嚴重に區別するならば、それならばかういふ事は無いのかといふ意に言ひ起してゐる。借りて著なはも ナハは、否定の意の助動詞、ヌの古い活用と認められる。すなわちこの語は古くは、ナニヌネと活用したと思はれる。借りて着ないであらうの意であるが、上の第三句にカがあるから、借りて着ないであらうかの意になる。一首の意は、人妻として特に區別するならば、それならば隣り人の衣服をも借りて着ては悪いのであるかと理窟を言つてゐる。借りて着ないであらうか、それは許されるであらうと言つてゐる。しかしかういふ歌があるのは、反つて古人の人妻に對する嚴肅な氣持を語るものである。

六三五〇

新室の言壽に到れば 是た薄 穂に出し君が 見えぬ此のごろ

【原文】 爾比牟路能 許騰伎爾伊多禮婆 波太須酒伎 穂爾氏之伎美我 見延奴已能許呂

【口譯】 新築の御祝を申しに参りましたが、色に表れた君の見えぬこの頃でありますよ。

【釋義】 新室の言壽に到れば 新築の家の言壽に行けば。コトギは、コトホギで、人々集つて祝言をなす事。はた薄 次の穂に出しの枕詞。穂に出し君が 作者に對して面を表れてゐる君で、心中の思が表面に表れるを穂に出ると言ふ。見えぬ此のごろ その君が何か子細があつて、此のころ何の折にも逢ふ事の出来ない物足りなさを歌つてゐる。

鴉とふ 大輕率鳥の 眞實にも 來まされぬ君を 兒ろ來とぞ鳴く

【原文】 可良須等布 於保乎會杼里能 麻左低爾毛 伎麻左奴伎美乎 許呂久等會奈久

【口譯】 鴉といふ輕々しい鳥が、本當にも御出でにならない君を、來た來たと鳴いてゐる。

【釋義】 鴉とふ 鴉といふに同じ。大輕率鳥の ヲソは、輕率、輕佻などの意。ヲソロとも云つてゐる。もと虚言の意に解してゐたが、それは誤である。考説欄参照。鴉を大變に輕佻な慌て者の鳥と云つてゐる。眞實にも 誠にも、實際にも。兒ろ來とぞ鳴く コロクは、兒が來るの意で、鴉の鳴聲がコロクと聞えるので、鴉がかの君が來ると鳴いてゐると云つてゐる。吾が思ふ人が來もせぬに慌て者の鴉が來たと鳴いてゐるといふ意である。

【考說】 乎會呂考

一三五二

萬葉集卷第四、大伴宿禰河麻呂の歌に、

相ひ見ては月も經なくに戀ふといはば乎會呂と吾を思ほさむかも (卷四、六五四)

といふのがある。仙覺の鈔に「オソロトソラコト、云コト也。アツマ詞ナリ。アヒミテハ月モヘヌニ戀シト云ヘハ、ソラコト、オモハムカトヨメルナリ」(東京帝國大學藏寫本)と釋してゐる。代匠記にも「戀云者ハ、今按コフトイハ、トモヨムヘシ。乎會呂トハ奥義抄云或人云東ノ國ノ者ハ虚言ヲハヲソコトト云ナリ。仙覺抄同意ニテ相見テハ月モヘヌニ戀シトイヘハソラコトトヤ云ハンカトヨメルナリト云ヘリ。今按第二ニオソノタハレヲノ所ニ云カ如クヲソハ今ノ俗ニ偽ヲウソト云コレナルヘシ。ヲトウ五音通セリ呂ハ助語也」と見えてゐる。代匠記に引いた奥義抄の東人の語は「おそのたはれを」の解に出てゐるので、奥義抄の引く所を離れて此處に引用するのは差支ないが、於會と乎會とは同語とは見難いから、代匠記の「於會能風流士」の解に「今云今ノ世偽ヲ云ヲウソツクト申ハ奥義抄ノヲソニヤ。ウハラニモオニモ通ス。ロヲヒソメテ聲ヲ出スヲ嘯ト云ヒウソヲ吹トモイヘハ誠ナキ言モソレカヤウニナンアレハウソ云トモウソツクトモ云ニヤ。ツクハ吐ノ字ナリ。此義ノ用否ハ後ノ人定ムヘシ」といふのを理由として引用してはならぬのである。この外萬葉集管見に「をそはきたなしといふ心也。呂は助詞なり」といふのを外にしては、童蒙抄、考、略解などいづれも乎會呂を虚言の義としてゐる。玉かつま十一の卷、そらごとをうそといふ事の條に、萬葉集の卷四のこの歌及卷十四の歌をあげてこれを釋し、奥義抄に引ける東語を記し、さて「上件の萬葉四の卷なるは東人の歌にはあらざればいにしへはをそといふ言、京人もいひしなり。かくてをそはすなはち今の世にうそといふ言これなり。をとうとは殊にしたしく通ふ言なり」と見え、この後の註釋は悉くこれに従つてゐる。

卷十四の例といふのは、未勘國の相聞の歌、すなはち今の歌であつて、この他に靈異記に、

加良須等伊布於保乎蘇等利能去等乎能未等母邇等伊比天佐岐陀智伊奴留

といふ例がある。この二例はいづれも大をそ鳥と用ゐてゐる。うそは後世の用法ではうそつき鳥とは言ふが大うそ鳥とはいはない。卷四の歌にしても「うそつきと私をお思ひになるでせうね」といふのが普通で「うそと私をお思ひになるでせうね」では、この頃の口語にいふ省略例のやうで、萬葉集の歌にこの語法を發見しようとは思はなかつた。うそにはつくといふ專屬語があるので、この專屬語のみが後世になつて出來たとは考へにくい。

うそ又はをそを虚言の義とするのは中世の物には見えない。眞淵は宣長の「乎會呂はおそのたはれをなどのおそと同じきかと思へど、假字ことなれば別の語と見ゆ。この乎會は俗言に虚言をうそと云に似たるか」との問に答へて「うそといふ考よし。からすといふおほ乎會鳥も大うそ鳥の意ならでは聞えず。俗意の如く思ふにこそ古意は今も有なれ。うそてふ事今京以後に誰かいひはじめんや。古言は今の平言の中にいと多きなり。凡は平言の中に字音ならぬを思ひわきて古言に合せ見給へ。我國は言を傳ふる國なれば上代の言を今もいふ事多し」(萬葉再問)と言つてゐるが、發音が似てゐるからとて、傳來を考へずに古言と今言とを結びつけるのは危険である。

こゝにまた萬葉集卷第八にある大伴坂上郎女の晚芽子の歌に、

咲花毛宇都呂波厭奥手有長意爾尙不如家里

といふのがあつた。この歌の第二句は甚解き難い句である。代匠記には「咲花毛トハ世上ヲ懸テ云。ウツロハウ

キヲトハ移ロハマウキヲナリ。奥手ナル長キ意トハ晚稻ヲ於久手ト云モ今ノ如ク奥手ト云意ナリ。第九ニ左手乃吾奥手トヨメルハ左ノ肢臂ナリ。袖ニ隠レテ長ケレハ此ヨリ出ル詞ニヤト思ヘトツラノ按スレハ手ハ物ニヨクソヘテ云詞ニヤ。初芽子ナトハ早ク盛過テ移ロハマウキヲ、遅キハ憑モシキ所有テ勝レリトヨメルニヤ」と見えてゐる。童蒙抄には第二句を「うつるはうきを」と訓み、略解は第二句の「呂」の下に「布」を落せりとして「うつろふはうし」と訓み「すべて花はうつろふがうき物なれば心長くおそく咲出るにしかざりけりと也」と釋してゐる。古義も略解と同説である。この解釋によれば、咲く花もうつろふはうしといへば、花總體について言ふことになるので、當然早咲も晚咲も含まれる。花は移ろふのがいやなものだと言つてしまつては、奥手なる長き意になほしかずけりが生きて來ない。然るに類聚古集及神田本には、第二句の「宇都」を「乎會」としてある。仙覺抄も流布本は第二句を「ウツロハウキヲ」としてゐるが、東京帝國大學所藏寫本は第二句を、「ヲソロハウキヲ」とし、註に「ヲソロトハヲソキ也。此哥のウツロハウキハナモヲソキハウキモノナレトモ、人ハコ、ロナカキカヨカリケルトヨメルナリ」と見えてゐる。これも流布本には「ウツロトハヲソキ也」云々とあるが、ヲソキ也といふ解よりしても、仙覺抄の原本にはヲソロとなつてゐたものと信ぜられる。然しこの歌の乎會呂を虚言の義と解しては全く意を成さぬのである。この歌に乎會呂の方を取るとしたら、更に別の解釋を下さなくてはならない。奥手なる長き意には及ばぬといふのであるから、乎會呂に早き先立つ意味を含んでゐるのではないかと思はれる。

以上の四個の乎會呂又は乎會の例について考ふるにこれを虚言の義と解しては卷第八の例には全く適せず、他の三個の例についても十分に好適するとは考へられない。よつて虚言の義に代ふるに、はやまる、あわてる、

輕佻などの義を以つてすればよく當るやうである。卷四のは「あひ見てよりいまだ月も経ないのに戀ふといへば、かるはずみな事と私をお思ひになるでせうね」といふ意である。卷八のは「咲く花もあわてゝ咲くのはいやらしい。晚咲の心の長いには及ばない事だ」と解すべく、卷十四のも「鳥といふ大あわて者の鳥が、まさしく來もしない君を、此處へ來ると鳴いてゐる」といふ意であらう。靈異記のは「鳥といふ大あわて鳥が口先ばかり御一緒に参りませうと言ひながら、あわてて先へ行つてしまつた」と解いて極めて恰好なることを覺えるのである。新撰字鏡天治本「麟宜作麟理實反牝曰麟乎會口馬」と見え、類聚名義鈔に「麟音隣騏、連錢驄、ヲソクチ」と見える乎會又はヲソは乎會呂の乎會と同義とも取れるが、乎會口又はヲソクチが、玉篇に驪馬黒唇とあるのに適つてゐるのか、又は馬の性質を説いてゐるのか、未詳である。

九三五二

等夜の野に 兔窺はり をさをさも 寝なへ兒故に 母に嘖ばえ

【原文】 等夜乃野爾 乎佐藝禰良波里 乎佐乎左毛 禰奈敵古山惠爾 波伴爾許呂波要

【口譯】 等夜の野に兎を窺つてゐる、その兎のやうにしかとも寝ない兒故に母親に叱られました。

【釋義】 等夜の野に 所在未詳。兔窺はり 兎を窺ひである。以上二句は、次のをさをさの序となつてゐる。ヲサの音を重ねたのである。まさをさも しかとも。寝なへ兒故に ナへは、否定の助動詞で、寝ぬ兒故である。母に嘖ばえ コロブは、叱責する事。コロバエは、叱られる事。

春の野に 草食む駒の 口息まず 吾を憫ぶらむ 家の兒ろはも

二三五三

【原文】 波流能野爾 久佐波牟古麻能 久知夜麻受 安乎思努布良武 伊敵乃兒呂波母

【口譯】 春の野に草を食ふ駒のやうに、口をやすめずに私を念つてゐるであらう家の妻はどのやうにしてゐるであらうか。

【釋義】 草食む駒の 以上二句は、次の口息まずを起さんが爲の序である。口息まず 口に言ふ事をやまずに。吾を憫ぶらむ 自分を戀ひ慕つてゐるであらうの意で、連體形である。家の兒ろはも イヘノコは、家に残して置いた妻。ロは、添へて云ふ語。家の妻はどうであらうかと下を省略した語氣。

七三五三

垣越しに 麥食む小馬の はつはつに 相見し兒らし あやに愛しも

【原文】 久敵胡之爾 武藝波武古宇馬能 波都波都爾 安比見之兒良之 安夜爾可奈思母

【口譯】 柵越しに麥を食ふ小馬のやうに、辛うじて見た兒がほんに愛すべく思はれる。

【釋義】 垣越しに麥食む小馬の 柵の間から首を出して麥を食ふ小馬の意で、次のはつはつの序としてゐる。辛うじて麥を食ふ意である。はつはつに 辛うじて、僅に。あやに愛しも アヤニは、ほんにと、誠にといふ程の副詞。カナシは、愛すべくある意。

〇三五四

左和多里の 手兒にい行き遇ひ 赤駒が 足掻を速み 言問はず來ぬ

【原文】 左和多里能 手兒爾伊由伎安比 安可故麻我 安我伎乎波夜美 許等登波受伎奴

【口譯】 左和多里の手兒にい行き遇つて、赤馬の足の運びが早いので物を言はないで來た。

【釋義】 左和多里の 地名。所在未詳。手兒にい行き遇ひ テコは、民間の女子の事。イは、接頭語。赤駒が作者の乗つてゐる馬で、赤い馬。足掻を速み アガキは、馬の足の運びで、歩みである。それが早いので。言問はず來ぬ 物を言はないで來たの意。

彼の兒ろと 宿ずやなりなむ はた薄 裏野の山に 月片寄るも

【原文】 可能古呂等 宿受夜奈里奈牟 波太須酒伎 宇良野乃夜麻爾 都久可多與留母

【口譯】 あの兒と寝ないでしまふでせうか。裏野の山にもはや月も傾いてゆくことである。

【釋義】 彼の兒ろと あの人と特に指す人があるであらう。ロは、接尾語。はた薄 枕詞。薄の末葉の意に裏に懸つてゐる。裏野の山 所在未詳。月片寄るも 月が傾く事を歎息する語氣で、既に夜が更けて曉方になつた事を歌つてゐる。

二 北國の歌

萬葉集には特に北國の歌といふ項はたててないが、今集中の能登、越中兩國の歌とせるを集めて、この項を作る。おほむねその國の民間の歌であらうと思はれる。

○能登の國の歌三首

梯立の 熊來のやらに 新羅斧 墜し入れわし 懸けて懸けて 勿泣かしそね 浮き出づるやと見むわし

右の歌一首は 傳へ云ふ ある愚人 斧を海底に墜して しかも鐵の沈きて 水に浮ぶ理なきことを解らず いささか此の歌を作りて 口吟みて噓すことを 爲しき

【原文】 能登國歌三首

塔楯 熊來乃夜良爾 新羅斧 墜入和之 河毛伍河毛伍 勿鳴爲會禰 浮出流夜登將見和之

右歌一首 傳云 或有愚人 斧墜海底而不解鐵沈無理浮水 聊作此歌口吟爲噓也

【題意】 能登の國の歌で多分その國に歌はれた民謡であらう。この歌に就いては、左註に説明がある。その傳へには、ある愚人があつて、斧が海の底に落ちて鐵の浮ぶ道理がないのを知らないのであるので、この歌を作つて論じたとある。なほ愚人が鐵を水中に落した事については、呂氏春秋に、楚人有涉江行舟、自舟遺劍。遽刻其舟曰、吾於此墜劍。求必得之。其迷有如此者とある。是を基としたものであらうと言はれてゐる。

【口譯】 梯立の熊來の泥海に新羅斧を墜し入れた。決してお泣きなさるな。浮き出るかと思つておませうよ。

【釋義】 梯立の 枕詞。梯子をたてる意である。熊來に續く義は不明である。熊來のやらに クマキは、能登の國能登郡の地名。ヤラは、水の底の泥を云ふ。新羅斧 朝鮮風の斧で、當時優れた貴重な斧であらう。墜し入れわし ワシは、囃子の語。下のも同じ。懸けて懸けて カケテは、決して。同語を重ねたのは意味を強めるためである。勿泣かしそね ナナカシは、お泣きなさるな意。ソネは、言葉を丁寧にする助辭。

九三三七

梯立の熊來酒屋に 眞罵らる奴わし 誘ひ立て 率て來なましを 眞罵らる奴わし

右一首

【原文】 塔楯 熊來酒屋爾 眞奴良留奴和之 佐須比立 率而來奈麻之乎 眞奴良留奴和之

右一首

【口譯】 熊來の酒屋に怒鳴られてゐる奴、誘ひ立てて連れて來ませうものを、怒鳴られてゐる奴。

【釋義】 熊來酒屋に 熊來の地の酒造の家に。眞罵らる奴わし マは、接頭語。ヌラルは、罵らるで、悪く言はれてゐる奴である。ワシは囃子ことば。率て來なましを キテは同伴して。來なましをは來たであらうものを、さうしなかつた意である。

【餘論】 この一首は旋頭歌である。但しワシの囃子ことばがある爲にちよつと變つて聞える。

〇三三八

加島嶺の 机の島の 小螺を い拾ひ持ち來て 石以ち 啄き破り 早川に 洗ひ
濯ぎ 辛鹽に ここと揉み 高杯に盛り 机に立てて 母に奉りつや めづ兒の刀
自 父に獻りつや みめ兒の刀自

高坏は類聚古集等による。習は意改

【原文】 所聞多爾乃 机之鳥能 小螺乎 伊拾持來而 石以 都追伎破夫利 早川爾 洗濯 辛鹽爾 古胡登毛 美 高坏爾盛 机爾立而 母爾奉都也 目豆兒之習 父爾獻都也 身女兒乃習

【口譯】 加島嶺の机の島の小螺を拾つて來て、石を以つて啄き破り、早川に洗つて鹽でこし揉み、高杯に盛り机にのせて、お母さんに差し上げましたか、可愛らしい小さい奥様。お父さんに差し上げましたか、美しい小さい奥様。

【釋義】 加島嶺の 所聞多の三字をカシマと讀むのは、義を以つてである。能登の郡の地名。机の島 加島嶺のほとりの机の島である。小螺を 螺形の小さい貝。諸國の海にも居り今も多く産する。い拾ひ持ち來て イは、接頭語。ここと揉み ココは、螺の肉を鹽で揉む音。高杯に盛り タカツキは、椀形の器で、足の高くついてゐるもの。めづ兒の刀自 メヅゴは、愛すべき兒である。トジは、一家の主婦の稱。習は刀自の合字である。みめ兒の刀自 ミメゴは、みめよき兒の意で、美しい兒を言ふ。

〇越中の國の歌四首

大野路は 繁道森徑 繁くとも 君し通はば 徑は廣けむ

【原文】 越中國歌四首

大野路者 繁道森徑 之氣久登毛 君志通者 徑者廣計武

【題意】 以下四首は越中の國の歌である。

【口譯】 大野に行く路は草木の繁つた路である。しかし繁くあつても君がお通ひになつたならば路は廣いであり

一三三八

ませう。

【釋義】大野路は オホヌは、越中の國の地名。繁道森徑 草木の繁き路で、森の路である意。

二三八八

澁溪の 二上山に 鷺ぞ子産とふ 翳にも 君が御爲に 鷺ぞ子生とふ

【原文】 澁溪乃 二上山爾 鷺曾子産跡云 指羽爾毛 君之御爲爾 鷺曾子生跡云

【口譯】 澁溪の二上山に鷺が子を産むといふ事である。翳にも君の御爲にならうとして鷺が子を産むといふ事である。

【釋義】 澁溪の二上山 越中の射水郡の山。澁溪も同所の地名。翳にも サシハは、鳥の羽根や薄い織物などで作つた柄の長い團扇形のもので、貴人の前に侍者が差し出してその面を覆うてゐる道具。貴人の顔を下の者に見られるのを憚る意である。鷺の羽根を翳に用立てようと鷺が子を産むといふ意の歌である。

三三八八

伊夜彦 みのれ神さび 青雲の 棚引く日らに 霖そぼ零る 一に云ふあ なに神さび

【原文】 伊夜彦 於能禮神佐備 青雲乃 田名引日良 霖曾保零 一云 安奈爾 可武佐備

【口譯】 伊夜彦は自分から神さびて青雲の棚引いてゐる日も小雨が降つてゐる。

【釋義】 伊夜彦 越後の國の伊夜彦山を言ふ。但し越中の國の歌にかく越後の山を詠めるは不審である。この句の原文、伊夜彦とあるが、この彦の字は、古くは産とあつたものと思はれる。それを中世に彦の字に改めたと傳へられてゐる。西本願寺木の朱の頭書に、或る人が夢の考に依つて改めたといふ事を語つてゐる。恐らくは

もとは伊夜立山とあつたのではないかと思はれる。おのれ神さび 自分から神様としての意。青雲の棚引く日らに 空一面に晴れ渡つてゐる意である。日ラのラは接尾語。あなに神さび アナニは、感動の副詞。この句は一云としてあるが、若し他の句の校異ならば、二句の校異と見る外はないが、この次の歌が明に六句の所謂佛足跡の歌の體であるから、この句もまたこの歌の第六句であつたものを、後の人が誤つて一云の二字を加へたものであらうかと思はれる。

伊夜彦 神の麓に 今日らもか 鹿の伏すらむ 皮服着て 角附きながら

【原文】 伊夜彦 神乃布本 今日良毛加 鹿乃伏良武 皮服著而 角附奈我良

【口譯】 伊夜彦の神の麓に今日も鹿が寝てゐるであらうか、皮の着物を着て角を附けたままで。

【釋義】 伊夜彦 この句に就いては前の歌と同様に考へられる。神の麓に 山を直に神と稱してゐるのは山岳崇信の現象である。今日らもか ラは、接尾語。皮服着て 鹿が皮服を着ると言つてゐる。角附きながら その皮服に角が附いたままでの意。

【餘論】 この歌は、五七五七七の六句から成つてゐる。この體は奈良の西薬師寺の佛足跡の歌の碑に彫りつけてある歌の體なので、是を佛足跡の歌の體と稱することになつてゐる。萬葉集中、この體の歌は、明なものはこの歌ただ一首のみである。しかし前の歌にも言ふやうに、第六句であるべきを後の人がこの體に馴れないので、誤つて一云の二字を付け添へたものもあると言はれてゐる。薬師寺の佛足跡の歌の歌碑は、第六句を小字で彫り著けてある。これは歌の内容は一旦第五句までで完結し、第六句は第五句を少しく形を變へて繰り返すか、

四三八八
伊夜彦は
西本願寺
本による

進んでは歌意の内容の補足的な性質のものに及んでゐる。今この伊夜彦神の麓の歌では、第六句をも上と同じやうに大字で書いてあるが、これもやはり歌の内容は第五句までで完結し、第六句は第五句の内容を補足する性質のものであらうと思はれる。なほ参考の爲に佛足跡の歌碑の歌を數首録しておく。

御足跡作る石の響は天に到り地さへ揺れ父母が爲に 諸人の爲に
 ますらをの踏み置ける足跡は石の上に今も残り見つしのと 永くしのと
 四つの蛇五つの鬼の集れる穢き身をば厭ひ捨つべし 離れ捨つべし
 雷の光の如きこれの身は死の大君常に副へり 畏づべからずや

萬葉集新解終

附載一 萬葉集年表

舒明元年(二二八九) 丑己	正月四日、天皇即位。
九年(二二九七) 酉丁	十月十二日、飛鳥の岡の傍に遷り給ふ。是を岡本の宮といふ。
十三年(二三〇一) 丑辛	十二月十四日、天皇、太后、伊豫の湯の宮に幸し給ふ。
皇極元年(二三〇二) 寅壬	十月九日、舒明天皇崩す。
孝徳大化元年(二三〇五) 巳乙	正月十五日、天皇即位。
白雉五年(二三一四) 寅甲	六月十四日、天皇即位。
齊明元年(二三一五) 卯乙	十月十日、孝徳天皇崩す。
二年(二三一六) 辰丙	正月三日、齊明天皇飛鳥板蓋の宮に即位す。
四年(二三一八) 午戊	十月、飛鳥川原の宮に遷る。
	是の歳、後の飛鳥岡本の宮に遷る。
	十月十五日、天皇紀の温湯に幸す。
	十一月、有間の皇子を紀の行宮に召す。(二九頁)
	十一月十一日、丹比小澤國襲をして有間の皇子を藤白の坂に絞せしむ。
七年(二三二一) 酉辛	正月六日、海路西征の途に就く。

天智六年(一三二七)卯丁

七年(一三二八)辰戊

八年(一三二九)巳己

九年(一三三〇)午庚

十年(一三三一)未辛

弘文元年(一三三二)申壬

天武元年(一三三三)酉癸

四年(一三三六)子丙

八年(一三四〇)辰庚

十四日、御船、伊豫の熟田津の石湯の行宮に泊つ。(二七頁)

七月二十四日、天皇朝倉の宮に崩す。

三月十九日、都を近江大津の宮に遷す。

正月三日、天智天皇即位。

五月五日、蒲生野に獵し給ふ。(五七頁)

十月十九日、藤原鎌足薨す。

二月、庚午年籍成る。

十月十七日、天皇病む。東宮大海人の皇子剃髮す。十九日、吉野に入る。(六〇頁)

十二月三日、天皇崩す。(六三頁)

六月二十二日、大海人の皇子兵を擧ぐ。(六六頁)

七月二十三日、弘文天皇崩す。

是の歳、天武天皇飛鳥淨御原の宮を營みて遷る。(八四頁)

二月二十七日、天皇即位す。

二月十三日、十市の皇女、阿閉の皇女、伊勢神宮に詣づ。(九三頁)

四月二十日、麻績の王因幡に流さる。

四月七日、十市の皇女薨す。(九五頁)

五月五日、天皇吉野に幸す。(八六頁)

十二年(一三四四)申甲

持統朱鳥元年(一三四六)戌丙

三年(一三四九)丑己

四年(一三五〇)寅庚

五年(一三五二)卯辛

六年(一三五三)辰壬

八年(一三五五)午甲

十年(一三五七)申丙

文武元年(一三五七)酉丁

三年(一三五九)亥己

七月四日、天皇鏡の姫玉の家に幸し病を訊ふ。五日鏡の姫玉薨す。

九月九日、天皇崩す。(九二頁)

十月三日、大津の皇子に死を賜ふ。妃山邊皇女殉す。(九九頁)

十一月十六日、大伯の皇女歸京。(一〇〇頁)

四月十三日、日並みし皇子(草壁の皇子)薨す。(一〇四頁)

九月十三日、天皇紀伊に幸す。(一二七頁、二六四頁)

八月十三日、十八氏(大三輪、雀部、石上、藤原、石川、巨勢、膳部、春日、上毛野、大伴、紀、阿部、佐伯、采女、穗積、阿曇、伊、平群、羽田)に詔して其の

祖等の纂記を上進せしむ。

九月九日、川島の皇子薨す。

三月六日、天皇伊勢に幸す。(一二九頁、一三二頁)

四月五日、淨大寺を筑紫の大宰率河内の王に贈る。(一二二頁)

九月九日、天武天皇の御齋會。

十二月六日、藤原の宮に遷る。(一四〇頁、一四四頁)

七月十日、高市の皇子薨す。(二〇六頁)

八月一日、持統天皇讓位。同日、文武天皇即位。

七月二十一日、弓削の皇子薨す。

四年(一三六〇)子庚

四月四日、明日香の皇女薨す。柿本人麻呂の作品中、年月の明なる最後。(二二頁)
八月二十日、僧惠俊を還俗せしめ、吉宜の姓名を賜ふ。後神龜元年吉田連の姓を賜ふ。

大寶元年(一三六一)丑辛

正月十五日、大伴御行薨す。二十三日粟田真人を遣唐執節使、無位山上憶良を遣唐少録とす。(三八頁)

三月十九日、僧辨紀を還俗せしめ、春日藏首老の姓名を賜ふ。

九月十八日、太上天皇(持統)及び天皇紀伊に幸す。(三四頁、一三四頁)

十二月二十七日、大伯の内親王薨す。

十月十日、太上天皇(持統)三河に幸す。(一三六頁)

五月十日、改元。

七月一日、粟田真人等唐より還る。

五月八日、忍壁の親王薨す。

二月六日、大神高市麻呂卒す。

六月二十四日、譽謝の女王卒す。

九月二十五日、難波の宮に幸す。(二七五頁)

六月十五日、文武天皇崩す。

七月十七日、元明天皇即位。

元明四年(一三六七)未丁

和銅元年(一三六八)申戊

正月十一日、改元。

三月十三日、田口益人上野の國司に任ぜらる。

五月三十日、美努の王卒す。

六月二十五日、但馬の内親王薨す。(二七二頁)

三月十日、都を平城(寧樂)に遷す。

九月十八日、太安麻呂に天武天皇の勅語の先代舊事と帝皇日嗣とを撰録せしむ。

正月二十八日、太安麻呂古事記を奏上す。

四月、長田の王を伊勢に遣はす。

九月三日、詔して多治比嶋、大伴御行の妻の貞節を嘉す。

五月二日、諸國に詔して風土記を編せしむ。

二月十日、紀清人、三宅藤麻呂に詔して國史を撰せしむ。

五月一日、大伴安麻呂薨す。

六月四日、長の親王薨す。

七月二十七日、穗積の親王薨す。

九月二日、元正天皇即位、同日改元。

八月十一日、志貴の皇子薨す。

三月三日、石上麻呂薨す。

元正
龜元年(一三七五)卯乙

六年(一三七三)丑癸

七年(一三七四)寅甲

二年(一三七六)辰丙

養老元年(一三七七)巳丁

二年(一三七八)戊午
 三月四日、大伴旅人を征隼人持節大將軍とす。
 五月二十一日、舍人親王日本紀を撰し、紀三十卷系圖一卷を奉る。
 八月十三日、藤原不比等薨す。(四七〇頁)
 正月二十三日、佐爲の王、紀男人、山田三方、山上憶良、刀利宣令等をして、退朝の後東宮に侍せしむ。學藝ある者に賞賜を加ふ。背奈行文、山田三方、紀清人、津守通、吉宜等これに預る。同月二十七日、諸道堪能なる者に加賞して後生を勵さしむ。
 五月十二日、等麻呂、太上天皇(元正)の御爲に出家して滿誓と號す。
 正月二十日、穗積老を遠流に處す。
 二十八日、廣瀬の王卒す。
 二月二日、滿誓を造筑紫觀世音寺別當とす。
 五月九日、天皇吉野離宮に幸す。(二九一頁、四六五頁)
 七月七日、太安麻呂卒す。
 二月四日、聖武天皇禪を受けて即位す。改元。
 三月一日、天皇芳野の宮に幸す。

聖武神龜元年(一三八四)甲子

七年(一三八三)癸亥

六年(一三八二)壬戌

五年(一三八一)辛酉

四年(一三八〇)庚申

二年(一三七八)戊午

二年(一三八五)乙丑
 三月、三香原の離宮に幸す。
 五月、芳野の離宮に幸す。金村赤人の歌。
 十月十九日、難波の宮に幸す。
 十月十七日、印南野に幸す。
 正月、王臣等を授刀寮に散禁す。
 夏、大伴旅人の妻大伴郎女死す。(三一五頁)
 七月三十一日、山上憶良、筑前の國嘉摩の郡に於いて、子等を思ふ歌、世間の住り難きを哀む歌を撰定す。(三八八頁)
 十一月、大宰の官人等香椎の廟に詣づ。(三一八頁)
 三月十二日、長屋の王をして自盡せしむ。(三一四頁)その男膳夫の王等も同じく亦自死す。
 八月五日、改元。
 十月七日、大伴旅人日本琴を藤原房前に贈る。
 十一月八日、藤原房前、大伴旅人の琴を贈れるを謝す。
 正月十三日、旅人邸梅花の宴。(三三〇頁)
 春、大伴旅人松浦河に遊ぶ。(三三六頁)

天平元年(一三八九)己巳

五年(一三八八)戊辰

四年(一三八七)丁卯

三年(一三八六)丙寅

二年(一三八五)乙丑

二年(一三九〇)庚午

六月、旅人瘡を病む。(三四七頁)

七月十日、吉田宜、書を大伴旅人に贈る。(三七二頁)

十月一日、大伴旅人を大納言に任ず。(三四九頁)

十一月、大伴旅人の従人等、海路、京に上る。(三五二頁)

十二月六日、大伴旅人邸に於いて、饒酒の宴を開く。(三九二頁)

六月十三日、大伴熊凝、相撲使某の従人となりて京に上る。

七月二十二日、大伴旅人薨す。(三六六頁)

三年(一三九二)辛未

二月二十二日、阿倍廣庭薨す。

四年(一三九三)壬申

八月十七日、多治比廣成を遣唐大使とし、藤原宇合を西海道節度使とす。(二九六頁)

高橋蟲麻呂歌を贈る。蟲麻呂の作品中、年月の明なる唯一のもの。(四三二頁)

天平五年(一三九三)西癸

正月十三日、縣犬養橋三千代薨す。

二月三十日、出雲國風土記を勘造す。

三月一日、山上憶良好去好來の歌を遣唐使に贈る。(五〇二頁)

閏三月、笠金村歌を入唐使に贈る。笠金村の作品中年月の明なる最後。

五月三日、遣唐の船難波より進發す。(五〇七頁)

六月三日、山上憶良老身重病の歌を作る。(四一三頁)

十一月、大伴坂上郎女、大伴氏の神を祭る。(五九二頁)

山上憶良、沈痾自哀文を作る。

この歳憶良卒するか。時に年七十四。(四一三頁)

この歳、海犬養岡麻呂、詔に應ふる歌を作る。(二九九頁)

六年(一三九四)戊甲

三月十日、入唐大使多治比廣成等唐國より至る。

七年(一三九五)亥乙

九月三十日、新田部の親王薨す。

十一月十四日、舍人の親王薨す。

この歳、尼理顔死す。

八年(一三九六)子丙

二月二十八日、阿倍織麻呂を遣新羅大使とす。

六月、芳野宮に幸す。山部赤人の作品中、年月の明なる最後。

同月、遣新羅使人の船、難波を發す。(五一九頁)

十一月十七日、葛城の王等に姓を賜ふ。(六三五頁)

十二月、葛井廣成家宴の歌。(五四八頁)

九年(一三九七)丑丁

正月二十七日、遣新羅使人入京す。

同月、門部の王の家の宴。

二月、巨勢宿奈麻呂の家の宴の歌。

三月、遣新羅使の副使大伴三中歸京す。

四月十七日、藤原房前薨す。

四月、大伴坂上郎女賀茂神社に詣づ。
 六月十八日、長田の王卒す。
 同月二十三日、多治比縣守薨す。
 七月十三日、藤原麻呂薨す。
 同月二十五日、藤原武智麻呂薨す。
 八月一日、橘佐爲卒す。
 八月五日、藤原宇合薨す。
 十二月二十七日、大倭の國を改めて大養徳の國とす。
 是の歲、疫瘡大に發す。
 六月十一日、小野老卒す。(正倉院文書によりて推定する説に従ふ。續日本紀には天平九年とす。)
 八月、橘諸兄の家に宴す。
 十月、橘奈良麻呂の家に宴す。
 この歲、元興寺の僧自嘆する歌。(五五一頁)
 三月二十八日、石上乙麻呂土佐に流さる。(萬葉に十年に編す。)
 四月七日、多治比廣成薨す。
 六月、家持妾を亡ふ。

十年(一三九八)寅戊

十一年(一三九九)卯己

十二年(一四〇〇)辰庚

六月十五日、流人穗積老等を赦して入京せしむ。
 九月三日、藤原廣嗣反す。
 十月二十九日、伊勢の國に行幸す。
 十一月二日、車駕伊勢の國に到る。(三〇四頁)
 十二月十五日、恭仁の宮に幸して始めて宮都を作る。(五八〇頁)
 閏三月、五位以上の意のままに平城に住むを禁す。
 十二月十九日、大原高安卒す。
 五月五日、内裏に宴す。皇太子みづから五節を儻ふ。
 閏正月十一日、安積の親王薨す。
 二月二十六日、難波の宮を皇都と定む。
 七月二十日、高橋某妻を失ふ。
 正月一日、新京紫香樂の宮に遷る。
 二月二十三日、大原門部卒す。
 四月二十八日、春日の王卒す。
 五月十一日、平城の京に幸す。
 正月、太正天皇の御在所に雪の宴を行ふ。
 六月二十一日、大伴家持を越中守とす。

十三年(一四〇一)巳辛

十四年(一四〇二)午壬

十五年(一四〇三)未癸

十六年(一四〇四)申甲

十七年(一四〇五)酉乙

十八年(一四〇六)戌丙

十九年(一四〇七)亥丁

七月、家持赴任。
九月、大伴書持死す。
二月、家持病に沈む。
三月十六日、大養徳の國を改め舊に依りて大倭の國となす。
五月、家持京に入る。
九月、家持放逸せる鷹を夢む。(六七九頁)

二十年(一四〇八)子戊

四月二十一日、太上天皇(元正)崩す。
二月二日、行基遷化す。

孝謙
天平勝寶元年(一四〇九)丑己

二月二十二日、陸奥の國始めて黄金を貢す。(六九七頁)

四月一日、天皇東大寺に幸して盧舍那佛の像の前殿に御す。

四月十四日、改元して天平感寶元年とす。

七月一日、讓位、皇太子即位、改元して天平勝寶元年とす。

八月二十六日、穗積老卒す。

二月、中臣清麻呂宅の宴。(三〇五頁)

秋、大伴坂上郎女、歌を坂上大嬢に與ふ。坂上郎女のことの見ゆる最後。

九月一日、石上乙麻呂薨す。

同月二十四日、藤原清河を遣唐大使とし、大伴古麻呂を副使とす。

二年(一四一〇)寅庚

三年(一四一一)卯辛

七月十七日、家持少納言に任ぜらる。

十一月、懷風藻成る。

三月十七日、阿倍蟲麻呂卒す。

四月九日、盧舍那佛の像成り開眼す。

是の歲、文室智努、佛足跡を寫す。

三月三十日、巨勢奈氏麻呂薨す。

七月、市原の王、歌林七卷を書寫せしむ。

七月十一日、紀清人卒す。

正月十六日、大伴古麻呂等唐より歸る。唐僧鑒眞從ひて來る。

四月五日、大伴家持を兵部少輔とす。

正月四日、天平勝寶七年を天平勝寶七歲となす。

二月、筑紫に差遣せらるる諸國の防人等、難波に至る。(六〇一頁)

一月二十八日、難波の宮に幸す。

五月二日、太上天皇(聖武)崩す。

五月二日、大伴古慈悲、淡海三船を左右衛士府に禁す。(七四二頁)

正月六日、橘諸兄薨す。

二月十日、藤原仲麻呂の宅に遣渤海大使小野田守等を餞す。(五四七頁)

天平寶字元年(一四一七)酉丁

八年(一四一六)申丙

七年(一四一五)未乙

六年(一四一四)午甲

五年(一四一三)巳癸

四年(一四一二)辰壬

淳仁二年(一四一八)戊戌

三年(一四一九)癸亥

四年(一四二〇)庚子

六年(一四二二)壬寅

七年(一四二三)癸卯

八年(一四二四)甲辰

七月四日、鹽燒の王、安宿の王、黄文の王、橘奈良麻呂等を獄に下す。
八月十八日、改元。
六月十六日、大伴家持を因幡守となす。
八月一日、讓位、皇太子(淳仁天皇)立つ。
正月一日、因幡守大伴家持、宴を下僚等に賜ふ宴の歌。(萬葉集中年月の明なる最後の歌)。(七五四頁)

六月七日、天平應眞仁正皇太后(光明皇后)崩す。

九月三十日、石河年足薨す。

五月六日、鑿眞寂す。

正月二十一日、大伴家持を薩摩守とす。

九月十一日、藤原惠美押勝(仲麻呂)逆謀頗泄る。

同月十八日、石村石楯、押勝を斬る。

正月七日、改元。

十月九日、廢立。稱徳天皇重祚。

十一月二十七日、藤原豐成薨す。

三月二十七日、葛井船津文武生藏六氏の男女二百三十人歌垣を供奉す。

八月四日、稱徳天皇崩す。

稱徳
天平神護元年(一四二五)乙巳

寶龜元年(一四三〇)庚戌

二年(一四三一)辛亥

三年(一四三二)壬子

五年(一四三四)甲寅

六年(一四三五)乙卯

七年(一四三六)丙辰

八年(一四三七)丁巳

十年(一四三九)己未

桓武天應元年(一四四一)辛酉

九月十六日、大伴家持を左中辨兼中務大輔とす。

十月一日、改元。

同月九日、文室淨三(智努)薨す。

二月二十二日、藤原永手薨す。

五月七日、藤原濱成、歌經標式を奏上す。

五月二十五日、大伴御依卒す。

五月十七日、大津大浦卒す。

十月二日、吉備眞備薨す。

七月七日、大伴駿河麻呂卒す。

八月十九日、大伴古慈悲薨す。

二月八日、眞人元開、唐大和上東征傳を撰す。

五月十七日、石上宅嗣薨す。

八月八日、大伴家持を左大辨兼春宮大夫となす。これより先母の憂に遭ひて解任しここに至りて復す。

十二月二十三日、太上天皇(光仁)崩す。

正月十九日、氷上川織の事に座して大伴家持等の官位を解く。

五月十七日、參議大伴家持を春宮大夫と爲す。

延暦元年(一四四二)壬戌

四年(一四四五)丑乙

七月十七日、淡海三船卒す。
八月二十八日、大伴家持死す。
九月二十三日、藤原種繼薨す。

附載二番號順索引

二七	二五	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一八	一四	一三	一二	一一	卷一
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
六	八	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	三
四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	二八
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
二六	二五	二三	二三	二三	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
一〇五	一〇四	一〇三	九五	卷二	七七	七六	六四	六三	六一	五八	五七	五六	五四	五三	五二	五一	四七
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
一六三	一五九	一五八	一五七	一五三	一五〇	一四八	一四七	一四六	一四五	一四四	一四三	一四二	一四一	一三七	一三六	一二五	一〇六
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
一〇	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
一八九	一八八	一八七	一八六	一八五	一八四	一八三	一八二	一八一	一八〇	一七九	一七八	一七七	一七六	一七五	一七四	一七三	一六四
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
二六	二五	二五	二四	二四	二三	二三	二二	二二	二〇	二〇	一九	一八	一八	一七	一六	一五	一〇

番號順索引

九九七

三七五〇	三七五三	三七六七	三七七二	三七七四	三七七六	三七七六	三七八六	三七八七	三七八八	三七八九	三七九〇	三七九一	三七九二	三七九三	三七九四	三七九五	三七九六	三七九七	三七九八	三七九九	
下五七	下五六	下五六	下五六	下五六	下五六	下五六	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	
三八〇〇	三八〇一	三八〇二	三八〇六	三八〇七	三八〇九	三八一六	三八二四	三八二五	三八二六	三八二七	三八二八	三八二九	三八三〇	三八三一	三八三六	三八三八	三八三九	三八四四	三八四五	三八四九	三八五〇
下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五
三八五一	三八五二	三八五三	三八五四	三八五七	三八五八	三八五九	三八六〇	三八六一	三八六二	三八六三	三八六四	三八六五	三八六六	三八六七	三八六八	三八六九	三八七〇	三八七九	三八八〇	三八八一	三八八二
下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	下九三	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五
三八八三	三八八四	三八八五	三八八六	三八八七	三八八八	三八八九	三八九〇	三八九一	三八九二	三八九三	三八九四	三八九五	三八九六	三八九七	三八九八	三八九九	三九〇〇	三九〇一	三九〇二	三九〇三	三九〇四
下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五	上七五
三九五六	四〇一一	四〇一二	四〇一三	四〇一四	四〇一五	四〇一六	四〇二二	四〇二三	四〇二四	四〇二五	四〇二九	四〇三一	四〇三二	四〇三三	四〇三四	四〇三五	四〇四四	四〇四五	四〇五五	四〇五八	四〇五九
下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	上七五	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六	下九六

卷十六

卷十七

卷十八

四〇六〇	四〇六一	四〇六二	四〇六五	四〇八六	四〇九四	四〇九五	四〇九六	四〇九七	四一〇六	四一〇七	四一〇八	四一〇九	四一一〇	四一二二	四一二三	四一二四	四一二八	四一二九	四一三〇	四一三一	四一三二
下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二	下六二
四一三三	四一三六	四一三八	四一三九	四一四〇	四一四二	四一四三	四一四二	四一四三	四一五〇	四一五一	四一五二	四一五三	四一五四	四一五五	四一五九	四一六二	四一六八	四一七〇	四一七二	四一七三	四一七四
下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	上七六	上七六	上七六	上七六	上七六
四二四八	四二四九	四二五〇	四二六一	四二六〇	四二六二	四二六三	四二六四	四二六五	四二六九	四二七〇	四二七一	四二七二	四二七三	四二七四	四二七五	四二七六	四二九三	四二九四	四二九五	四二九六	四二九七
下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	下七六	上七六	上七六	上七六	上七六	上七六
四三四六	四三四七	四三四八	四三五二	四三五五	四三五九	四三六四	四三六七	四三六八	四三七〇	四三七二	四三七三	四三七四	四三七五	四三八八	四三九九	四四〇〇	四四〇三	四四〇七	四四一〇	四四一七	四四二〇
下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八
四四二五	四四二七	四四三一	四四三二	四四三三	四四三四	四四三五	四四三六	四四三七	四四四三	四四四四	四四四六	四四四七	四四四八	四四四九	四四五〇	四四五三	四四五六	四四八七	四四八八	四四八九	四四九〇
下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八	下六八

卷十九

卷二十

四五〇六 上 三五五
四五〇七 上 三五六
四五〇八 上 三三七
四五〇九 上 三三七
四五一〇 上 三三八
四五一一 下 三三七
四五一四 下 三三七
四五一六 下 三三五

番號順索引 終

附載三 初旬索引

あ

あかごまの いゆきはばかる こゆるうませの あかごまを あかとくと あがぬしの あかねさす あがもての あきかぜの さむきあさけを ふきただよはす あきかぜは あきがはり あきさらば あきされば あきつかみ あきのぬに	下 八六三 上 三〇〇 下 三〇二 下 九三〇 上 三九五 上 二五 下 六一 上 四八一 下 九〇六 下 三三三 下 二九八 下 三三〇 下 三六〇	やどるたびびと さきたるはなを あきはぎに あきはぎの えだもとををに ちりのみだりに あきはぎは かりにあはじと さくべくあるらし あきはぎを あきはぎに あきやまに あきやまの あさかげに あさがほは あさがみの あさぎりに あさかやま あさどこに あさなな あさねがみ あさひてる さだのをかべに	上 一六六 上 四〇三 下 五一 下 六一 下 七二 上 二七〇 下 五七 上 三三 上 二二 下 八七 下 七九 下 七九 下 七六 上 二六 下 三三 下 三二 下 三〇 下 四三 上 一八	さだのをかべに しまのみかどに あさびらき いりえこぐなる こぎでてくれば あさりする あしがきの あしがらの あしだまも あしのやの うなひをとめの うなひをとめの うなひをとめの あしはらの みづほのくに みづほのくに あしひきの たまかづらのこ やまかづらのこ やまがはのせの やまさくらばな やまさはらぐを やまちこえむと	上 二一八 上 二二六 上 四九 下 五三 上 三三 下 八七 下 六三 下 九七 上 四七 上 四一 下 八九 下 九七 下 九三 下 九五 下 九三 上 四九 下 八五 下 五三	やまどりのをの やまにゆきけむ やまのこぬれの やまゆきくらし やまゆきしかば あしびなす あしべゆく あすかがは あすだにみむと かはよどさらず しがらみわたし あすのよひ あすよりは あたひなき あぢさはふ あづさゆみ つまびくよとの ひきみゆるべみ あなみにく あにもあらぬ あのおとせず あはぢの	下 八六 上 二九〇 下 七三 下 八三 上 二八九 上 二八 上 三五 上 三七 上 三五 上 三四 上 三三 上 三五 上 三五 上 三二 上 三二 上 三二 下 九五 下 九三 上 一三
---	---	---	---	---	--	---	--

初旬索引 あ

一〇〇七

あはむひの	下 五八	みづかけくさの	下 九〇五	あゆちがた	下 八〇三	ならにあるいもが	下 七三
あはもや	上 四三	やせせきらへり	下 九〇七	あらたしき	下 七五	ならのおほぢは	下 五五
あひおもはぬ	下 六三	あまのはら	上 六〇	あらたへの	上 四九	ならのみやこに	下 五三
あひみては	上 二二	くもなきよひに	下 八六	ぬのぎぬをだに	上 一七三	ならのみやこは	下 四九
あふみぢの	上 二二	ふりさけみれば	上 六〇	ふぢえがうらに	上 一七三	ならのやまなる	上 二九
あふみのうみ	上 六	あまはしも	下 九〇八	あらたまの	下 七三	あをはたの	上 六
とまりやそあり	上 六	あまをぶね	下 八〇八	としのへゆけば	下 七三	あをみづら	下 九〇
みなとはやそあり	下 八〇四	あみのうらに	上 一三九	としのをながく	下 七六	い	
ゆふなみちどり	上 七三	あめつちと	上 一〇八	あらつらうみ	上 二三四	いかほねに	下 九二
あぶらびの	下 六六	あめつちに	下 八四三	あらなみに	上 二三四	いまのよにし	上 三六
あべのしま	上 四八〇	あめつちの	上 一〇八	あられふり	上 二三四	いけがみの	上 三六
あまぎらひ	下 八〇九	かみをいのりて	下 六五	かしまのかみを	下 六三	いけるもの	上 三三
あまぐもの	下 五三	そこひのうらに	下 五七	きしまがたけを	下 九一	いけるよに	上 三九
あまざかる	上 三九四	わかれしときゆ	上 四八八	あらをらら	上 四〇八	いざこども	下 六六
ひなにいつとせ	上 三九四	あめつちを	下 六四	あらをらは	上 四〇八	かしひのかたに	上 三八
ひなのあらぬに	上 二四三	あめなるや	下 九三	あらをらる	上 四〇七	たはわざなせそ	下 六五
ひなのながぢゆ	上 一七六	ささらのをぬに	下 九〇九	ありさりて	下 六三	はやくやまとへ	上 三一
あまとぶや	下 五三六	つきひのごとく	下 七六	ありつとも	上 二八六	いさなとり	上 三
かりをつかひに	上 三六	あめのうみに	下 七六	あわゆきの	上 三〇	あふみのうみを	上 三
かるのみちは	上 三六	くものなみたち	下 七六	あをうなばら	下 四七	うみやしにする	下 九五
とりにもがもや	上 三一	つきのふねうけ	下 七三	あをよし	上 二〇一	いせのうみの	下 六一
あまのがは	上 三一	あめはれし	下 七三	あをよし	上 二〇一		

いそごと	上 五五	ありけむひとの	上 四九	いはまろに	下 六三	いめのごと	下 六〇
いそのうへに	上 一〇三	ありけむひと	上 一八六	いはみのや	上 一九二	いもがたど	下 八六
おふるあしびを	上 三三	きみのみよへて	下 六三	いはむすべ	上 三三	いもがな	上 九
ねばふむろのき	下 六一	やなうつひとの	下 九〇四	いひつつも	上 三三	いもがな	下 八五
いそのかみ	上 二四七	いにしへの	下 七九	いひはめど	下 六四	いもとし	上 三三
いそのさき	上 二四七	ことはしらぬを	下 七九	いへおもふと	下 六九	いもとして	上 三三
いちにの	上 二五九	ななのさかしき	上 三三	いへしは	下 五五	いもにあはず	下 五二
いづくにか	上 二七	ふるきつつみは	上 四七〇	いへにあらば	上 二〇	いもにこひ	上 三三
ふなはてすらむ	上 二四九	いねつけば	下 九六	いもがてまかむ	上 二〇	あがのまつばら	上 三三
われはやどらむ	下 八〇	いはがねの	上 三三	けにもるいひを	上 三〇	いねぬあさけに	下 八八
いつはりも	下 八〇	いはしろの	上 三三	いへにありし	上 二七三	いもわれも	上 二九
いづみがは	下 八四	ぬなかにたてる	上 三三	いへにして	上 二七三	いやひこ	上 二九
いでわがこま	下 八九	はままつがえを	上 三三	こひつつあらずは	下 六七	おのれかむさび	下 九八
いとこ	下 八四	をかまつがえ	上 三三	われはこひむな	下 八〇	かみのふもとに	下 九八
いとまあらば	上 四四	いはせぬに	下 七九	いへにても	上 三三	いゆきあひの	上 四七
いなといへど	上 三六	いはそそぐ	上 二七	いへびとの	下 八五	う	
かたれかたれと	上 三六	いはたぬに	下 五九	いまのみの	上 一七	うぐひすの	
しふるしひのが	上 三六	いはとわる	上 二二	いまよりは	下 五三	かひこのなかに	上 四八
いなびぬも	上 二七	いはのいもろ	下 五三	いめにだに	上 一七	なくくらたに	下 六六
いなもうも	上 二七	いはばしる	下 五三	いめにみて	下 八七		
いにしへに	下 九〇	いはばすら	下 八六	いめのあひは	下 六六	うさかがは	下 六六

うちなびく	下七六	うらうらに	下七四	こひばくるしも	下三六	かみにしませば	上八四
うちひさつ	下八八	うらわかみ	下七〇	ながこひせずは	上三三	かみにしませば	上八五
うつせみし	上六	うりはめば	上三九	おしてるや	下八三	おほくらの	下八五
うつくしき	上三五	うるはしと	下五五	おちたぎち	下九〇	おほさきの	下五五
うつせみと	上三三		おちたぎつ	おほらうみの	下七二	おほとのの	上二八五
うつせみは	下七四	お	おほらうみに	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
うつそみの	上二〇	おのうのうみの	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
うつりゆく	下七九	おきつくに	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
うなばらに	下六九	おきつしま	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
うなばらの	下七六	おきつとり	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
うなばらを	下五四	かもとふふねの	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
うねめの	上五一	かもとふふねは	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
うまかはば	下八九	おきつなみ	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
うまごり	上二九	おきていかば	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
うまざけ	上四七	おきべより	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
うまのおとの	下八四	おきゆくや	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
うめのはな	上三三	おくやまの	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
いまさかりなり	下六〇	いはかげにおふる	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
かをかぐはしみ	下八八	まさのはしぬぎ	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
さきてちりなば	下八八	やつをのつばき	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
しだりやなぎに	下八八	おくららは	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五
ちらまくをしみ	上三三	おくれぬて	おほらうみの	おほらうみの	下八〇	おほとのの	上二八五

おもひいづる	下八五	かぜふかば	上四八五	いひつてくらく	下五〇	きままつと	上四
おもひやる	下六三	かぜまじり	上三九六	かむかぜの	上二〇	きみをまつ	上三七五
おもへども	下八六	かぜをだに	上四六	かもやまの	下五三	きやうぬれる	上二六〇
おもわすれ	下八四	かつしかの	上四九二	からくに	上二八	きよきせに	下九元
か		ままのいりえに	下九八	からすとふ	下五四		
かききらし	上四九	ままのみをみれば	上四五六	からどまり	下五六	くさまくら	下五四
かくのみし	上三六	かなどにし	上四六	からひとの	上五二	たびにひさしく	下五四
かくのみや	上九五	かにかくに	下六四	からひと	下七三	たびのうれひを	上四〇
かぐやまと	上四〇	かのころと	下九四	かりたかの	下五〇	たびのおきなと	下七八
かぐやまは	上三〇	かはかみに	下八七	き		たびのまるねの	下六二
かくゆゑに	上七九	かはのへの	上三三	きかずして	下八二	たびをくるしみ	上三七七
かげくさの	下七〇	つらつらつばき	上三五	ききしより	下八四	たびをくるしみ	下五七
かけまくも	上二〇	ゆついはむらに	上九三	きみがため	下七〇	たびゆききを	下八三
かしこきや	下六〇	かへらまに	下八五	きみがゆき	下七〇	くじがはは	下六三
かしこみと	下五五	かへりける	下五九	きみがゆく	上三六	くしもみじ	下五五
かしまねの	下九六	かへりにし	下八八	きみがゆく	下五九	くしろつく	上三〇
かすがなる	下九七	かへるべく	上三六	うみべのやどに	下五九	くもにとぶ	下九三
かすがぬに	下七三	かまくらの	下九六	みちのながてを	下五三	くるしくも	上三六
かすがぬの	下八〇	かみやまの	上九五	きみにこひ	下六〇	くれなゐの	下八六
かすがやま	下六三	かみよりの	上三	しなえうらぶれ	下八四	くれなゐは	下七三
かぜのとの	下六五	あれつきくれば	上三				

たちてゐて	下八四	たましかず	下六九	ちちぎみに	下五四	つばいちの	下八四
ちちばなの	上二八四	たましける	下五四	ちちのみの	下七三	つばさなす	上三
かげふむみちの	下六四	たましひは	下五八	ちちははが	下六六	つむがぬに	下九三
したてるにはに	下六四	たまだすき	上三	かしらかきなで	下六六	つるぎだち	下七四
とをのちちばな	下六九	たまだれの	上六	とのしりへの	下六三	いよとぐべし	下七四
ちやまの	下六九	たまちはふ	下七五	ちちははに	下八九	みにとりそふと	下六一
ちちばなは	下六五	たまにぬき	下八五	ちちははを	上三三	もろはのうへに	下八三
ちちばなを	下八三	たまぬしに	下五七	ちはやぶる	上三七	つるばみの	下八三
たなぐもり	上二五	たまもかる	下五七	ちよろづの	上四三	つれもなき	上一五
たなばたの	下五〇	からにのしまに	上四四				
たびにあれど	下五五	みぬめをすぎて	上二七				
たびとへど	下六七	たまははき	上二二				
たびにして	上二四	たまはやす	上三三				
たびびとの	下五一	たらちねの	上三五				
たまがはに	下九七	ははがふこの	下八九				
たまぎぬの	上一九	ははがめすなを	下八六				
たまきはる	下六九	たれぞこの	下八六				
いのちはしらず	上二〇	わがやどにきよぶ	下八六				
うちのおほぬに	上四三	やのおそぶる	下九六				
うちのかぎりは	下八一						
たまくしげ	下八二						
たまくぜの	下八七						

とぶとりの	上二〇	なきさほの	上二九	に	上七	よのふけぬれば	上四七
あすかのかはの	上三三	なぐさむる	上四七	にきたづに	下九三	よわたるつきに	下五三
あすかのかはの	上三三	なぐはしき	上一八〇	にしのいちに	下七〇	よわたるつきを	下七七
とほつひと	上四八	なごのあまの	下八三	にはくきに	下七〇	ぬべみれば	下七五
とみびとの	上四八	なごのうみの	下八三	にはなかの	下六八		
ともしびの	上七五	なつそひく	下九五	にひむろの	下八七		
あかしおほとに	下八五	なつぬゆく	上一九〇	かべくきかりに	下八七		
かげにかがよふ	上三一	なつのよは	下六三	こどきにいたれば	下九六		
とものうらの	下九七	なでしこは	下七三	にひむろを	下八八		
とやのぬに	上二二	なにせむと	下三〇	にほどりの	下九六		
とよくの	上二二	なにはづに	下三〇	かづくいけみづ	下五九		
とりがなく	上四四	みふねはてぬと	下五〇	かつしかわせを	下九六		
あづまのくにに	下七二	よそひよそひて	下六五				
あづまをさして	下八七	なにはびと	下八五				
とりじもの	下八七	なはのうらゆ	上四九				
		なまよみの	下九四				
		なみたかし	下八〇				
		なみのうへに	下五九				
		ならやまの	上三〇				
		このてがしほの	下八四				
		こまつがうれの	上三〇				

初句索引 な、に、ぬ、の、は

はたものの	下九七	あさるきぎしの	下六七	ひしほすに	上二六	ひびとの	下八九
はちをしぬび	下九六	かすみたなびき	下七〇	ひとぐにに	下五七	ひむかしの	下五六
はつはるの	下七五	くさはむこまの	下九三	よばひにゆきて	下八四	いちのうゑきの	下五三
はにやすの	上三八	すみれつみにと	上四三	ひとぐには	下五七	たぎのみかどに	上二二
はふくずの	上三七	はるのぬの	下九三	ひとごとの	下八四	ぬにかぎろひの	上二六
はまべより	上九四	はるのひに	下七九	ひとごとの	下九四	ひるはさき	下六五
はりぶくろ	下七二	はるのひに	上四三	ひとづま	下六八	ふ	
おびつづけながら	下七二	はるのひに	上三五	ひとづま	下九四	ふじのねに	下九六
これはたばりぬ	下七五	はるのひに	上三五	ひとづま	下九四	ふじのねを	下九八
とりあげまへにおき	下七〇	はやきても	上二五	ひとのうら	下九六	ふすまぢを	上二六
はるがすみ	下七九	はやびとの	下八四	ひとのおやの	下五八	ふせおきて	上二六
はるくさは	下六六	ひくまぬに	上二六	ひとひには	上二八	ふたがみの	下六五
はるさめを	下六六	ひこぼしの	下五〇	ひとへのみ	下七七	ふたりゆけど	上九
はるさらば	下九三	ひさかたの	上二八	こととはゆとも	下九〇	ふぢなみの	下七六
かざしにせむと	下五〇	あまぢはとほし	上三八	みらむまつらの	下九〇	ふぢはらの	上二五
ををりにををり	上三四	あまつみそらに	下八〇	ひとまなき	上三四	ふふめりし	下三二
はるされば	下八八	あまのとりらき	下七〇	ひとまねの	上三三	ふゆごもり	上五
はるさめに	上二四	あまのはらゆ	下五三	みさきみの	上三二	ふゆすきて	
はるすきて	下六九	あめしらしぬる	上二八	みさきみの	下六〇	はるきたるらし	下七一
はるのあめは	下六九	あめのかぐやま	下七六	ひなみし	上二九	はるしきたれば	下九二
はるのその	下七六	あめのつゆじも	下五九	ひばりあがる	下三三	ふりあふぎて	下六三
はるのぬに							

ふりにし	上七五	とものおとすなり	上二六	みてぐらを	下八三
ふるゆきは	上二七	ゆがみふりおこし	上四六	みどりごの	下九二
へそがたの	上五〇	ゆくとふみちぞ	上二九	みなづきの	下八二
ほりえこえ	下七六	ゆずふりおこし	下七五	みなわたす	下六三
ほりえには	下六八	ますらはは	下七五	みまほり	上四九
ほりえより	下六三	またもあはむ	下八五	みみなし	上二二
ま	下六三	まつがへり	下六六	みもろの	下九五
まきばしら	上二七	しひてあれやは	下八六	かむなびやまに	上四七
まきむくの	下九四	しひにてあれかも	下六六	かむなびやまに	下八四
まくさかる	上二七	まつちやま	上二八	みもろは	下九五
まけばしら	下六六	まつのはな	下六六	みやこなる	上三七
ますらをが	下八三	まつがは	上三〇	みゆきふる	下八九
ますらをを	上三九	かはのせはやみ	上三五	みよしぬの	上四五
ますらをを	下八三	かはのせひかり	上三一	きさやまのまの	下八五
ますらをを	上三九	たましまのうらに	上三六	たきもとどろに	上八八
ますらをを	上三九	ななせのよどは	上三六	たままづがえは	上八八
ますらをを	上三九	まつらなる	上三三	みまがのみねに	上八三
おもひわびつつ	下九五	み	上二四	みれどあかぬ	上一七
ところおもほゆ	下七五	み	下七三	みわやまを	上四
さつやたばさみ	上二六	みかのほら	下八四	みわたせば	下八三

む	むかしより むこのうみの むこのうらを むささびは むつきたち むらさきの むらさきは むろのうらの	上 一七二 上 一七三 上 一七四 上 一七五 上 一七六 上 一七七 上 一七八 上 一七九	もみぢばの もしきの おほみやびとの おほみやびとの おほみやびとは もしぬの ももづたふ ももふねの ももへにも	上 一三二 上 一三三 上 一三四 上 一三五 上 一三六 上 一三七 上 一三八	め	めぐしと めづらしき めひがはの めひのぬの	下 八九 下 九〇 下 九一 上 二五二	も	もだもあらむ もだをりて ものふの やそうぢがはの	下 七四 上 三三 下 一七〇	や	やかとをの やきだちの やきつべに やすみしし わがおほきみ わがおほきみ わがおほきみ わがおほきみ わがおほきみの	上 一四〇 上 一四一 上 一四二 上 一四三 上 一四四 上 一四五 上 一四六	やま	やまはに やまのちは やまといは やまとへ やまのはに やまのはの やまぶきの やみのよの	上 二二 上 二三 上 二四 上 二五 上 二六 上 二七 上 二八	ゆ	ゆぎかくる ゆきこそは ゆきのしま ゆくかほの ゆくさには ゆのはらに ゆふかげに ゆふさらば ゆふざれば	下 七六 下 七七 下 七八 下 七九 下 八〇 下 八一 下 八二	よ	よかにおひたる みしとものうらの わぎもこに わぎもこそ いさみのやまを ゆきてはやみむ わけがため わぎみの わしのすむ わたつみの かしこきみちを とよはたぐもに わたつみは わたのそこ わたるひの われこそは われのみや われもみつ	上 一五五 上 一五六 下 一五七 上 一五八 上 一五九 上 一六〇 上 一六一 上 一六二 上 一六三 上 一六四 上 一六五 上 一六六 上 一六七
----------	---	--	---	---	----------	---------------------------------	-------------------------------	----------	------------------------------------	-----------------------	----------	---	---	-----------	--	--	----------	---	--	----------	--	---

わ	わがいのちを わがおほきみ わがきぬを わがきみに わかければ わがころ わがさかり わがさとに わがせこが かへりきまむ けるきぬうすし そでかへすよの そのなのらじと たふさきにする わがせこに うらこひをれば みせむとおもひし わがこふらくは わがせこは わがせこを	下 五九 下 六〇 下 六一 下 六二 下 六三 下 六四 下 六五 下 六六 下 六七 下 六八 下 六九 下 七〇 下 七一 下 七二 下 七三 下 七四 下 七五 下 七六 下 七七 下 七八 下 七九 下 八〇 下 八一 下 八二	あ	あがまつばらよ やまとへやると わがそのの わがつまも わかのうらに わがふねは わがほりし わがみかど わがやどの いささむらだけ うめさきたりと くずばひにけに まつのはみつ をばなおしなべ わがゆきは わかゆつる わがゆ系に わがをかの わぎもこが うゑしうめのき かたみのねぶは	上 一三一 下 一三二 上 一三三 下 一三四 上 一三五 下 一三六 上 一三七 下 一三八 上 一三九 下 一四〇 上 一四一 下 一四二 上 一四三 下 一四四 上 一四五 下 一四六 上 一四七 下 一四八 上 一四九 下 一五〇 上 一五一 下 一五二 上 一五三 下 一五四 上 一五五 下 一五六 上 一五七 下 一五八 上 一五九 下 一六〇 上 一六一 下 一六二 上 一六三 下 一六四 上 一六五 下 一六六 上 一六七 下 一六八 上 一六九 下 一七〇 上 一七一 下 一七二 上 一七三 下 一七四 上 一七五 下 一七六 上 一七七 下 一七八 上 一七九 下 一八〇 上 一八一 下 一八二	わ	ぬかにおひたる みしとものうらの わぎもこに わぎもこそ いさみのやまを ゆきてはやみむ わけがため わぎみの わしのすむ わたつみの かしこきみちを とよはたぐもに わたつみは わたのそこ わたるひの われこそは われのみや われもみつ わがみかは をがみに	上 一四九 上 一五〇 下 一五一 上 一五二 上 一五三 上 一五四 上 一五五 上 一五六 上 一五七 上 一五八 上 一五九 上 一六〇 上 一六一 上 一六二 上 一六三 上 一六四 上 一六五 上 一六六 上 一六七 上 一六八 上 一六九 上 一七〇 上 一七一 上 一七二 上 一七三 上 一七四 上 一七五 上 一七六 上 一七七 上 一七八 上 一七九 上 一八〇 上 一八一 上 一八二 上 一八三
----------	---	--	----------	---	--	----------	---	---

をくさをと	下六四
をすぐいの	上二六
をとめらが	
そてふるやまの	上一八
をるはたのへを	下八〇
をとめらの	下七三
をのこやも	上四七
をのとりて	下八四

初句索引終

萬葉集新解の後にしるす

この書を書きはじめたのは、昨年の暑中のことであつた。それから一部分出来上るごとに、これを書肆に渡して印刷に廻したので、稿を續ける一方に、校正を見て行かねばならなかつた。これらはすべて他の勤務の餘力を以つて爲されたので、その間、随分多忙に感じてゐたけれども、幸に健康を保つて、今日に至るを得た。

はじめ自分は、ある書肆から、萬葉集の全釋をといふ交渉を受けた。しかしそれは今の自分としては、いまだその時機に到達してゐないと思ふよしを以つて辭退した。その後、この書の發行書肆からの交渉があり、それは選擇でもよいといふことであつたのでこれを引き受けた。さて選擇となれば、その歌の排列には、諸種の方法がある。これに就いて熟慮した結果、本書に見るが如き歌史的排列を取ることにした。これは萬葉集の本集の編纂法が、歌史的觀察を爲すには適して居ないので、年來本集を講じつつ歌謡の展開を語るに不便を感じてゐたからである。この目的の爲に、先年まづ教科書用として萬葉讀本を編して歌史的排列を試みたことであつた。今のこの書は、大體に於いてかの萬葉讀本の方針を踏襲し、これに註解を加へたものに外ならない。

本書に於いては、萬葉集の歌の意味をなるべく正確に傳へようとする點に最意を用ゐたが、出來上つたものに對しては、自分はやはり不満足を感じてゐる。編纂については、柿本人麻呂の項の次に、柿本人麻呂の歌集の一項を設けること、かの萬葉讀本に於けるが如くであつた方がよかつたと思ふし、解釋についても、例へばナベの解の如き、竝の意とすることを避けておくべきであつたと思ふ。重出の語に對しても、ある程度までは、重複を厭はずしてこれを釋した。おほむね世間の廣説に従つて筆を執ることとしたが、おのづから先人のいまだ説かざりしところを云はねばならなかつたものもある。しかして奇説の語を以つて評すべきものに至つては、恐らくは本書の中にあまり多くを見出し得ないであらうとは、みづから信じて疑はざるところである。

昭和四年十二月

武田祐吉

昭和五年四月十五日 印刷
昭和五年四月十八日 發行

(萬葉集新解下冊)
定價金 參圓

著作者 武田祐吉

東京市神田區北神保町十三番地

發行者 來島正時

東京市神田區錦町三丁目十一番地

印刷者 小笠原秀雄

著作
所權
有

東京市神田區北神保町十三番地

發行所

山海堂出版部

電話九段一三三〇番
振替東京二一六九一番

585
137

終

